色よく母君に事へ奉れ」とぞ聞えける。さて八郎は仲人をもて聞えつるまゝに、態とすゞろげ（伊勢物語不慮の意）なる顔して、「こは思ひ依らぬ事をこそ承はれ、もとより七郎とは仇しなかにもあらねば、彼が母をば我親と思ひ、我子をばうま孫とも弟とも思ひ給はりて是までは過しつれど、己は去年のしはす、（萬葉としはつるの略語）知りたまふ如、七郎が太刀合に打ちかち、今はおほやけの御いへの子となむなりし上に、家もかく富み榮えつ、彼は武家（日本紀）にこそあれ、頼みまゐらする君もなく、飯ほ（日本紀飯粒也）ひとつ我物とて持たる領所もなし。しかは野伏山伏の（拾遺集山伏も野ぶしもかくてこくろみつ今はとねりのねやぞゆかしき）類なり。さるを彼が妹を我子の嫡女（日本紀よめ也）とせむは、千曳の盤石（日本紀）と瓢をかけて、いづれか重きとはからむがごとし。たとへ天地は倒になすとも、（源氏物語）此事においては承引くまじ、歸りて七郎にしかのたまへ」とぞ、言ひ放ちける。仲人もさるものなりしかば、「こは易からぬ事をうけたまはる、なでふ事なき事おしてかく聞え參らせむ。御愛子宇須美ぬしと七郎の妹かへをとめとは、去年より密かにいひ契らひて、神に誓ひて違はじと書きかはし給へる事どもは聞しめさずや。しかは野伏山伏の云々―かくの如く彼は野伏山伏の類ぞとなり

なでふ事なき事を―何とて由もなき事を

直に―眞直に

先愛子の君を爰に召して、（萬葉いかなるぞと御心をねぎし古事記今云ふ吟味也）給へ」といふに、八郎もだもやらず、（萬葉爰には今云ふもだしがたくにあたる）宇須美を呼び出し、「汝七郎が妹と誓ひつるか、直に申さずんば、此父が名の恥しみもいでくべき」と責めけるまゝに、「さる事毫末（日本紀）ばかりも違はず、唯父の御哀みには、彼のをとめを我嫡女としてたうべよ」と詫びける。八郎大に怒りて、「憎きものの業かな、己ひとり子（古語）にあらずば、殺害（祝詞）せむずるものなり。さらば今速かに離れ果つべき文認ためてかの許へ遣すべし。さる心なくば、父また遠き國にも追ひやらむ。（日本紀）いで〳〵父と離る、妻とや離る、直に答せよ」も責めけるほどに、父のことばのいと畏ければ、悲しとは思へど、誓ひたるしるし文を爰には起請にあたる）なく〳〵巻きこめて、長く離りはつべしてふ文を、父がまのあたり（古語目前なり）に、わなゝき〳〵書いしたためて奥に、

みつあひによりてつけたる下紐の絶えむと更に結ばざりしを（三ツ合の糸は三ツ組の糸なり出所萬葉）

とあるを、此うへは詞なしとて、仲人はそを懐にして退出けるとぞ。

西山物語

卷之下

露の卷

仲人は彼の文を懐にして、七郎親子が前に來り、「おほし廻すことまでをさ〳〵うち匂はして（源氏物語）聞えしかど、なか〳〵承引かず、そが上に云々訇誇りて聞え給ふ故に、二人の君だちの密に（古語）うけひておはする事どもを申し出でさむらへば、吾子（古語）を呼びいだし、押してかくなむ書かせて、うけひ文までも卷き込めさせておこしたまひける。此上はやつがれも申す言葉なければ、退んで出て候ふ」と語るに、母も七郎も氣色を變へければ、かへは次の一間に聞きゐて、やと聲をたてゝ泣き伏しける。七郎妹をよび出して、「これ見給へ、かゝる際には思ひ迷ひてかひなくくちをしき名をも後の世に殘すものなり。心を一つに極めて、親兄にもやさしみなかけ給ひそ。己れも思ひしめて候ふ事の侍り」と聞ゆるに、母も、「男女の中は因るも離るゝもある習なれば言はむ方なし。唯八郎が訇り誇りて貶しめたるこそ堪へ難う思ひたまへらるれ」とて、胸痛くし給ふさま、七郎見て、「しか思す旨は刀自よりもやつがれこそ勝りて候へ。此事においては、下官此のほど計らひおける事あり、いかばかりの事ありとも、かならず其際に至りて驚き思すべからず、いかさまにも恥をとらざる樣に計らひ仕らむ」とて退きぬ。（源氏物語）さて俄に湯あみ、所を掃き清め（萬葉）かねてかくとしつらひ置きしにや、湯かたびら（和名抄今云ふゆかた）樣の物までも、新に縫ひ仕立てたるを出し、妹に湯あみさせ、髪あげさせ、（萬葉髪あぐるは男みる時の例）さて白き絹の衣五つをなむ著せて、上に領巾なす木綿を被ぶらせ、（領巾は上代女の冠り物今の綿帽子にあたる）總次には夕飯酒などの事よく設けよとなむ宣りて、妹が手をとり上坐に（日本紀）誘ひ据ゑて、希人實とし、母に對ひていふ樣、「知しめすごと、家貧しくなりて後は、傳へ持ちたる杯、陶物、（古語）文、卷物の類までも、米黄金にかはるべきほどのものは皆失ひはてけり。唯韓鞍一具、（延喜式）唐

うけひて―誓ひて

希人實―正客

やさしみ―恥辱

ほぎごと―祝事
あとひて―伴ひて

席二枚、韓竈四具、珠の椀形三くち、延喜式椀の類こは父の惜しみ給へる物よと思ひて、これまでは貯へ持てさむらひしが、妹が一代の際のほぎごとに日本紀謀りかねて、此のくさ〴〵古語を、母にも聞えまゐらせで、この程代となしつるに、三十枚ばかりの黄金を得て候ふまに〳〵、かゝる祝事に著んずる衣、くはへ持つべき器やうの物までも心構し置けり。さて申の刻ばかりにならば、七郎彼をあとひて、八郎許推して参るべし。さる上にも否まば、ふたゝび此の世にて此子が面見給ふべしとな思ひたまひそ」といふを聞きて、かへも家兄が心深きをおしをろがみ祝詞て、無片氣と泣きける。さて、「しかのたまふごと、心も淸らに定めてをり候へば、くちをしき振舞は見せ参らすまじ」といひつゝ、唯今よみ置きたりしとみえて、一くさ書いたるを懷よりとうでけるを見れば、源氏物語取田才也

色かはることの葉草にたまのをもいづれか露ときえであるべき

とあるを、母つく〴〵と見て、涙おさへながら側なる筆をとりて、

もしも世におくれて住まば露の身をいづれの草におきや賴まむ

我がせこ―我夫
のちざりしこと―なのちざりし事

と書きつけて、「老の繰言には侍れど、我がせこののたまひしごと、此子が名を松となむのらざりしことの、今にては悔しく思ふなり」とのたまひながら、

名をせめて松としよばば老の身も千歳の蔭にあえなむものを あえはあやかるなり出所萬葉

「かくいふも心細きは唯老の癖なり。さはいふものの、そこの伴ひておはさむからは、八郎も又岩木にはあらじとなむ覺ゆれば、心强くおぼせ。何とてさるかなしきめをば見せ参らせむ。今日はことさら吉日なりと卜部古語の人も來て申せし。時も移るべきあひだ、早く祝事まうけたまへ」と、せつに伊勢物語聞え給ふに、總次設けたる夕飯を禮日本紀正しく持ちいでて備へまゐらせける。さて酒は三度古語進めまゐらせて、ときにもなれば、七郎いそがしたてゝ車にかき乘せけるに、丁日本紀爰にはやつこやうの者に用ふ樣のものまでも、それ〴〵やとひ古語置きぬれば、やがて押立て出でむとす。母おくり出で、門べにしばし立居つゝ、時計源氏物語ながめ出して、そのまゝ戸の閾にうち伏して泣きいり給ひけるを、「こはかゝるほぎごとに忌々しき源氏物語御涙かな」と勵したてゝ、總次が肩にかけてかき入れ参らせけ

うしろめたしー不安心

る。さて八郎はおのが心のまに〳〵、さかり文（妻には夫狀をいふ）は書せしかど、かくて置かばうしろめたしとや思ひけむ、東の京（朱雀道より東を云ふ）に從弟のありけるが許へ、人ふたり添へてさきに早や遣しける。七郎はかゝりしとも知らず、日頃に變りたるいでたちして、つと簀子にのぼるに、八郎おほいに驚き、「こはなでふ事か仕構へたまふ、よも此方へまうで給ふにてはあらじ。かゝる姿は娶（古語）の祝事にて侍らむ、いづれの嫡妻となりて坐するや、さても俄の事なり」と、あだしぶりて（よそがましきなり）聞ゆるに、七郎聞きて、「いな、こは是の若子の嫡妻に參らせむとてこそ伴ひ來つれ」といふ。「こは思ひよらね、さきに中だちの人に聞え參らせしを如何にとか聞き取り給ふ。ことさら宇須美も從兄許つかはしたれば、今はこれにあらず。そはさまれ、（夫はさもあれなり）心得もなきに、押してかく物し給ふこそいと憎けれ。此方とあらば、幾度のたまふとも、しか答へまゐらするより外はなし」と聞ゆるに、七郎禮正しくして言ひける樣は、「のたまふこと、理なきにもあらねど、既に妹なるかへ、そこの愛子と、知りたまふごとうけひたり。なでふ事無きに、押して父の御心をもて返し給ひつる。先づかへが罪承はらむずるまでは、此文は得こそうけひくまじけれ」とて、袖より取出投げかへしたるに、八郎氣色を變ていへらく、「既に父母の心に背ける妻を離るは丈夫の道なりてふことは知り給はずや」と聞ゆるに、七郎、「たとへさあるも、一日も此の家に住まで、そこには事へまゐらせず、何の御つかへを見て心に適はずとはのたまふなり」と應ふに、八郎言はむ言葉なく、「とへばかくいふとはそこの事なり。何にまれ承引くまじ、早く伴ひてかへり給へ」と聞ゆるに、七郎色を變へて、「かく道理に當る事も否みたまふからは、何の耳に何の口をもて辯め聞え申さむ。そこと既に約め參らせし事あり、よも忘れ給はじ。又我太刀のゆくりなく（日本紀不意の義）折れたりし事をば何とか見給ひき。そは言ふべからず、ことさら宇須美ぬしは一子におはせり、かへまた我が一人の妹なり、生きとし生けるもの憐みの心無からむや。此のうへはたとへ理なき事なりとも、愛しと思ふ心ひとつをもて、よろづ承引き給べかし。七郎斯く腰折りて申すからは、この上は一言の御答によりて、かへも生きては返らうまじけれ。さる騒

のたまふなりー原本のまゝ
とへばかくいふーヒ言へば角言ふなり
何とか見給ひき—原本のまゝ

のけざま―仰けざま
たかむなさか―高胸先
犬じもの心―犬の如き心
はたくち捨てむ―又汝を斬り捨てん

萬葉も出で來ば、そこの御爲にも良からじ、心を潛めて答へたまへ、承らむ」と聞ゆるに、八郎頭をうち振りて、「おのれ先に何事を聞え置きつるか、事の繁きにうち忘れはべる。あなかしましのことや、いつまでのたまふともうけひくまじ」と言ひ捨てて、其席を起たむとするを見て、かへも今はと思ふけしき見えければ、「いでや八郎よ、其處にありて此の丈夫が振舞事を見給へや」と、男健に健びながら、かへが衣の襟ひしと萬葉掴み、引き寄せつゝのけざま竹取物語に押へ、太刀を拔きてたかむなさかを刺す。古事記八郎驚き起ちて、「さばかりとは思はざりし」とて、その柄を取らむとす。七郎眥をかへし、八郎をにらみ古語ていへらく、「汝が犬じもの心をもて、かくはかなき目を見するなり。此の太刀の乾かざるひまに、はたくち捨てむ事はいと易かれど、我母長きいたづきにかゝりし時、汝人の心をもて看取りくれつる禮に、命は汝が物となして、まかり歸らむずるよ」と言ひつゝ、二たび三たび刺すほどに、熱瓜如て古事記瓜の蔓ばなれのごとく也死にいりぬ。骸は轉臥萬葉まゝに捨置きて、「此うへは始終訟の御庭に申さむ」とて出でける。八郎起つを遲しと、かへが

わくちはに―幸になり、原本前に插訓せり

空しき屍を抱きて、涙は溢落ちて、古事記しばしありていへらく、「さても敢なかりけることよ。此八郎を鬼とな思召しつらむ、獸とな思召しつらめ。魂もし體を離れ給はずば、八郎が申すことを耳に止めて、十が一も恨を霽け給へよ。御身宇須美と氣色ある事は始より知りつゝ、もとより好き間なり、ことさら七郎には一たび物の報すべき事の侍れば、わくらはに迎へ奉り、母君をば親と崇まへ參らせむと思ひ居つるに、不意なく夕占萬葉卜者なりの者入り來りしに、そこと宇須美が間占はせさむらふに、つら〳〵陰陽の相を考へみて言へるは、此の間大いに良からず、若し逢ふときは二人ともに命あらず、又離れてすら何れか片々の命は極まりたり。これまで多くの人の間を考へ見つれども、かゝる奇しき惡しき御中は侍らず。早く避け離ち給はずば、禍來るべしといひ敎へ侍るに驚き、さるにても思ひ設けし事なれば、天地に祈り返しても添はせ參らせたく、その後四たびまで占を問ふに、皆初聞きつる詞の如し。さるは力なし、如何に離るべき術あらむと心を苦しめ、夜に日に思ひめぐらせしかど、すきまなきあはひ源氏物語むつまじき御中をしかかけり と見つ

心の外に―心なちず

れば、心の外に、そこの家と我まづ離るべき振舞を見せけるなり。こは心なき業なれど、人として子を思ふは夜の鶴にも劣らめや、まして鹿もの一人子（萬葉鹿は子ひとつをうむ物故に冠らすこととす）にてなむあれば、宇須美が身に報來たらむ事を思ひ恐れて、忘るゝ時なかりしに、かゝる事に成りゆきしは、御身その占の祥に當り給ふとなむ思ひ晴け給ひてよ。又此事をうち明して聞ゆべうも思ひしかど、七郎中々祝部（萬葉神主なり）やうの詞を聞き得べき人にあらず、しかは我が愚者（萬葉）なりと訇り笑はれむも面なしと思ひて、わざと心なくふるまひてし。猶此上にもかゝりしてふ（斯々ありしといふ事也）ことは、我ならで知る人もあらねば、いよゝ（萬葉今云ふいよ〳〵なり）母ぎみ兄君とは疎くもなりはてむ。しかして此騒をしづめて後、なき後をば懇に弔ひてまゐらせむ。唯かへすぐも今はの際に心なしと思召ししめ給ひつらむが面なく悲しき」とて、聲をはなちて泣きけり。さるあひだに人騒ぎ立ちて入りくる音するに、さらぬふるまひもてなして、なきがらをかい繕ひつゝ、一間にやすらひをりけり。時しもけふは西山の僧都を迎へて、月並の祈を申させてありつるときなるに、此僧都仁王經を讀みさして、事の始終あはやと聞きゐるしが、七郎が振舞を見るより膽魂を失ひ、御經をば火桶のなかにかい落し、おのれは沓も穿かで、そこはかとなく逃げいでしが、西山のこなたかなたを日の暮るゝきはみ（萬葉）いゆきもとほりて（萬葉いに發語行戻る也）やうやく心地づきて院に歸りしを見れば、深く楚原（日本紀しもとは木梢林原なり）にやまぎれ入りけむ、裳の裾も衣袖も、唯まよひにまよはし、脚には糞泥（詞）などを踏みつけて、目は白目がちになり、（竹取物語）顔はたゞさ青（萬葉）になりて、その後四日五日物も得たうべで病みふしたまひけるとぞいひし。

いゆきもとほり―艱むなり

公の御おきてごと―檢死等の事なり

朝かげ―朝日の影

よみの卷

かくて、公の御おきてごと果てて如月にもなりけり。

さきだたぬくひの八千たびかなしきは流るゝ水のかへり來ぬなり（古今六帖後悔の詞をかけ合せてよめるなり）

これはその頃母の詠みける歌とて、人の物語らひける。さて八郎はやがて守の御供にて、まかり下るべくしけるに、宇須美その後は頭も上げでわづらひつゝ、身は朝かげ（萬葉硬たるをたと）

いへの如くになむなるに、遠き國に發旅日本紀せむこともうしろめたければ、癒りはてんまでは此家に殘しおくべしと心がまへしけり。されど、「此家に起き臥しては、種々思ひいづる事も多く侍り。いかなる山里にも立ちはなれたる所に、靜にてあらむは此上の願になむ侍る」ときこゆるに、ともかくもとて、さるべき醫、古語又よく扶け見とるべき老女どもを三人四人つけて、紀伊の郡深草の里に靜なる庵もとめて引きうつしけり。さて彌生にもなれば、八郎は東へ下りにけり。宇須美はたゞ果敢なく敢なかりし別をのみ忘るる時なく、奥床に萬葉ひとはしら日本紀一體といふ義の御佛を据ゑたてまつり、さて亡人の法の名をその佛の御胸に書いつけて、朝夕花を奉り、水を奉り、今は一時も早く天路にまれ、萬葉黄泉にまれ、萬葉坐さむ所へ參りて、ひとつ蓮の臺とやらむに住まひはてむ願をのみぞ立てける。家は野邊近き古今集野邊ちかく家居しをれば鶯の啼くなる聲を朝な〳〵きくところにて、水の音も清く、心もすみ渡るに、いさゝ叢竹吹く風も、萬葉我宿のいさゝむら竹ふく風の音のかそけき此夕かも。いさゝは小也處がらいとものあはれなり。庭の面かき拂はねば、春の草やゝ生ひいでて、それと知らぬ花どもの綻びいでたるに、水せき入れし岸根には、山吹咲きしなへて、妻こひそむる蛙の聲などもいと近し。萬葉かはゞなく神なび河に影みえていまや咲くらむやまぶきのはな日も夕影に萬葉なれば、山々は霞みわたりて、入相の鐘の聲の遠く響きくるも、ありし西山の寺々にやあるらむなど思出づるさへはかなく、いと悲しとばかり、庭に立ち出でて見れば、煙りあへる森のうちに鶯の啼けるを、

春の野に霞棚びくうらがなし此夕ぐれにうぐひす啼くも　うちがなしは心かなしなり　萬葉

晝はまだいとのどけくて、春の光はやぶし分かずさし渡れど、古今集春のひかりやぶしわかねば石のかみ古りにしさとも花咲きにけり何の心もなければ、唯青き雲にうち向ひて、終日伊勢物語空眺するに、

うらゝくと照れる春日にひばりあがりこゝろかなしもひとりしおもへば　今云ふうちゝくは萬葉

とも思ひ居りける。友がき古語のもとより、初櫻の枝を花瓶今いふ花いけに插して、古今集露うちなどして送りけるを、床の前に据置て、つくゞくと見るにさへ、なきて別れし人ぞ戀しき後撰集櫻花雨にぬれたる顔みればなきてわかれし人ぞこひしき　とも、によび出でける。さて友だちの許へ返り事するとて、文の

咲きしなへて―咲き撓むなり

春のひかり―古今集には「日のひかり」空眺―茫然と物思ふなり

によび出で―うめき出すなり

端に書き付けて遣りける、

深草の野べのさくらし心あらば今年ばかりはすみぞめに咲け　古今集

彌生にもなれば、三十まり五日の御法、四十餘九日の御法なども、世の人聞なからむ樣に心づかひして、さる山寺を頼み、石の塔、玉垣やうの事までも、しかゞ聞え遣りて、内には親しき尼達二人三人にて、靜に法華經をなむ千卷讀みたてゝ供養し奉らむとぞ誓ひける。さて母人なむ如何におはすらむと、心去らず萬葉思へど、世のおきてにあひて、今は離りはてぬれば、みそかに便せむやうもなし。やうやく夏にもなれば、庭の草木いとくらくなりて、日はことさら暮れがたきに、その事となく物悲しくて、伊勢物語暮れがたき夏の日ぐらしながむれば　その事となく物ぞかなしき　せんすべなき時は、程も遠からねば、彼の住ひける家に行きて見れど、有りし事どもの、ことさらに思ひいづるまゝに、悲しくて出で行くに、七郎が住むなる門べを、夕暮の人間に紛れて　源氏物語　過ぎこしみれば、人ありとも見えず。うち靜まりたる古家の、門には葎生ひのぼり、軒には忍草うち繁りて、卯月ばかりの若楓のみぞ、折る人なけれ

ば所えがほに廣ごりたり。彼の時雨降り出でし群紅葉の頃をしも、唯今のやうになむ思ひ出でらる。さて庭樣の所には、石など疊み上げて、小き山ども築き列べたるは、かの母のいたづきを慰めまゐらせむとて、なき人としてしつらひたりしよ。又栗柿のわか秧、萬葉　梅桃のみづえ　萬葉わかばえの枝なり　なども、根こじて　古事記　植ゑし事も侍りしなど思ふに、心むせつつ涙のとゞまらぬに、萬葉わぎもこが植ゑし梅の木見るごとに心むせつゝ涙しながる

妹としてふたりつくりし我庭はこだかくしげく成りにけるかも　萬葉

と、懷紙に柄短かき筆して書いつけて、源氏物語　物の枝につけて過ぎける。こを母見給はゞ、殊に泣き給はむ。深草にかへりても、猶さる心ひとつになむ責められて煩ひける。時鳥の啼きて過ぎければ、

ほとゝぎす啼くこゑきけば別れにし古郷さへぞ戀しかりける　古今集

その後又いたくわづらひ臥して、さつきみなづき　はたゞ夢の樣になむ明し暮すほどに、秋にもなりけり。漸く涼しき風吹きいでて、月の影も淸くなるに、少し人心地いできて、

根こじて―根を掘るなり

さつきみなづき―五月六月

夜ばかりはせめて起きあがりつゝ、しめやかなる火かき照して、歌物語など讀むに、我がごと物思ひける人も昔より多かりき。さて寢られぬまゝに、

秋の夜のあくるもしらず啼くむしは我がごとものやかなしかるらむ　古今集

今宵はけにおもひ出でつゝ、たゞ涙の流るゝに、御經一卷よみ奉らむと思ひつゝ、奥床を見れば、蟲などのしけむ、御燈火二處まで消えたり。尼たちも鼻合せて源氏物語臥し給へるに、火を打ち出して古事記御あかしを照らし、提婆品といふ御卷を心靜に讀みゐける。さて悟の道には男女の相なしてふ事をわだつみの神のむすめ萬葉集女なりに說きたまひし所にいたりて、燈又一所ながら暗くなるに、御經を讀みさして、立つてかゝげむとすれば、「火は其のまゝに照らさでよ」といふ聲す。さて見れば白き衣を身にひきまとひたるをとめの、頭の髮はいと黑くて、うつぶしに伏しゐたり。「しかのたまふは誰そや、いと闇きに」といふに、「忘草の種をば早くも御心に蒔かせ給へるなり」とて、古今集今はとてわすれぐさ草の種をだに人のこゝろに蒔かせずもがな細やかなる頭をあげたるを見るより、現なく心暗まりて、うつせみの世

けに—ことさちに

提婆品—法華經の卷の名

仇しめきたる—他人らしき

すゞき—蹙

古語にある人と思ひ惑ひけるほどに、「こは仇しめきたる御ふるまひかな。まづ此のほどは何處にや行き給ひつる、御文も聞えず」といふに、「さればよ、今往きてはべる國は、穢のみ多くて、人の便とてはなきところなれば、心の外に隔たり參らせしぞ」「さる所へは何しに參り給ひつる」と聞ゆれば、しばし潛々とうち泣きて、「御傍を離れて、何の心をもてか參るべき。兄なりける七郎、我胸をとらへて、何事も願は叫はず、早く退出よと、氷なす劍を拔きて我を追放つほどに、倒になると覺えしが、いと闇き國に出でつる。さてその國の恐しき事限なし。身は消えもやらで、炎のうちにあかしくらす時もあり、又出でもやらで、雪氷に閉ぢられて起き臥す時もあり。或は又けしからぬ鬼獸の集ひきて、身を斷々に食ひ裂かるゝ時もあり。まして刃に語古かゝりて亡せしものは、垂氷を空樣に植ゑ並たる如き劍の林を、牛馬の面なす醜女どもの、日本紀黑鐵の策をあげて追ふに、せんすべなければ走せのぼり走せくだることしば〳〵なり。かゝる苦しさは此國にては見も聞きもせねど、少しのすゞきにも立ちかへり來て、戀しき人の顏貌を見る時は、さ

る苦しさもうち忘れ、又その人の御手より水を食べ花を食べ、或は戀しとも床しとも心に思ひ詞に述べてたまはるを、影の如くに付き添ひて承はるときは、彼劍を踏み炎に焦れ、雪に凍り、鬼に食ひさいなまるゝ樂儲馬苦しさも、此嬉しさにひきかへつゝ思ひたまへらるれ。もし何時までもかくあひ見むと思さば、必ず佛の道に入りて悟心にな返し給ひそ。たとへ御身を墨染になし給ふとも、御心だに晴れやらずば、戀しとも思す御心に付きて、幾たびも幻の中に、ありし姿を見せ奉らむ」といひつゝ寄添ひぬ。男いと嬉しくて、「さる事とも知らで、その闇く恐しき國に御伴も申さず、ひとりさすらはせ祝詞さま參らせし事の悔しさよ。かく通ひ來給ふには程も遠かるべし、その時だに知らば御車にても參らせむ。願はくはさる恐しき國には歸りおはさで、何時までも爰に留まり給へ。兄君へは如何やうにもとりなし聞え奉らむ」といふに、又打泣きて、「さ現心なく坐するを見るにつけて、いといたう悲しくなむ。今聞え參らせしごとく、日に千たび夜に百たび、たとへ御夢のうちにても戀しとさへ思しめさば、その御心ぞよき迎への御車

なり。たとへ炎の中にさむらふとも、さる度ごとにはあり通ひつゝ、萬葉つばさなしありがよひつゝ見るちめと人こそしちねは松はしるちむ御心に添ひ奉らむ。返すゞわれを愛しとおぼさば、御心の悟を開きたまふな。又御心の悟立ち給ふ時は、我が返り來べき便なし。さる時ぞ長き御別と知り給へ。さてかく申すうちに、黄泉の大王の待たせ給ふとて、したべのつかひ泉下の使なりの來立ち呼ばふ聲すなり。萬葉今は歸りなむ、明日の夜又人をしづまらせて古語人を癒させてなりこゝに待ちたまはど、迷ひ來て契らひ參らすべし」とすごゝと立ちて行くと見れば、煙のやうになむ消えうせけり。「こは何處に行くぞ。恐しき國には何ぞ歸るなる。我跡追ひて萬葉伴なり參らせむ。やよや古今集待たせ給へ」と呼ばひて、駈けゆかむとするに、みとり居ける老女ども、「こは夢見給ふか、いと物狂はし」と、つとよりて袖袂をとるに、さては夢なりしかと思へど、思へど物の正しかりしに、いとゞ戀しさのたちまさりて、「かき探れども手にも觸れねば」と獨言ちつゝ臥しけるとなり。萬葉夢のあひはくるしかりけり驚きてかきさぐれども手にもふれねば

ほきの巻

總次つら〳〵思ひけるやう、我姉なる刀自の敢なく亡せし事も、全く八郎が心の劍を兄が手に貸してかく計らはせたるなり。兄七郎は親に事ふる心の深きよりおこりて、太刀合にも恥を得、將恨の一太刀をも報いざりしが、我にしては姉が恨を八郎に報いずばあらじと、心ふりおこし萬葉思ひけれど、母に聞えたてまつらば、なか〳〵うけひき給ふまじと、密かに兄七郎に向ひてなむ、しか〳〵思ひ立ちぬるあひだ、暫しのうち東へまかり下るべき御暇を賜はれとぞ言ひける。七郎これを聞きて、「そこにしては理あるに似たれど、大いなる道をもて之をいふ時はつゆばかりも當らず。そこの八郎に恨を報いむと聞ゆるは私なり。吾がよろづ八郎に負けて、あまさへ堪へがたき恨も報いずといふは親を重んずるなれば、これ公なり。なぞやそれ私の怒をもて天が下の道を破らむや」と教へければ、うべ〳〵と答へて思ひとどまりにけり。さてかくれたる從古あら

かくれたるゆ云云―中庸に隱れ

たるより見はるるはなしとあり

はれたるはなしと、異國の丈夫ものたまひけるがごと、七郎がかくれしいきほひ四方八表に聞えわたれりける。さて八郎は黄金千枚を出して寺をたて經ををさめ、亡人の奥津城には、萬葉石を疊み珠を鏤め、そがうへに飢ゑ凍えたる者には米を與へ布を與へ、例なき御法を盡しける。この故にや、宇須美病おこたりはてゝ清々しくなりにけり。又始終をよく知りたる人の、八郎が心なく聞えけるは云々故のよしある事どもなりしと、七郎親子にも聞えければ、さては定まれる宿世源氏物語なりけるものなりし、さも知らで恨みつることの悔しさとて、交もとのごとくになりにけり。されば七郎が隱れたりし光、つひに昇る日のごとくなりしかば、西東北南の國の守より、我れ家の子にせむ、彼れ侍士人にせむと、馬を走せ牛を上せて迎へたまひしかど、七郎かつてうけひかざりしかば、しからば母を養ひたてまつるべき料にとて、遠近國の守より、黄金白銀太刀卷物まで、よき使をもて送りたうびしほどに、今は竝なき幸の人となりて、その子孫までも豐けく富み榮え侍りしとかや。こは中つ代にありし事よとて人の語らひける。

西山物語終

序

いでや、むらぎもの心のくまの八十くまを、かぎろひのほのかにしもいひわたるものは歌なり。或は又、うつせみの世の事種の五百ぐさを、うまごりのあやにしもかいつゞくるものは文なりけり。こゝに吾友太氣の綾足は、歌をこのみ、文をこのむ。さはほのかにしもいひわたり、又あやにしもかいつゞくる人ならむ。抑も奈良の大御代ゆ上つかたの言は、秋の月夜の西にくたせるごとく、唯幽かにのみ殘りたるさまになむおぼゆるとて、是を望月のたらはし聞えむことを、萬につけておもひめぐらすなべに、よしの物語とふ書を作りて我に見す。こは實に作れる物語にて、事は、漕ぐ舟の跡なき事どもなり。しかはあれど、詞は、いそのかみ古き事どもゆ考へ合せて、かの世にたらはし聞えむものとしつるに、讀得て其古言をとらむとする人には、蓋や此書もよしあるべかめれ。又是を水滸傳と號けし事は、作れるおもむきの、よく其ふみに似かよへばとて、よしのの川邊の事によせて、書屋がわざにしつるといふなる。

明和十癸巳睦月

大神太夫藤原朝臣かねよしるす

本朝水滸傳

卷之一

第一條　味稲の翁仙女と契りて百人の子をまうく

飛鳥清見原に御代しろしめすころ（天武天皇）なりけん、吉野の里に味稲の翁といふものありけり。世の業もなかりしかば、吉野の川に簗をたちて、鮎をとりて飯鮓にし、是を賣りて世をわたらひけり。翁、あるとき川の邊に出でて、鮎や寄りつらんと思ひ、彼簗の邊を見めぐりけるに、鮎はひとつも寄らで、大なる柘の枝（山桑の枝也）の流れかゝりて侍りけるを、「あな醜の柘の枝や、是が懸りて水の鳴響めばこそ、鮎もよらぬならめ」と、是をとりあげて、川の末へ流しやらんとしけるに、柘の枝、人の如く物いひて曰く、「翁な流し給ひそ、家にもてかへり給へ」と聞ゆ。翁怪しと思ひながら、いふが隨意まに持歸りたれば、

その柘の本つ枝より、一寸ばかりなる美しき兒の這ひ出づると見しが、見るがうちにひたゝと長立ちて、丈高く細やぎて、けはひいと貴き未通女と化り、白き赤き打重ねたる衣のうへに、秋津羽の襲とりかけ、紅らかなる袴を著込め、薫滿てる扇をさしかざし、いと艶なる聲して、「我翁の妻となりて此山に隱れ、千年の末を見んと思ふなり」と聞え、さてその柘の枝をとりて翁に與へ、「此枝の本より末にかけて、百段に折りたまへ」といへば、翁承引きて、手に握りて百段に折り、「是をいかにし給ふ」と申せば、「百段の枝は、翁とみづからとして產める百人の子なり」といふ。「其は又いかにして如此のたまふ」と問へば、未通女答へて、「此百段の枝は、只今の間に世にいきわたりて、百人の人と生れ出でん」といふ。翁聞きて、「さるにても、我々が子にてさむらふといふ證や侍りなん」と申せば、未通女答へて、「されば、太き本つ枝は貴人と生れ出で、すこし細きはその次々の官人と生れ出で、末の枝の細きはみな蒼生と生れ出でて、此處にいゆき、彼處にとどまり、世の有樣の善き惡しきを經て、終には我々が住む山に來り集らん。その集る人は皆我子なりとおぼせ。是がさる證なり」と告終り、その百段の枝を又川の邊に持出でて、「今翁と自として此河に流しやらん。此枝水に從ひて、夜を日をわかず紀伊の海原に流れ出でば、波に隨ひ風に任せて、只一時に國中の浦廻をめぐり、其中には唐國に行きて生れ出づるも有るべし、蝦夷の島に生れ出づるもはべらん。又海なき國は河を溯り來て、今五十年が間には、善き人惡しき人種々生れ出でん」といひ終り、翁の手をとりて「彼方へ」と聞ゆるに、白き雲立渡りて、耳香の嶽にたなびきけるを、地を蹈むなす蹈みしだき、高山のいゐりに紛れうせにけりとぞ。

いゆき―行き、いは發語

第二條　太宰府の阿曾丸勅をうけて弓削の道鏡を召し參る

井高野天皇道鏡を愛初めたまふ

飛鳥淸見原天皇、御位を廣野姫天皇持統に讓りたまふにより、卽ち藤原の宮に天下をしろしめし、又御位を豐祖父天皇文武にゆづりたまひ、つぎに豐國成姫天皇元明は皇都を奈良に

うつし給ひて、御位を清足姫天皇元正ぞうけつがせ給ふ。次に豐櫻彦天皇聖武は御位を阿倍内親王にゆづり給ふ。卽ち是高野天皇孝謙にていまそかりける。天皇例ならず御惱おはしますにより、百官思ひわびて侍りけるに、太宰府の阿曾丸、事ありて都に登りてはべりけるが、奏して申さく、「伊豫の國弓削の濱に、弓削道鏡と申す修行者のはべるは、役小角が行をつたへてさむらふものなり。祈るに其驗なきことあらず。是を召して御祈禱仕まつらせ給はんには、たちまち大御心清々しくなりおはさん」と聞えあぐるに、左大臣橘諸兄うけひかせ給ひ、其よしを奏し給へば、うべなはせ給ひて、「卽ち阿曾丸早船に乘りて伊豫に下り、その道鏡を召して參れ」となん諸兄のたまひ下し給ふに、阿曾丸かしこまりを申して、從者はいとやつし、只御急の御使なる旨を畏れて出でける。ときは天平勝寶元年二月十日、巳の時に、奈良の都を出でて、午の時に大阪戸を越え、今の淀田越なり未の降に浪華の浦に著く。里は八里を越え、ときは三時を過ぎざりければ、阿曾丸心に悅び、浪華の浦より、沖津鳥鴨云船の小さくいと速く侍るに、搔子四人を立て、

云―といふの約「とふ」によりて此字を充つ

楫取二人を立て、從者は浪華にとどめ、只五人を側にさむらはせ、申のとき過ぐるばかりに漕出したり。風よく追ひしうへに、搔子ども、爰をきはみと、力を加へて漕撓みしかば、八十里ばかりの海道を、其夜の間に追ひたらはして、十一日の曉弓削の濱に著きぬ。阿曾丸船を出でて、蓬庫の塵の首に落ちたるを搔拂はせ、冠を著、官服を著、袴を著、笏を捧げ、太刀を掛はき、沓を鳴らして、道鏡が室に到る。もとより從者を遣して前にしるべしおきたれば、道鏡道に立迎ひて禮をなす。阿曾丸中の重の上座に、彌重疊をしかまへたる上にのぼりて、勅を告聞ゆるに、道鏡かしこまりきこえ奉り終れば、阿曾丸從者を遠く退かせ、此室に侍る童どもをも立退かせ、道鏡と額を合せ耳を取交して、互にひそめきいふ事あり、いかなることにか侍りけん。さて、しばしもたゆたふべき御使にあらずとて、急がしつるにより、只行ひ仕うまつるべき具どもも僅に略して、皆珠の箱に入れて、錦の袋に納め、その表を新薦に纏き、船の中の上座に積ませ　その身は圭冠を著、襴衣の橡に染めたるを著、長き紐を結び垂れ、括緒の袴の白きを著こめ、

立迎ひ―正しくは立迎へとあるべき所なり

腰には珠ごめの柄を葛巻にしたる太刀一振を帯き、手に山多豆（廣刃の斧なり）をつき、脚には白檮の高履を蹈鳴らして、阿曾丸にしるべさせて船に乗りうつり、「御祈の修行者にさむらへば」といらへて、阿曾丸が左の上座にをれり。その日も辰の時ばかりなり。さて其船をおひかへらんとするに、風は東より吹下りて、船の上るべき汐合にあらず。搔子も、楫取も、是を嘆き、「いかにつかうまつるとも、此風この汐にさからひては、御船速く參るまじき」と申せば、阿曾丸眉根をかきて、「是はいかにせん、ちから及ばず」とわぶれば、道鏡ほゝゑみつゝ、「かゝる筋はいと安き事なり、御こゝろ安かるべし、只今海龍神に申しつけて、此波風を東ざまにむかはせはべらん」とて、手に持つたる珠數をすり鳴らして、三度ばかり唱言しけるに、波風忽ち打かへして、西南の方より吹きのぼりけるに、船は只翅の如く、その日の申の時計に、和泉の國なる高師の濱に著く。阿曾丸此驗を見て大に驚き、「かゝる行におはすれば、上の御惱は立どころに怠りおはさん。さて御車など申す旅にあらねば」とて、所の刀禰どもにいひて、脚利く走るべき馬三つを出さ

わぶれば―思ひ煩へば

上―天皇　刀禰―村長里長郷士などの類

せ、先神の具を前なる馬に負はせ、中なる馬に道鏡を打乗せ、その次なるには自身はひ乗りて、「從者どもは、只歩むにまかせて參りつけ」といひて、鞭を打ち立てて足搔をはやめしほどに、此度は平坂なる當麻道を越えて、九里餘の道を一時に追ひ通り、酉の時を申すころほひ、西の大御門の前につきぬ。さて、馬より下りて、中門の御前に道鏡をすゑおき、神具をも荷ひ入らせ、「しばし立待たせたまへ」といらへて、おのれは大宮にのぼりて、左大臣殿へしかぐゝと申上ぐれば、諸兄大に其速なりしを奇しみ、浪風を祈りかへしたりしを貴みおぼして、其まゝに奏したまへば、上かぎりなく愛でたくおぼし、「阿曾麻呂よく御使仕りたり」とて、祿多く賜ひつ、「追つて勳功の御恩賞はおはしまさん」と仰下さる。さて、道鏡には、「一時もはやく御祈仕り始めよ」となん。「又御祈につきては、陰陽寮より、よろづ承り仕れ」と勅あるに、それ〳〵申觸れて、畏み仕うまつりける。道鏡奏して申さく、「上にはおこなひの聲をまぢかく聞しめさるゝなんよろしき」と聞えあげたれば、「御祈所は寢殿の御わたりちかき對屋の中につかうま

つれ」とあるに、道鏡石占を考へて、「さる事にはべらば西の對ぞ占のおもてに叶ひてさむらふ。若し事あらば、東の對に祭りかふべし」と聞えあぐるに、「事なし」とて、木工寮より、それつかうまつるべきが參りて、西の對をかきはらひ、祭殿だつかまへす。道鏡參りて中の柱に眞杭をうちて鏡を懸け、左右には竹珠を間なく貫垂れ、めぐりの壁には葉薦を垂れて防壁とし、御前には酒瓶するふまつり、千座の置座を置き並みたるには、天津かな木を本うちたち末うち斷ちて置足らはし、又あまつ菅麻を本刈りたち末刈りたちて置きたらはし、小治田に生ふる物は和稻荒稻、大野原に生ふる物は甘菜辛菜、荒山中に住むものは毛の和物毛の荒物、青海原に栖むものは鰭の廣物鰭の狹物にいたるまで、横山のごとくうち積置き、さて携へたる山多豆は、右のかたへにさし置き、佩かせる太刀はぬき出して、前なる高机に供へて、行つかうまつり初めんとする時、春の事なれば上の愛で給ふ猫の妻どひすとて、唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きなる猫の追ひつゞきて、俄に珠垂の小簾のつまより走り出でしが、千座の机を踏みわたりて、

だつかまへ―の如き支度、準備

かな木―木の枝の小きもの

菅麻―祓の時肌をはらふに用ふる細く裂きたる

つま―端

彼のそなへおける太刀のしのぎ刃に、先なる唐猫の胸を突破りてけり。猫は聲立てくに、血はいたく流れ出でたり。御祈につかうまつりける官人は、「是は」と打驚きけるに、道鏡少しも騒がず、暫く目をふさぎ、口に唱へをはりて、侍ふ人を招きて申しけるは、「是は吉端なり、上の御祈はつかうまつるにおよばず、たちどころに怠り給ひなん」と申しもはてぬに、妻木の侍從勅をうけもち出で、橘の諸兄を召して申さく、「上の御惱只今怠り果てたまふさまにて、俄に御匣殿を召さる。又内膳司にも御食の御聞え侍り」と申さす。諸兄道鏡にむかひて、「しかれば汝が申すごとし、此上は御祈やすらふべしや」とあれば、道鏡かしこまりて、「猶此上の御祈を、しばしがほどつかうまつらん。しかれども、猫の血いたくこぼれ落ちて、御具を汚したるをいかにせん。御祈所は東の對に祭り替へてはべれば、俄にそれへうつし給ひて、御かざりどもそなへどもを作り替へ給へ。おのれも身潔つかうまつりあらためん」と申す。「さは」とて御祈所を改めかふる間に、采女のともがら承りて、身潔所をかまへ、主水司承りて、清き御井より水を汲み

運びて、盥にたゝへさす。さて身潔所には、采女ども道鏡がしるべしたり。道鏡いきてみれば、葉薦をしきなみたるうへに、素布を敷き渡し、黒木もて造れる衣桁のうへには白き浴衣手拭ざまの物を懸け、盥には柄杓を添へて、清き水を湛はしめたり。洗頭槽洗足槽爪磨などするゑて、めぐりには蒲の防壁をかけ、高床には火取を置きて、伽羅の木のよく薫るを打きりて、燒きおけり。その前には短床をすゑて、いづれも塵よく搔はらひて、采女が輩は襷をかけ裳を巻きあげて、歩板如もののうちへにつかうまつりをりける。道鏡采女のさむらふを呼びて、「おのれが衣殘りなく穢にふれたり、只今身潔つかうまつる間に、上よりはじめて下なる衣までもあらためてたまはれと申し給へ」といひつゝ、上なるも袴も下なる衣も、犢鼻褌にいたるまで、ひきぬきひとつにおしまろめて、土間のうへに投げ出したり。さて盥の前にかいつくばひて、口にはものを唱へながら、柄杓をとりて頭よりうちかづく。采女かくと承りて侍從に申せば、縫殿にまゐりて、「唯今の間にかゝる衣どもはとゝのひはつべしや」と聞ゆるに、「いかなる御威光にさむらふとも、いできなんとは覺えさむらはず」と申す。此うへはとて左大臣殿に申せば、「上の御祈と侍るに、何かおこたりはべらん。さらば奏して、太上天皇の御衣のさる清きかたにはべらんを申し給はりて、とり與へ給へ。道鏡は行に馴れてはさむらふべきが、この夜のいと寒く侍るをばいかにせん。そはそもあれ、御祈時うつりなん」と申すに、侍從かくと奏しければ、上聞召して、「御父天皇の御祈にもさるべき事なり」とのたまはせ、則ち法の御衣をも添へて玉の箱に打重ねて賜はりける。さて、道鏡は心を一つにし、身潔仕りてはべりけるに、上老髪の刀自をめしてのたまはく、「道鏡はやも行は仕りそめきや」老髪かしこみ承りて、「只今みそぎつかうまつりて侍るなり」と奏す。上聞召して、「道鏡ばこれ生神なり、さるみそぎして侍らんさまも、人の身には類すべからず。朕物の透間に拜まんや」とのたまふ。老髪かしこみ承りて、「いかにあらはにてや叡覽あらん」とて、かの身潔のよく見え通るべき渡殿のこなたの御座をかきはらひ、珠垂の小簾の編間をすこし括りわきて立寄らせたまふ。御面前には刀自二人右左に立ちて、唐めく團扇の中のほ

どを穴にしたるをさしかさねて持ちたるを、彼括りわきたる簾の編間にさしあて、大御頭の透影にや見ゆらんとて、刀自又大御後に立ちて蓋をさしかけたり。道鏡かくとも知らでありるに、固より其性いと端正しく、先づ面よりはじめて手脚にいたるまで、その色雪の如く、眉は最黒くて畫けるごとく、眼は磨ぎ出せる如く、齒は白梅の含めるごとく、髪はいとふさやかなるを渦の如く卷きあげて、銀の插頭をさし、丈は五尺をばはるかに越えて、身は肥え脂づきて骨をかくし、膊などはいとふくらかなり。さるは氣添ふは衣の色香を借らでこそと見えたれ。天皇太の大御手をのべて、うちかさねたる團扇をかい退けさせ給ひ、「小簀の編間を今少し括りあげよ」と勅ありて、大御眼をとゞめてみそなはしける時、道鏡もたる柄杓をさしおきて立てば、天皇大御袖を大御面におほはせ給ひ、大御眸をさしめぐらし、かへり見しつゝ入らせ給ひぬ。道鏡は身潔をはりて高床を見れば、珠の箱にうちかさねたる御衣あり、是をとりて香をうつし、下より上に著重ねたるに、綾の衣のこまやかなる、上の衣のなよやかなる、これ直人の衣にあらず、太上天皇の

含める—嗜にてあるる

氣添—化粧なるべし

御法衣を申したまはりて、すべらせたるなるべし、我はから守も此御衣を著なん、ほい爰に足らはし滿てりと、心中には思ひよろこびける。さて御祈所にのぼり、行ひ始めんとしける時、諸兄勅をもちて、道鏡に告げていはく、「修行一度仕りたらば、天皇御目のあたり召されて、ひそかに御占伺あるべき旨あり、然心得べし」と聞え給ふに、道鏡かしこまりを申し、既にその御行果つるにいたりて、老髪の刀自道鏡を率ゐて大殿ふかくまうのぼりける。

本朝水滸傳

卷之二

第三條　藤原倉麿石村村主奏するによりて藤原惠美押勝を討たしむべき勅あり

太上天皇崩御。よりて朝政しばらく絶えて、天下いと嚴密なりき。さる間には物語なども多かるべし。御忌どもはてて、今は憚りおぼす方もなければ、道鏡に法皇の位を許し給ひ、太宰府の阿曾麿をば、道鏡奏するによりて、太宰府の定に三島を加へて賜はり、さて道鏡には御側さらず政務をも問はしめ給ふに、世の中騷ぎ出づべき筋もおほからん。ときに藤原倉丸石村村主等、身には冑を著、手には手纏を卷き、脚には鐵の脚帶を結ひ、馬をば西の大御門の前に乘捨て、大庭の廣前にかしこまりて、「頓に奏すべき事あり」と申す。天皇その有樣を問はしめ給ひ、御まのあたり聞召すべきよしにて、大極

田居一客を引見する所

殿の高座にのぼりまし、道鏡を御左にするゑさせ、珠垂の小簾をなかば卷かせ、大御前にその二人を召させて、奏す事を聞召す。倉丸村主ともに奏して曰く、「左大臣橘諸兄、その子奈良麿呂、ともに冠を脱ぎ、裝束を脱ぎ、太刀を捨て、笏をすて、家を捨て、財寶を捨て、いづこともなく立去りてさむらふ。判官等まゐり正して候ふに、申殘せる事も侍らず、唯出居の壁に、一首の歌を殘しおきて候のみなり。其歌にいはく、

橘をこじて植ゑなばことさへぐ枳殼の實となり出でんかも

と諸兄が手をもて書付けてさふらふに、いと恐けれど、此歌の心をもて考へ仕るに、北國にしるべありて身を退きて侍るならん」と申す。又「藤原惠美押勝は、ひそかに太政官の印を盜み、東の兵を集め、近江國高島郡三尾崎の大城にこもりて候。又春日野の烽火の野守が此あかつき訟へ申さく、唐國の天皇色慾に愛で給ふおこたりによりて、臣安錄山兵を集めて、御代を奪はんとす。錄山もし本意遂げずは、船を東に拄げて、此御國をや窺ひ候はん」と申す。「されど、是は遠境の事にて候、たとへ近きにもあれ、小蠅

なでふ―何といふ

なすべき異人等、なでふ事をかせん。唯捨置きがたきは、近江國の騒にて候」と奏すところへ、刀自が輩大御前にはひ出でて奏しけるは、「太子道祖王春宮におはしまさず、御侍宿につかうまつりさむらひし内舎人、一人は明石豐丸、ひとりは小田角丸、是も二人ながら侍らず」と奏す。又「鹽燒王は、不破内親王をかねて御氣色はべりしが、是はさる御罪のよしを書殘し給ひて、ともに率ておはしてさむらふ」と奏す。天皇聞召しをはりて、大御心を惱まし給ふに、道鏡かしこまり奏して申さく、「臣おもひ得てさむらふは、道祖王は太上天皇の勅によりて、太子に立給ひけれども、我君深く愛でおぼさず、大炊王を太子とし給ふべき御きざしの侍るをしろしめして、宇治の稚郎子の御心をつがせ給ふならん。又鹽燒王は不破内親王の迷ひにかこち、是は押勝を賴みおぼして、近江にくだり給ふならん」と奏するに、天皇諾なはせて、「祖王の御行方は、俄にも求むべからず、只鹽燒王ならびに不破内親王を、急ぎて追ひとめよ。さて倉丸村主には、千萬の軍兵を賜はりて、直に近江の國へさしむけたまはん」となりける。

なりける―原本の通り

第四條　道祖王釣舟に召されて遁れ給ふ惠美押勝戰ひ負くる

道祖王は、明石豐丸小田角丸の二人を將て出でたまひ、惠美押勝を賴みおぼして、近江の國をさして下りたまふに、大津の邊にいたりませば、船どもの侍るを、豐丸とりはからひて、「君今よき御船に召されて侍らば、追ひ奉らむ人來りもとむとき、かならず見顯はし奉らん。又篷うちかけて候船に召さば、さる人又疑ひはべらん。唯彼方に繫げる釣舟を乞ひて、釣人と共に簑笠をめされ、我々も網子にやつしてはべらんには、人かならず怪しむまじきに、遠かるまじき海の邊に御船を漂はし、夜に入らば、帆を卷きて三尾が崎にうつし奉らむ」と申すに、角麻呂ともに「しからん」と申して、渚に搒ぎよせたりし釣舟にめさせ、衣袴どもは脱ぎて、太刀などもともに脱底にかくし、さるべき簑笠にかい紛れたまうて、船を十丁ばかり搒出して波に漂泛はしおはしますに、矢田

部老軍兵を將て、鹽燒王不破内親王の御あとを覓めて、大津の邊に來りけるが、浦人を呼びて、「かゝる樣の貴人ぞ、爰より舟にめされて、高島のあたりをさして漕出で給はずや」と問ふに、浦人ども答へていふ。「さるさまの女を將て、此處從船にめされたるは覺えず。さきつとき都方より、貴人の三人までおはして、釣船にめされて網などうたせ、釣などさしおろして遊び給ふは見き。彼見給へ十丁ばかりかなたの海の上に、いとちひさき舟の見えて、波の上に漂ひたるが夫なり」と云ふを矢田部きゝ得て、三人とあれば祖王にやおはさん、また浦人どもが謀りてや申すならんと思ひ疑ひ、何もあれ行きて見ん、早船漕ぎ出せと告立てて、よき兵十人ばかりをさし添はせ、搔子八人に漕ぎ渡らせたれば、一衝の息の間に、船はたゞ間近くなりぬ。祖王はよくいひ合はせて置きたまふに、追ひてまゐりたるをば恐み給はず、船のへにさしうつむきて釣針をおろし、船は唯漂はせておはしましけるに、矢田部老近く參出、「是はいかなる御有樣にか」と申せば、祖王聞召して、少し打笑ませたまひ、「世の中いと騷がし、かく鮮魚とりて侍る

さきつとき—先つ時

事は、事代主の御まねびをつかうまつるなり。鹽燒王大炊王もおはしませば、太子なきにしもあらず。汝歸りなば、我はその船を蹈傾け、天の逆手をうち鳴らし、青柴垣に隱れたりと申せ」と宣ひをはり、御船靜に搖がせたまふに、矢田部老、つら〳〵御形狀を窺ひ見て、誠に押勝には御心なかりしと思ひしかば、「御返事奏し奉らん」と申して、又大津の方をさして漕ぎ戻りぬ。祖王二人にむかひて、「よくもかく計らひつる、最危かりし」とのたまふに、「日の暮れんずまでは」とて、ある島陰に御船を寄せて、御食など奉りける。さて夜にもなれば、帆を卷きて、只一時に三尾が崎に追ひつきぬるに、押勝が籠居りたる大城を見れば、月の光にはさやかにもあらねど、湖をめぐらし入れて、大城を帶ばせる沼とし、高垣には透間をつけて、征矢負ひたる兵を据ゑ、隅の層樓にも透間をつけて、多くの射部をのぼせ、門をしめ、杙を打ち、石を轉ばし出し、眞木の抓手を切出し、兵容易く寄來まじくしたり。又打仰ぎて見れば、長き旗短き旗は空に靡き雲に亂れて、高く濱風に吹きなされたり。二人の内舍人祖王に啓して申さ

まねび—眞似

天の逆手—古へ呪ふ時にせし拍手の方法

抓手—山より伐出して木造りせるまゝの材木

く、「かく鎖してさむらふに、參り寄らん道もはべらず、夜もいたく更けてさむらへば、程なく曉にやなり侍らん、日のさし昇りてさむらはんとき、隅の層樓より見通すべき所に、君をば据ゑ奉り、下官等は冠を正しくし、衣をかきつくろひて、恭しく仕りをらば、大城の軍兵必ず見咎めてはべらんに、其まゝ押勝に申して候はゞ、押勝又樓に登りて窺ひ奉るべし、さてこそ君をば見出で奉るならめ」と申すに、承引かせ給ひて、松の大木の打垂れたるもとに立寄らせたまふに、御莚もなければ、清げに花咲きたる草などを刈布きて据ゑ奉り、はや明けなんずと思ふに、夏の夜なれば短くて明けぬ。さて其木のもとを立出でさせ給ふに、層樓より差覗く人ありと見えて、暫しありて南の大門を開き、倭文鞍置ける馬に紅の飾して前に挽かせ、軍兵等百人ばかり走せ參りて啓して曰く、「押勝層樓より御有樣を見とめてさむらふに、かくさすらはせ給ふは故こそ侍らめ、まづすみやかに迎へ奉れと申すによりて參りぬ。御車と申すべきを、かくみだれにさむらふ時なれば、脚利からねど穩しき御馬奉らせたり」と聞えあぐるに、王聞召し、「誠に舍人等が申すに違はざりつる」とて、御馬に召せば、内舍人等左右に添ひ奉り、兵等御前を追ひ、御跡方を守り奉りて、大城の内に入れ奉るに、押勝迎へ奉りて高床の上に据ゑ奉り、「思ひかけず」と申し奉れば、王は只何事も宣はず、「内裏は道鏡が亂に」とのたまひをはりて、御泪の溢れ落つるに、押勝かしこまりきこえて、「下官天皇の御寵愛をうしなひ奉りしを恨み奉りて、かく守りたるにあらず、只道鏡が天が下の民を苦しめん事を思ひはかりてさむらふのみなり。既に太政官の印をもて東の軍兵をさしまねき候に、かれ走集らんずる間はかく籠りてはべらん。さて參り集りて候はゞ、天皇は御過あらしめざるさまに計ひ、唯道鏡が首をとりて、京の巷に梟けんず。また君は太上天皇の勅によりて、寶祚しろしめすべき君なれば、天皇いかばかりに勅ありとも、おして御位にとおもひつきてはべるのみなり」と啓す間に、大城の門守騒ぎ立ちて、「官軍千萬の勢をもて、大將には藤原倉丸、石村村主差向ひたり。東の軍兵未だ走集らず、大城のうちは僅に千にみたざる兵なれば、その勢の競ひがたきを思ふ者も多くはべる」

と申す。押勝聞得て、「固より思ひ巡らす所なり」といひて、王に啓して曰く、「君ともに此處に籠りおはしまさば、必ず下官と御心を合せられて、御位を望ませ給ふなりと世に申さん。さるときは天皇の御憤募りて、下官此戰に打負けたらんときは、御命にも及び給はんと思ひ奉るがいと苦しき。官軍只城の前に集るのみにて、いまだ城の後を遮らず、只今の間に軍兵を添へて、何處へもいでまさせん。かく申すもはや事の急迫になん」と申す。さてある間に門守の軍兵等走參りて申すは、「此城内に鹽燒王なん、押勝を頼みてまゐり給ひつらん、おのれ王を捕へて天皇の御褒美を被り奉らんと申し騒ぎて侍る」と申すに、王聞召して、「鹽燒王はみづからが兄の皇子にておはすが、何とてさは申すなり。是も道鏡が騒をおほして、内裏を出給ふなるべし。よしさらば御ありかをも探し覓め給ふならんに、みづから鹽燒王なりと名告りて、軍兵の目前にて自刃にふして死なん。さありて後、我面をかへ兄皇子の御首なりとて欺かば、長く兄皇子は隱れおほせ給はん、押勝しかはかれ」とのたまふ間に、層樓に火つきて大門も燒けのぼり、官軍は亂入りて、

押勝が軍兵は多く討たれにければ、押勝冑を著、甲を著、手纏も卷きあへず、四尺ばかりの太刀を抜きて、中門を少し開かせて、おのれ一人躍出で、左右に伐靡け、竪横に薙立てたれば、見るが中に千首を斬落す。官軍押勝が武威に怖れて、表をさして引退くを、押勝更にも追及かず　しづかに中門をさして内にいり、二人の内舍人を差招くに、いづこにも居らず。いかにしつらんとて見れば、明石豐丸は、祖　王の御裝束を給はりて、御冠をも著、又小田角丸は同じめしがへにもたせ給ひし御裝束御冠を著て、さて押勝に向ひ、「大臣は是より我君の御供まうして、何處へも御ありかを定め給はれ。我々二人は思ふ旨ありて、只今軍に向ひ、御兄弟の御心を安くし奉るなり」といひをはりて、中門をあらゝかに引明け、「我は太子道祖王なり、我は兄にて鹽燒王なり、天皇を恨み奉るにあらず、道鏡が横さまなるを憎みて、押勝を頼みおもひて、此處に來れり。さるも押勝心を遂げず、既に官軍をひきうけ奉れば、正に是れ朝敵なり。我々かくてあれば、押勝が黨なるを恐み、只今兄弟刃にかゝりて死ぬべし。首を取歸り道鏡に與へ、天皇にもか

くみおきたる旨を奏せよ」と告終りたまひ、互に劍を拔合せて、先づ面を突傷りさて互に胸さかを刺連きたまふに、倉丸村主遙かに見て、「御命を損ふべからず」といひつゝ翅來るあひだに、痛く突交したまふによりて死入り給へり。御首をたまはるべきにもあらねば、御骸は其儘にて、御棺ざまのものとりまかなひて、馬に負上せ、軍兵どもつかうまつれり。さて炎は大城の外重をめぐり、すでに中門にも火つきたるに、押勝が軍兵いたく討たれ、或は火に燒失せなどして、今は殘るべき人もあらず。倉丸村主進みに進みて中門も押破りて入るに、押勝はいづこにも居らず。後なる門はとて見れば、少しも開きたるさまなきに、いづこに立匿れん隈もあらず。又めぐりの沼なんいと深く見ゆるに、打越えてゆかん所もあらず、さらば押勝は空從翅りいにけんとて、只惘れて立てる間に、火は中の重外の重に燃え渡りければ、官軍も大城の前に走せ出で、倉丸村主もさぶらひえねば、是も外の方に立出でて見るに、火は風のまに〳〵燃えとほりて、隅の樓も殘りなく崩れ落ち、高屏などもなくなりにたるに、さばかりの圍は見るがうちに、只春の燒

いにけん―去りしなちん

野なす亡びにけり。さて見れども押勝もあらず。押勝が家に名高き軍兵十人ばかりは、その行方もなくなりにければ、倉丸村主は爲方もなくて、二人の宮の御骸を守り奉り、空しく京へ歸らんとしける。

本朝水滸傳

卷之三

第五條　豐丸角丸が骸を燒く并佐保の大道に首を梟くる

倉麿村主の二人は、豐丸角丸に欺かれて、その死骸をいよ〻二王の御骸なりとおもひ、棺ざまの箱に納め奉り、此まゝ都に守り歸し奉らんと思ひ居りしに、又思ひめぐらして相議りて曰く、「我々勅を蒙りしは、只押勝を討つべきのみなり。二人の王を殺し奉れと侍る旨にはあらず。是は不意かく大殯の時にもあらず、横さまに刃に伏して雲がくれましぬるを、御顏いたく疵つきて侍るに、此儘に守かへし奉らば、我々いたく責奉りしと、かへりて御怒を蒙り奉らば、その御ことわりをいかにせん。又戰には勝ちて多くの軍兵は討ちとり、大城は燒きはらひてさむらへども、押勝が首は得ざりしと申さば、甲斐なき爲行とやおほしなさん、さはいかにせん、かゝらばとやせんずる」と、心得深き軍帥を集めて、種々いひあはせてはべりける中に、物部勝成といふもの思ひめぐらして曰く、「下官思ふに、道祖王鹽燒王は惠美押勝をたのみおぼし、共にこの大城にこもりませしともしらず、城は堅く守りてはべるに、官軍爲方なく、時しも濱風のはげしかりしに乘りて、只めぐりの園を燒拂はんと計り、大門高垣に火つけてさむらひしに、思ふに違はず軍兵走出で候ふに、心やりなる戰仕りて、多くの軍兵も討取りぬ。さても山風の吹替りていと荒く侍りしまゝに、中門にも火つきて候ふに、寄人も攻入り難く、籠りたるも出でがたくや侍りけん、戰しばし引しろひてはべりけるとき、中門の櫓に冠裝束した る貴人の二人までいでおはし、いと高く御聲をあげて告りてのたまはく、我は是太子道祖王なり、我はこれ兄にて鹽燒王なり、押勝をたのみおもひて此城に籠りてはべるが、天の時いたらず、地のとき又いたらず、只今國津御神に御暇を乞ひ奉りて、黃泉の王に仕へまつるなり、と告りをはらせたまひ、側におはしましける官女とおほしきを捕へま

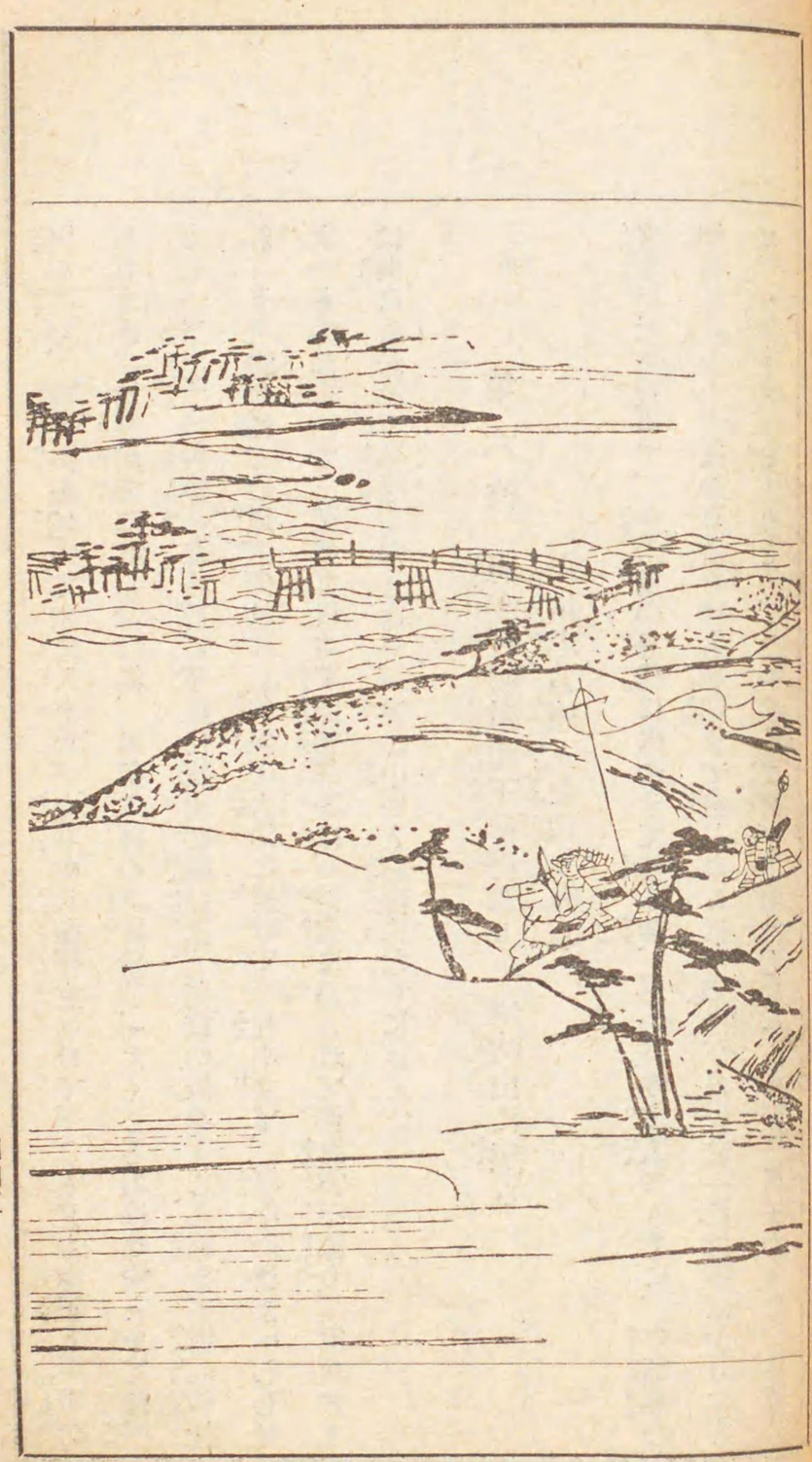
雲がくれましー死に給ひ

心やりなる―心地よき、氣のせいせいする

はしに―折しも

し、是は不破内親王なり、是まで將て奉りしかど、心遂げず侍るに、只今伴ひ奉るなり、と宣ひ、太刀を拔きて刺殺したまひ、さて御兄弟の王は、互に御胸さかを刺してかくれ給ふ。さるさまを見奉り居しかど、いたく炎に遮へられてはべるに、參りのぼらん道もはべらず。火少し燒通りてはべるまゝに、軍兵に申付けて槽とふ槽に水を湛はし、只往通るべきばかりの道をひらけとて、手々にそゝぎかけて侍るまゝに、辛苦して中の重に入りて、さりとも御骸を殘し奉らんと思ふはしに、惠美押勝も樓にのぼり、炎にまぎれて死にけると見えたり。さても水をそゝぎ柱を打かへし壁を破り棟瓦をうがちて、二王の御骸、ならびに押勝が骸を炎の中より引出してはべれど、いたく燒けたゞれて候。又内親王の御骸ははやく火のうちに紛れたまふならん、僅に御裳の燒殘りて候のみなり、とて、いかなる衣の端をも燒焦して見せ奉らん。又二王の御骸は只今城の内に持行き、いたく燒きたゞらし奉らん。さていかなる人の骸にもあれ首をとりて燒焦し、これを押勝なりとて持歸らんに、誰かは正しはべらん。又押勝が家人に名高き武士のさむらふを、十人あまりの首を斬つて大方に燒きたゞらしてもてかへり、大道に梟並みはべらば、今度の大將は譽れ仕給ひけると人申さんに、上の御褒美厚くはべらん。我々も祿蒙り奉らん筋なり」と、よく辨へて申しけるに、倉丸村主これを聞き、「よく思ひ巡らしたり」と讃へ、「いかさまにも押勝等逃出づべき透間もあらぬに、定めて炎のうちに紛れ失せけん。是欺くに似て僞にあらず、さらばしかせん」とて、二王の御骸を箱より搔出して持ちて行き、燃えのこりてはべる柱どもを集めて、彼方此方燒爛らし、又こなたかなたかきさがして、首てふ首を拾集め、すこしも押勝に似つきてはべらんとて見るに、よく似たるぞ一つあるを、似ざる方ばかりを燒きたゞらし、女の裝束どもの端々殘りてはべるを、是もさるべき所をとりて、脚などの燒けたゞれてあるを引出して、不破内親王に似つくべく爲構へ、押勝が以下の首十五、よきさまにつくり立てて、ひとつ〳〵名を記して札を立て、軍兵の行列を正し、旗を立て、鉾を立て、戰に勝てる佳儀を述べ、酒をもり、歌を謠ひ、鼓を打鳴して行列を整へ、瀨田をわたり、石山を越え、宇治を過ぎ、挑

挑川―泉川、即ち今の木津川



川を渡り、奈良山を越えて京に入りぬ。左右の兵衛督立向ひて、ことどもを正し、戰のありさま、始終委細に奏しければ、天皇大御心落居給ひ、「よくことあげせずとりては歸りし。二王の御骸、ならびに不破内親王の御骸は、御位の例をすこし略きて御葬仕れ。又押勝をはじめ以下の首は、佐保の大道に梟けて、札を立て、事をわきまへしらせよ」とのたまはす。又倉丸村主軍帥物部等は、御前に召されて御恩賞を蒙り、軍兵どもは例にまかせて祿厚くたまはり、世の中いと靜穩になりにける。

第六條　惠美押勝道祖王を將奉りて伊吹山に隱る　白猪老翁祖王を預り奉る

官軍いたく攻めて、中の重の忌門に火つきて侍る時、おのれが家人のうちに、年頃思ひ賴める武士十人ばかり侍りけるを招きて申しけるは、「軍いと迫れり、此押勝ばかりならば、官軍千萬の勢ありとも、たやすく伐靡けて追散しはべらんが、祖王かくたのみきこえまして不意おはしませり。又豐丸角麻呂ともに明き心をもて御命を惜み奉り、おのれに御身の上を賴みおきて死ねり。今は王を將奉り、此圍を逃れ、時を待居て心を遂ぐべし。汝達我に伴ひ給へ」とて、王を負ひ奉り、さてかよる時のために用意したる浮橋を出して、いとやすく後なる沼を打越えにけり。さて道をば山陰の八十隅にさして行く。かよる術は寄人の兵に知らざりしかば、後より追ひ來る人もあらず。王行きなづみ給ひしほどに、軍兵等かはるゞ〳〵負ひ奉りて、その日の夕つかた伊吹山の麓に到る。人皆疲れたれば物食はんとて、怪しき家にいりて、米を買ひ鹽を買ひて、先粥を煑て食ぶるに、「酒やある」と問へば、怪しき老女が「濁酒こそはべれ」といふ。「酒肴は」といへば、「何もあらず。此處は山の獵夫のみ住むあたりにて、大野の原は侍れども、辛菜一房つくり植ゆべしともせず。此老女が聟の候が、これも彼の獵夫にて候。晝は林に交りて鳥を捕り、夜は山に入りて獸を射とり候。又此山の上に久しくおはします、山の獵夫のおほきみのおはすが、數多の獵夫を召抱へ、大なる城を構へ、富榮えておはします。山深き所なれ

知ちざりし―知ちれざりしの誤か、但原文のまゝにても通ず

ば、國の守もしろしめさず、貢などもせず、又何の役もはべらず、いと豐けき王なり。御名は白猪と申すなり。此老女が聟も卽ち御家人にて候故に、をり〳〵は召されて王の御用は承るなり。此夜もし御もとに參りけるにや、又山の獵に出でてや侍る。又老婆が娘の侍るは、王の姫の此頃煩ひ給ふに、御伽に召されて候へば、今夜此老婆一人ありて何の御饗應も候はず。いかにせん」と申す間に、軒近き山道を下り來る人ありて、

　鼯鼠は梢もとむとあしびきの山の獵夫にあひにけるかも

と云ふ歌を謠ひ、弭いと短き弓に獵箭握りそへて、栲の衣に栲の脚帶し、枯れたる草の葉を頭巾にして、家の戸をば脚もて押開き、濁みたる聲して「老婆子待給ひつらん。今夜は山風さわぐに、鹿も猪も兎らも、驚き走りて、一二三度射違へてはべるに、惜しき征箭を失ひつる。此鼯鼠が捕られたるに、まづ山の神を祝ひて歸りぬ」といひつゝ、武士の多く入居つるを見返し、又上座におはします君を、怪しげに打目守りて、「老婆子、これは何方よりの賓客にや」「是は先つ方此山道を踏違へて來り給ふ人々なり。いと飢ゑ給ふとて、錢

目守り―見つめ

を出して米を買ひ、粥煮させてめすなり。酒は濁酒を賣りて候に、酒肴はと問ひ給ふにつきて、老婆が問はずがたり聞え奉りて居れり」といふ。聟聞きて、「酒肴は此鼯鼠に過ぎたるはあらじ、いでまゐらせん」とて、皮を逆剝にして、乾鳥の如くあぶり立てて、土器に盛りてさし出し、「さて賓客達は軍兵達な、いたく血のつきたるもおはす、さは軍に打負けて、山に隱れんとてぞまぎれきたり給ふならん。今老婆が問はず語り聞えたりとあれば、定めて委細聞き給ふならん。我王は獵夫の王にておはすれど、かゝる人々をばほしがりたまふに、たとへうしろめたく逃來り給ふにもあれ、是ほどのうちには、すこしは武士の心得あらんもおはすべければ、それは王の御眼にためし給ひて、强き人をば武士にし、弱き人をば獵夫にして、分相應使ひ給はん。さいへば、おのれは獵夫なれば弱きものなりと覺さんが、これ見給へ、此腕のふくらかなる、この脚の太きを」など言ひ誇りてやまず。老婆がいはく、「今聟が聞え奉るさまなり。もし山にかくれんとおぼさば、此聟にしるべさせて、王のもとにおはして、御身のうへをなげき給へ」と云ふに、押勝おもひめぐら

うしろめたく―うしろぐちくの意に用ひたりと見ゆ

すむねあれば、「よくこそ教へたまへる。さらば御しるべ頼み参らせん」といへば、聟聞きて、「山は麓をめぐりて行く、道は平坂にはべれど、そこを過ぎては林木原いと深く、石群こごしく立重り、谷をわたり岨を傳ひ、打橋をわたり、石橋を踏みて、雲霧を千わきに別きて、辛苦うじて登る道なれば、月はよく照らして侍れど、木群茂く立榮えたれば、荒雄といへど、いきなづみてさむらふ。武士だちはいかにもし給はんが、女びたる貴人のいかにおはしまさん」といへば、老婆聞きて、「しからば錢を出して、此林の彼方に、よき牛持ちたる獵夫のはべる、その牛を僱ひて、貴人をば乘らせ奉らん。そのうへにも錢惜しみたまはずば、其子牛のはべるをも僱ひてまゐらせん。又續松などもなくてはあらじ」と、慇懃にきこゆるに、「何かさる事を惜しみ侍らん。今夜のうちにその王のもとに参りつかん。さらば牛二つ雇ひて給へ」とて、錢一貫を出せば、これは過ぎたりとて、只錢三百をとりて、餘れるをば返すを、種々にいひことわりて老婆に遣りたり。さて老婆が行きて牛二つを挽かせ、續松どももいと多く持ちて來て、牛にとりつけなどす。

くまび―限邊、奥深きところ

王は御身のいと輕くおはすに、子牛の背に衣を打鋪きなどして乘せ奉り、押勝は、身の重ければ、親牛に乘り、聟は繼松を提げて前に立ち、軍兵は打續きて彼のいひつる山道にかゝるに、聞きつるは最易く、かく行かんにはいと難くもあるかな。六月廿日ばかりの月は、山の端にさしのぼりたるに、短き夜の頃なれば、いといたく更けぬるにや、涼しき風吹渡りて、笹のくまび鳴りさやぎ、谷の水音遙に聞ゆと思へば、めぐりくだりては石橋を渡り、峰の松風は雲井にと思へば、めぐりのぼりては木の根に取縋り、獨梁などの打渡せるをば、牛より搔下し奉りて、御手をひきて、殆げに渡り、岩根這出でたる所をば、軍兵ども負ひ奉りて行くに、曉ちかくなるにやあらん、森の烏飛びわたりて、鳴く聲するに、山の蟬なども起出でて鳴くなり。霧深くこめていづこともわかぬに、聟が繼松うち消ちて、「参りつきぬ」といふ。さて見れば、雲の透影に樓めく家もはべり。石垣うち疊みたる上に高垣しわたし、弩拋ざまの備もしおけり。かく人の登り來けるを告ぐるにやあらん、時守とおぼしき人の樓より見おろして、鼓のいと大きなるを、い

とはやめてうち鳴したれば、鉾をさゝげ鐺をふりあげたる人の、幾人も出來て、「何れの人々の登りたるにや」と問ふ。聟答へて、「是はおのれが役なり、よき人等を案内して參れり、王にとく申したまへ」といへば、「朝霧のまがひに汝をば見出さゞりし、聟のえみしか〳〵」といひて、其儘門を開きて、「賓客達まづこなたへ」といふ。押勝まづ牛よりおり、王を懐きおろし奉り、皺びたる御衣搔繕ろひ、御冠を召させ、禮正しくしてつかうまつりをるに、鹿の皮を袴にしたる男の禮正しくして、一人二人出迎ひつゝ、「此方へ」と申す。押勝、王に伴ひ奉り、軍兵ども後につきてまゐるに、獵夫の王にやあらん、黑き木の皮もて作れる冠を著、麻もて織りたる袍のいと黑く染めたるを著、袴は狹靑なる麻にて、手には扇を持ちて、板敷の下に這出でたるを、押勝早く見れば、稚くて別れつる兄の豐成に違はず。こはいかにと思へど、豐成は三十年以前に、難波の海に落ちて死にける物をと思ひつゝ、うち目守るに、すこしもたがはざれば、「かくさむらふは惠美の押勝なり、上座におはしますが太子道祖王にておはします。そこは我兄の豐成にてやおはす」といへば、あるじは禮儀を打忘れ起きあがり、押勝が面を見て、「君はいまだ生れまさゞりしかば、面知り奉らず。汝いまだ總角にてはべるときなれど、冠しつる面ざしもかはらず。是はいかなる事ぞ。都の人の傳とてはなけれど、ほのかに言渡るを聞きつる、藤原仲麿こそ天皇の御寵愛厚く、位は大保（右大臣）に任ぜられ、又家は大職冠より　面伏なる―何となく氣はづかし

このかた、國をたすけてあしき人をば抑押へ、軍には打勝つの功ありとて、藤原惠美押勝とたまひ、そのうへ御寵愛にあまり、一位を授け、大師に任じ給ふ（太政大臣なり）となん。さる事の後は聞かざりしに、いかにしてかく太子の御供つかうまつりて　山のかくれには迷ひ來つる。思掛けず」とて打驚くに、押勝如此々々のよしを語りをはり、さて「我兄の翁は難波の海に溺れ失せ給ひぬとうけ給はりしに、いかにしてかゝる御有樣には候なり」といへば、老翁涙を押へて、「汝はかく窶れたれども、功勳あり、我は功もなく給仕もなくて、かく山籠りの老翁となり降りたるに、弟の汝にも面伏なる。さても往事を語るべし。御前をば畏み奉れども、始よりとりて終まで聞え奉らん。既に三十年ばかり

の昔なり、おのれいと若くて侍りけるとき、公のことにつきて難波に參りてさむらひけるに、公のことはてず、春秋を滯りはべりし間、住吉の少婦といふ遊女に馴れて侍りしに、多くの財寶を失ひ、人を欺き世の掟を背きてさむらひけるにより、ある夜ひそかに其少婦と心を合せ盜み出したるに、この事世に漏れ聞えん事を恐れ、浦人をかたらひ、下部をかたらひ、豐成難波の海に舟を浮けて、酒たうべて侍りけるが、あやまちて海にいりぬと申しながし、さて其少婦を將て、暫しがうちは滋賀の里の領所に匿れ、其後爲方なくなり降りたるによりて、此山の獵夫となりしが、何時となくかくなりあがりて候に、その少婦も相離れず、今は一人の娘をさへ設けて候につきては、天下若し騷がしくならば、再び蘇生りたるおもひにて、君をたすけ奉り、民を惠みつかうまつりて、伏せたる面を世にあげんずとおもひて、さる心得ある人と見れば、野伏山伏のものを召入れて、應分召使ひて候に、今は我を王と稱してかしづき聞ゆる人千人に越えぬ。さてかく山守の老夫にははべれど、兵器は尤も多く貯へ侍り。又麁栲にこそあれ、かく縫ひ仕立てさせて、昔の姿をやつし侍らず。さるをかく思ひかけず、太子のおはしましたる、ならびに汝が參りたるも、遠つ神祖の捨て給はぬなり」とて、天に仰ぎ地に伏して悅ぶ事更に止まず。「娘は此ほど煩ひて候に、髪も束ねざれば恐れあり、妻の老女は御目賜はるべし」とて、「是へ」と聞ゆるに、裝束ども禮儀正しく搔繕いて出でぬ。王始終り聞召して、「いと珍らかなり。我舍人豐丸角丸二人は、兄皇子鹽燒王ならびに我道祖の名を告げて、骸を殘して欺きしかば、我又暫し世を匿れすまはん。今より豐成を賴みきこえん」とのたまひければ、豐成畏りを申し、さて、「此老夫が豐成の名は深く匿して候に、是を知りたるは唯妻と娘のみなり。君にも又白猪老夫と呼びくだし給ふべし。さて御饗應仕らんにも、かゝる山棲なり、唯獵夫どもが捕りもて來つる鳥獸のみなり」とて、みづから高架の上にをしきをするゑて王に奉る。さて押勝には足つきたる折敷をするゑ、次なるは皆低くして置並みたり。御土器のうちには、山鳥山鳩雉子兎狢山羊やうの肉をもり、菜は百合筍葛薯蕷などをもりたり。御酒は淸酒と濁酒にて、酒肴は乾鳥澤蟹防風を虎杖

をしき―折敷、食膳

の酢にひたしなどし、山桃毛桃覆盆子をも怪き土器にもりて出せり。王をはじめ奉りて、押勝より軍兵等にいたるまで、飲みをはり、食ひをはりて、日も高くさし登るに、「昨夜は夜通にいねまさで、かゝる荒山をのぼりたまふに、いと疲れ給はん。王をば暫し靜まらせ奉らん。押勝も軍兵等も先うちなびきたまへ」とて、とりぐ〳〵其搆をなんしける。

なびき―寢床に横たはり

本朝水滸傳

卷之四

第七條　豐成が娘狹霧姫を道祖王に奉る押勝印を授けて七人の物部を國々に出し自ら東國に下る

いと疲勞れ給ふによく睡ねたまひて、夕ぐれがたに御目覺めたり。軍兵等もいたく疲れて、暮るゝも知らず寢ねつ。押勝は暫し寢ねて只珍しき心地するに、又も寢難にしければ、起出でて兄の翁が閨に入りて、來し方の物語す。白猪翁問ひて曰く、「汝幼稚かりしとき、栗田朝臣眞人が娘を、家の妻に喚ぶべき契約しけるが、いかにありける」押勝答へて、「さればなん婚びて候に、子まで生みてはべりしが、二年以前母も子もなくなりたるに、その後妻をよばず。さるは、この度の軍にも心がかりあらず。舅の家は我騷動によりていかにかはべりつらん。されど、朝臣は亡せ給ひて家の子なかりしかば、他の子

貰ひて家を讓りたるに、罪はすこし輕かるべし。その外は心がかりなきさまに事を取り治めて後、三尾が崎には籠りて候」と申すに老父はひとつ〳〵聞得て、「そは能くしたまひつるかな」とて、安堵ぬ。押勝兄の老父に向ひて、「我兄の老父に言のうはべなく問ひ奉りたき旨あり。老父のかく住ませたまふ御有樣は、郭を遶らし藏町を搆へ、人多く集めおかせ、牛多く飼はせ給ふ。眞に此山の王のみならず、大國を領する王なり。いかに獵夫を召抱へおき給ひて、鳥獸の市に賣らせ給ふとも、夫はいかばかりならん。何の御德にか斯く富榮えましける」と問ふに、老父微笑みて、「其不審よしあるかな。うけたまはる如く山の獵いかばかりの事ならん。此伊吹山は黃金出づる山にて、彼の陸奥山に黃金花咲くと詠める所には勝りたれど、昔より人知らずはべるに、此山に獵をして遠近さまよひありきしとき、不意其金の氣を知りて、一人二人の人を使ひて、彼黃金を掘り出せしに、只泉の湧出づる如く、かき拂ふ草の生ひ出づる如く、取れども穿れども絕えざるによりて、先三年ばかりは黃金を取り貯へ、其掘らせつる人をば、事よく云ひ聞

言のうはべなく—心の底より

よしある—故ある、謂あり

黃金花咲く—萬葉集大伴家持の歌「すべちぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがね花さく」

かせて、まぢかき家人とし、又その穿りつる所は他しるまじく跡を隱し、扨その威勢をもて多くの人を召抱へ、城もかく繞らして候。かゝる事を知りつるものは僅に十人あまりの人に過ぎず。その外は唯獵の業をさせて、是を役に申附けて候に、人皆我を獵の王と稱し候。此上にいかばかりの金も、今にも掘得べき搆へしおけり。元來かゝる山邊に住む山人なれば、心いと直く侍るに、我かく冠裝束して侍るを見て、只何となく恐れて候ほどに、都あたりに走出でてこれを訴へんとするものもなく、元來恩深く加へおきて候へば、かく王の忍まさんにも、山の嵐の吹通ふ外は、何方に洩れ出でん恐も侍らず」と語れば、押勝、「さるにてぞ訝しさは解けぬ」といふ。さて刀自も出でて是彼と都あたりの形樣を問ひ出でて涙落しなどす。娘は、今朝より作色のけなども忘りつるに、湯など浴せ髮など梳きかへし、裝束いとよくして、刀自が押勝に引合せたるに見れば、年の程は二十なりと云ふには幼稚びて、眉の樣より始めて面もち云はん方なく調ひて、髮の長く引きたるまでも、大宮の内に時めげる　夫人妃など申すにも、かゝる容貌はお

作色のけ—上氣のすること

時めき—今をさかりと榮え

はさずと覺ゆ。姫はかゝる山懷に生ひ立ちて、都の手振は見習ふ可くもあらねど、父母能く教へて生育てぬるに、よろづふつゝかならず、何心なくてうちいらふ事ども、かへりて馴れたる方にはたち勝りて見ゆるに、押勝、「名は何とかのたまふ」といへば、妻の刀自うちゑまひて、「山の名を伊吹と申すになぞらへて、えにしあらば都にもはひ出でて、神實うませよなど祝ひはべるにつけて、天津狹霧と呼びて候」といらへば、翁もにこやかにて、「今朝なん假初に聞えし如く、事あらば都へと思ひ立ちて候に、かゝる荒山中には、誰を推賴む人もはべらず、よし斯くて老いくだちね、事に附けては打まぎらして、都にも出し、由緣ある方をも賴み奉らん、かゝる山住を苦しとな思しそ。さる間は、命の限り狹き袖にも養育み立てんと、此母にも申聞かせおきつ。さて不意王おはしまして、かくながら年月をおはすべきに、山川の神もよりて仕へまつるときなり。此老父喜びの餘り歌仕りたり、押勝啓したまへ」とて硯取り出させてしるす。

岩根ふみ來し君なればつぬさはふ岩が根まくらゆるしてんやは

な思しそ―思ひ
給ふなかれ
命の限り―一生涯

といとめでたく書きつけたり。押勝うち喜びて、「君もかく賴み聞え給ふに、雲霧のよそにかい紛るゝ御憑もおはさねば、これさへ神の引合せたまふならん」と愛でて、御目の覺めおはすに、かい起し奉り、御頭洗など奉り終りて、「今こそは我姪にて候狹霧姫なるが、御側仕うまつらせたく、主人の老人どもが打嘆きて侍るを、委細にうけたまはりはてて候に、兄の老父歌つかうまつりたり、御けしき侍る御答を給はりて候はゞ、主人等も日比思ふ事のかず〳〵かよひ侍らん心持すべく思ひ給へらるゝ」とて、卽ち歌奉りければ、「いと珍らかなり」とのたまひて、「何事も緣にこそ、頓に答へて主人の老人等を慰め侍らん」とて、御硯めされて、

岩が根をまくだにあるをぬばたまの黑髮しかば我うまいせん

と、いと貴く書付けて給はるに、押勝二人の老人にいたゞかせければ、「今は思ひあまれる事もはべらず。姫も歌は好みて折々言出でぬれど、聞く人とては己等只二人にて、花にも月にもいひかはして候なり。さる筋もものの御紛れには」など答へて、やがて姫に

まく―枕とする
うまい―熟睡

御土器取らせてつかうまつらせける。さて御夕食など奉り終り、兵どももたうべをはりければ、今朝より老父が觸れきこえて侍るにぞ、山をはひ登りて集り來る兵ども五百人ばかり、庭にも木間にもむれゐける。押勝いと頼もしく思ひて、王にも斯くと申す。老父押勝相並びて左右に床几をさし並べたるに、老父床几を押勝に讓りて曰く、「汝は弟なれど、既に位は一位をたまはり、官は大師に任ぜられたり。おのれは大納言にも進まで、あまさへ官位を奉り還したれば、兄といへども左に居らんや。今より汝をして大將とし我は副將軍たらん」といひ、禮を厚くし我徒にもかく聞え並べ、さて入りて押勝と謀りて曰く、「既に斯くの如し、いと心安くおぼせ。召し連れたまへる兵のうち九人をば爰に止め、七人の兵を選みて彼印を與へて國々に廻らし給へ。さは明白ならず名を更へ姿をやつして、道鏡を討たんずる心はべらん人をば、誰にもあれかたらひきこえよと、云ひ聞かせ給へ」などさたして、彼是と撰出づるに、押勝がいはく、「獵夫にこそあれ、昨夜御知邊仕まつりたる男は、功の始めある者といはん。彼何處にかはべる、名は何とか」

あまさへ—あまつさへ

だみ—獨り

といへば、老父聞きて「彼は東國の夷なり、よて直に胡をもて名とし、卽ち胡丸とよびて候。彼日頃物語する事あり、召出して問はん」とて、「胡丸やまゐりてある」と呼べば、いとだみたる大音にて、「これにねまりて候」とて出づ。さて日頃聞えつる胡の棟梁カムイボンデントビカラはいかに」と問ふに、胡丸答へて曰く、「さればそのトビカラは、夷の王なり、印たまはりてめさば、喜びて御軍に仕うまつらん」押勝聞きて、「夷の常の形勢は何なるものぞや」胡丸かたりて曰く、「そも胡と申すは、男女交り居て父母の分別なく、冬となれば穴に住み、夏となれば木末に住み、寒ければ、毛をしき皮衣を著、暑ければ肌に著けず、山に登る事は飛ぶ鳥の如く、草に隱るゝ事は走る獸の如し。恩を受けては能く報ひ、怨を蒙りては惡しく報ふ。矢は頭髻に納め、刀は衣の内に佩き、あるは同族を集めて堺を侵し、或は從弟を將ゐて業を掠め、打てば草に隱れ、追へば山に入る。さるは、古へ倭建尊、陸奥に天降ませしとき、御德には平伏ひ奉れど、時代經て候に、今は貢仕る民にはべらず。然れども良き大將を向けられてはべらば、倭建尊の御例も候

かへりみせず―敵に背を向けて逃げんとはせず

我と思ひあがり―我に如くものなしと誇り

なり」と申す。老父聞きて、「古より東壯士はかへりみせずと歌にも謠ひつれ、胡よく敎へて侍らば、軍の先鋒仕らせんは此夷等に過ぎず。老父かくて仕うまつれば、御背安からんに、これは押勝兵一人二人を將ゐて、胡丸を案内とし、みづからまゐり給はんや」と聞ゆるに、押勝承引きて、「己さらば、自ら向はんと定め、又軍兵の中より七人の兵を召して、七所に遣すべき評議す。先づ書直知德は日本異國の學に富みて、歌は詩も作出ではべるに、面を變へ才を祕して、都わたりに忍ばせ置きて、都の有樣を窺ひとらせん。道首口足は物よく云ひとりて、言は漢語をさへ辨へたり、もとより人心の薄き厚き、直なる曲れる、只一度見て曉ししるものなり、彼は伊勢紀伊の國に忍ばせん。又高橋朝臣手力は威勢他に勝りて欺を入れず、彼は武藏毛の國にさむらはせん。又和示部眞太刀は太刀擊の術にすぐれ、我と思ひあがらんをば打斬り、又その氣いと早くて、心の裏を直に見取る物なれば、北國にさむらはせん、必ず高ぶる人をば押へ、巧み搆へん人をも知るべし。三田首奇丸は種々の術を知りて、燃ゆる火を取りて袋に入れ、山をもま

岩木なす―岩木のやうに荒くれたることむけ―征服せしめ

のあたり打靡かせなどするに、さる術もて人をいれんは、常陸陸奥總の國ぞよからん。又布勢臣古丸は、心はなやがず、打沈めて始終をしめ知るべき者なり、これは筑紫の國に忍ばせん。又神麻舍人は神言よく辨へて、人の愼みを敎ふべきものなり、是は吉備出雲の方に遣さん。又忌部宿禰海道は、よく汐合の事をしり、天地の氣をも考へ馴れたり、彼は阿波土佐の濱邊に居らせん。さて我は三人の兵を伴ひ、容を深くやつし、胡丸を將て、あすなん東國に下るべし」と定めて、とりぐに云ひ計らひける。曉方になりて、夜霧未だ梢に殘り、月も入りがたにはべる頃、押勝を始め兵ども、かのやつしたる旅裝束するに、王押勝に御土器をたまひて、

「岩木なす夷なりとも言とひてことむけすべき男とぞおもふ

早く歸りこね」と宣はし、御衣たまはり竝に御冠をたばひ、「夷もし叛かば、汝我に代りて神御代の敎せよ」と宣はするに、押勝かしこみ奉りて、答へ奉る歌にいはく、

さしのぼるひつぎの皇子の御衣にしもふれん民草なびかざらめや

とつかうまつり終り、七人の兵をも大まへに召し出でて、慇懃に御目を給はらせ、さて押勝ふところの印を紙一枚におして、一人々々に與へ、掟よくいひ教へ、用意すべき金などは、老父いと多く取出でて與へけるに、押勝老父にも刀自にも娘にも、慇懃にきこえおきて、十人餘りの人うちつれて罷り出づるに、「麓までは」と、人々送りす。そのかへたる名、窶したる姿は後の物語に聞えわかん。

第八條　和氣眞人清麻呂勅をうけて宇佐八幡大神宮に詣づ

詣でをはりて歸るさに巨勢の金麻呂を問ふ

太宰府の阿曾麻呂奏していはく、「此程宇佐の御宮居鳴りとよめき、風雨つねならずはべるまゝに、神祭させて神の御心を伺ひ奉りけるに、忌部の千騎に神懸りて示教へたまはく、太子大炊王は、おひたゝせ給ふときに及びて、天皇に背かせたまふ御氣なん出來べし。御位は唯弓削道鏡に讓りおはしまさんは、正に此神の御意なり」と奏し奉りをはるに、天皇かしこみ聞しめして、「道鏡はすでに法皇なり、天下の政は任せまゐらすといへども、天位のことは私ならず。されど、大神の教へ給ふことを、いかで承引奉らざらん。とにもかくにも使を奉りて、直に神の御教をかうぶり奉らん。然るうへは何ぞ私のはからひを加へん」と告りなめて、卽ち和氣眞人清麻呂を召され、宇佐の御使仕うまつるべきよしを詔ひくだす。清麻呂勅をかしこまり奉り、退出でんとするを、道鏡側に差招き、人を退けて申しけるは、「御使の旨はかしこまりたりな。さて御使つかうまつりはてて歸りのぼりて奏さんときは、汝が心をもて奏し奉るべし。ときに我天位を受け嗣ぎなば、汝をば大臣となして國の政をとらせん、さなくばいと重き罪に落すべし。清麻呂よく聞得たりや」とて、いきざしあらくうち白眼みけるに、清麻呂たどうづくまりて退く。御使とあるに、それつかうまつる諸司〳〵うけ給はりつきて、前を拂ひ後を守り、直に南の御門より出でて、日沒國をさしてまかん出ける。そのことその粧どもに至りては、品殊におほからめど、爰に書付んはくだ〳〵しかるべし。清麻呂いと畏き御使をかうぶ

り、たゞ心を明くし身を清くし、妻を思はず子を懷はず、家をおもひ國民をおもひ、偏に御神の大御心に任せたてまつりて、海をば船よりゆき、川をば橋よりゆき、山をば馬よりゆき、野をば車よりゆき、往きと行くに、十九日といふを經て、八月十五日の曉宇佐に著く。清麻呂身灌をつかうまつり終り、冠をあらため、裝束をあらため、辰のときに御宮居にのぼりて、御使のむねを大神宮に告り奉り、みづから太諄辭を告奉り、神祭はじめてより、更に太神の御まへを退かず、一心に靈驗を祈り奉りけるに、その夜丑ばかりに、風雨さわぎ出でて、神鳴とよめき、雲霧たち亂ひて、御燈はひとつもあらず吹消され、只常闇の夜となりてはべるに、奥つ神殿鳴ひゞきて、黑き雲のうちに光を放ち、いかれる龍のかたち廿丈あまり、五百筒岩のごとく、渦卷きあがり、栲繩のごとく卷きほゞれて、口よりかをり滿てる狹霧を吐出して、神告りにのりてのたまはく、「阿曾麻呂あらぬ事を奏せり。それ天つ日嗣は神實猶うけつがせたまふ、私の事にあらず、いかに況や筋なきものをや。汝道鏡をかしこまず、告のまに〳〵告りきこえ申せ」とのたまふ

かしこまず―おそれず

とおもふに、雲霧吹き拂ひ、神鳴やみて、月又廣前の上に照りしきぬ。清麻呂神勅をうけて賽し、直に十六日の曉、「此度は海路を歸らん」といひて、豐前の海を渡り、石見の海をすぎ、阿波の海路をとほらんとするとき、浪風いと高くなるに、横さまにおひとほりて、辛苦じて紀伊の浦につく。日はたゞ七日を經たり。さて紀伊の山を越えて、巨勢の里に旅の御館を設けさせて宿る。清麻呂我家人を招きて竊かに申しけるは、「此さとに巨勢の金麻呂微かにして隱住むべし、我直に逢ひて語らふべきむねあり、汝行きてまづ宿を訪ひ得て歸るべし」といふに、私用あるさまに他にはいひて、その御館を出でて訪ひもとむるに、巨勢金麻呂が往所を訪ひあてぬれば、門のさまなどよく見おきて、御館に歸りて竊かに斯くと申すに、清麻呂打喜びて、人知るまじき裏の門邊より出でて、その家人一人を伴ひ、金麻呂が宿を訪ひつゝ、まづその門方をみれば、幾年かき掃はせざりけん、門邊とも見えず秋の草高く生ひてはべるに、蟲いろ〳〵に鳴きつくして、露深くおきみだれたるに、月の影のみぞ訪ひよる心あり。家人先に立ちて、標ゆひつる地錦葎を

なべに―に付て
驚かせ―目をさまさせ

かきわけ、草葉の露打拂ひなどして、門はひらくともなく、高垣の崩れたりしを踏分けて入れば、老婆の聲にて、「誰そや、盜人にやあらん、住みわびたる家には古き毛氈だもなし、心やりには入りても見よかし」といふに、「こはさる怪しきものならず、宇佐の大御使にまかりくだりてはべるなべに、竊かに訪ひ奉るなる。かく聞え奉るは、和氣清麻呂なり」と申せば、老婆聞きて「こはおもひかけね、我老父起きたまへ」とて、打驚かして、かくといへば、「いと〳〵珍らかなり、此方へ」といふさへ奥床もあらず、人二人ともならび居るべき席もなければ、清麻呂家人に對ひて、「道の案内よくしりぬ。この翁と物語らひはべらんには時も移りぬべし。汝は旅館に歸りて裏の門を開きおきて、待つべし、我一人歸去なん」とて歸しぬ。さて外床にうちあがりて、臥具どもうち疊むあひだ、とばかり庭の邊を見出でたるに、門邊より見入れたるは、中々にうちまさりたり。松のあるはいと高くなり、荻の生ひたるは軒をかくし、黑木の庇の落ちかゝりたるには、何をか忘れはてんとて、その草のみ生亂れたれば、清麻呂、心に、

超えもけは葵を忘るゝと言傳へたかによりていふ
しみ〳〵に―繁くこちたき―煩はしき

何をか忘れんとて―萱草を庭に

萱草垣もしみ〳〵に生ふときぞ世のこちたきは忘らへぬめり

となん思ひ居りたり。老父さしむかひて、「これは夢のごともあるかな。妹もかく老婆になりて候ふ。やつがれ圖書寮に候ひける頃は、眞人もいと若くおはしけるに、四十年の歳月には、互に雪霜の置渡りてさむらふなり。さてやつがれ眼瞽ひぬべしと奏したて、官位を返し奉りてよりこのかた、硯を見ず筆を執らず、元より世の渡らひも侍らぬ上に、心ざし又時の人に遇はず、微に殘りて侍るものなどは、人に讓り米にかへなどして、かかる八重葎の露けき中に、朝の烏夕の蟲を友として、たづきなく住み詫びさむらふに、一人の子まうけて、名をば金石と呼びさむらふ、ことし二十まりにて、荒けたる男にて候が、繪の事は自らさとし得て、よくつかまつりさむらへども、我家より世に繪出すなど聞えありては、上の御恐れ侍るまゝ、米など盡きていと悲しく侍るときは、我家ならぬ繪などを、それとなくして他國に持出でて、微かに賣り候。今日なん賣りにいきて候が、しばし御在さん間に歸るべし。又彼が姉の侍りしは、親を思ふあまりに身を住吉に

はふちかして―遊女となりたりと也

やつがれ―自ら卑下していふ語

はふらかして候に、折々心ばかりの物をも贈りさむらひしが、その後何地ともなく人に附きて、參り失せぬるよしなり。又やつがれも遠近に所を移して候まゝに、たとへ問ひかへりぬとも、尋ねわびぬべし。今又この里に住めば、人皆巨勢の老夫と呼びてさむらふ。さて眞人は宇佐の御使とありて、只今下り給ふにや、宇佐へは、紀伊の道を通りたまふべきにもあらず、又かく窶し給へるは如何に」と問ふに、清麻呂答へて、「誠にかく隱れおはして、人と交らひ給はぬには、何事もしろしめさじ。道鏡が騒、押勝が亂は聞給ひつらん」といへば、「さることは天下に隱れなし。されど、委しきよしは洩れきこゆべき筋にもあらねど、人みな流言をこそ申せ、確にかくとは聞き渡らず、審に語らせ給へ」といふに、清麻呂涙を拭ひて、「誠に世の降にこそ候へ、始めより語ればかくの如し、終より聞ゆればさる樣なり」とて、落もなく語り聞かせ、「さて頼み參らせたき旨は、やつがれこれより内裏に歸り登り、神の御告を明白に聞え奉るべきなり。さるときは道鏡正に我を落さん。命は民草のために奉れば、更に悔い思ふ所なし。唯家亡びて妻子の惑ひ彷徨ひなんは、人として悲しまざらんや。おのれ勅を受けて、直に内裏を退出しかば、かくいみじき御使なりといふことは、妻子夢にも知らで侍る。是より又罪に下らんも、かかる故といふ事を知る人なければ、如何なる筋とも辨めず、いと果敢なく思詫ぶらん。かかること世の諂ある人には洩しがたし。よて、宇佐よりまかり歸らんとしける時、神々を祈り、船を紀伊の浦に著けしほどに、巨勢の邑を宿にせよと申付けて、かく訪ひ參りけるは、今さしあたりて思へるにあらず、神を祈り得て候事にぞ」と語れば、老夫涙を落し、「承る如く世の降にこそ候へ。さては畏き御使を蒙り給ふものかな。定めて歸り奏させ給はゞ、道鏡いかりて、御命に及ぶべき筋のなきにしも侍らず、何もあれかく老いかゞまりては侍れど、我子金石は丈夫にてさむらへば、如何ばかりも計らひて、御心安からん樣には仕らん、是は御湯も奉らず」など語らふはしに、金石米を負ひて立歸るに、「よき時にこそ」とて先ひきあはせたれば、清麻呂禮儀正しくきこえて、なほ〳〵に頼み奉るよしを申す。老父清麻呂に向ひ、「彼見たまへ、よき正男にて候。糧盡きたる

に、繪二三枚仕りて、住吉の方に賣りに參りて候が、俵一つに致し、負ひて歸りにき」とて含笑む。清麻呂懷中より金五十枚を出し、又さばかりの金を包みたるをも出し、「御物がたくおはしますはよく知りて候へども、金は世の寶にて候へば、人を助け、事を說き、志を通らさんも是なり、此五十枚は米の代りに奉る。又包みたるはおのれが妻子惑ひ歩き侍らんとき、助け給はるべき用意になん誂へ奉る」といへば、老父聞きて、「おのれ見たまふ如く、親子の筆はすなはちこれ我所領なり、住居こそかく詫びて候へ、命を保たんばかりの事は、いと易く覺えてさむらふに、まさかの御備と侍らんは承引くべし、外に五十枚の金を賜ひおかん筋は侍らず」とて返せば、「さる事には侍れど、世の中いと騷し、おのれは金を天地にさゝへて貯ふとも、命きはまりたればよしなし。唯ひたすらに承引き給ひおかば、いかなる世の御爲にも」といひて、わりなく參らせおきつゝ、夜もいたく更けたるに、ねもごろに賴みおきて、清麻呂は歸りにけり。

本朝水滸傳

卷之五

第九條　清麻呂神の敎を奏すによりて道鏡に罪せらる巨勢金石清麻呂をたすく并金麻呂親子清麻呂も共に死す

「和氣清麻呂、宇佐の御使はてて歸りまうづ」と奏するにより、天皇高御座を下りさせたまひ、神の御敎を聞しめさる。道鏡なほ法皇の牀にありて、ともに聞居たり。清麻呂奏して曰く、「御使もて宇佐の大神に詣で、八月十五日の辰のとき、大神に告奉りてはべるに、その夜巳ばかり、風雨あらく、雲霧立ちまどひて、いと闇き中より、神の御形二十丈ばかりの龍と現まして、神告にのりてのたまはく、阿曾丸、あらぬ事を奏せり、天津日嗣は神代より神胤なほうけつがせ給ふ、私の事にあらず、いかにいはんや筋なき者をや、汝此告のまに〳〵奏しあげよと、告げ終りたまふと覺えはべりしに、雲霧はれ渡

りて候、神の御教如此々々のよしなり」と奏せば、天皇も御心の外にておほしわび給ふ様なり。道鏡は、身を震はし、眼を赤くし、面を青くし、齒を喫鳴らし、大音に訇りていはく、「しか奏すは神の御敎にあらじ、阿曾丸あに僞を奏さんや、汝が心をもて巧搆へて神の御心を穢すなり、唯今より汝が名を穢麻呂と變へん」と訇りくだして、刑部省なる乙熊を招き、「此奴が脚の筋を切斷りて、大隅に流しつかはすべし。此まゝに冠を落しひこずり出せ」など、氣色あしくいひ懲し、又刑部省にさむらふ坂戸牛養石部大井戸二人をもさしまねき、耳に告げて差遣しける事あり。さて牛養大井戸清麻呂が冠を落し、裝束を脱がせ、穢麻呂と呼びくだして、解部ざまの者立ふるまひ、袴をぬがせ、裔をまきて、ふたつの脚を引きはり、脚の屈める筋をきりはなてば、皮はつき破られて血いたくながれ、脚は蹇へて立つことあたはず。清麻呂はもとより思ひ定めて、命をありとせざりしかば、只なすがまゝに任せてすこしも動かず。さて、清麻呂をばあやしき輿に舁乘せて、守部の官人うちかこみて、穢麻呂と札に書いあらはし、坂戸牛養石部大井戸前方後方をまもりて、大隅をさして下るに、その日龍田山越えんとしけるとき、山風うちさわぎ、雷鳴りはためきて、日も闇くなりしかば、山のふもとに、驛にはあらで、家群のはべるに走せつき、「今夜はまづこゝに」とて宿所を定む。清麻呂をば輿より舁出しいとちひさげなる一間の、人居をはなれてはべる所にやすませ、牛養大井戸の二人は、中の一間の離家に入り、守部どもは、下屋の方につかはして伏させける。雨いたく降りつのりて、神鳴りやまず、夜も漸々更渡るに、清麻呂は只心をひとつにして、宇佐の大神を祈り奉り居たり。さてすこし寢付きたりとおもふに、簀子を切破る音し、やをら立入る者のはべるに、これは道鏡が言付けて、我をひそかに殺すなめり、さるにても、脚は蹇へたり、太刀は佩かず、此まゝに命を失ふより外はなしとおもひて、動きもせでありを、枕をかきさぐりなどし、さて耳にさしよりて、「我は巨勢の金石なり、父の金麻呂申付けて、直に御跡を追ひて都に出でて候に、かゝる御ありさまを見奉り、かく忍びよりて候。なほ盜み出し奉らん、御脚かなふべからず、我負ひまゐらせて立退かん」といふ

やをら―しづかに

に、是唯大神のしたまふなりと思ひ、かゝる御たすけ私ならずと思ふに、「御はからひにまかすべし」とて、金石に負はるべうしけるが、「さもあれ牛養大井戸の二人ぞはべる、彼かならず道鏡が詞を承引きて、今夜我を殺すべき氣見えたり。此儘に立退きたらば、罪人にして掟を犯し逃げたりとあらば、却りて罪を設くるに似たり。殊に我を負ひて走りたまふとも、追ひ來ん守部をいかに防ぎたまはん。咎なきそこをも我類に落し奉らんはいと苦し。さは此儘にて彼等に殺されたらんは、かへりて罪なかるべし」といふに、「お道理は承りぬれど、守部のもの追ひ來らんかまへは、父の金麻呂よく心得つかうまつりおこしたり」とて　何にかあらん立ちふるまひて、清麻呂を肩に負ひかけ、戸をやをら引寄せつゝ、裏のかたなる柴垣を押破りて、巨勢道にかゝりて逃去りにけり。かゝる騒も雨風のつのりにまぎれて、守部どもも聞かざりけるに、牛養大大戸しづかに起出でて、脚をぬき息をとめ、燈をほのかにして、清麻呂が臥居たる形狀を見れば、薄衣をうちかけて心よげに熟睡せり。さて打嚇きて、「牛養まづ彼が首をうつべし、さて後簀子を破りて死骸を此下に埋み、守部どもには彼塞へたりと人に見せて、風雨のまぎれに逃走りたりと云はせん。さて首は竊に包みて、討つたる證を道鏡へ見せ奉らん」と謀りて、しづかに立寄るに、清麻呂は唯鼾も鳴さずして臥居たり。牛養太刀をあげて討つに、首は飛び離れて、胴體はうごめき騒ぐを、大井戸しかと押へたるに、血は瀧の如くながれ出でて、見るがうちに面がはりぬれば、まづ簀子を切破り、衣などを押卷きて、血を拭ひをさめ、脚もて骸を蹈落して土を取りかけ、石を打重ねなどし、破れたる簀子を繕ひ、首をものに包みて、さて我寢たる一間にかへりて、夜の明くるを待つに、風雨も小止みて明け白むに、牛養大井戸早く起きて、「守部ども穢麻呂を輿にかいのせよ」と云ふに、守部どもいきて見るに、清麻呂はあらず。驚き騒ぎてかくといへば、牛養大井戸ともに呆れたる顔して立ちゆき、彼あらざるを疑はしくし、「塞め、人を欺きて逃げたるならん、さなくば守部等心をあはせて落したるならん。我々二人はすぐに都に歸りて、此旨法皇に聞え奉らん。汝等は我疑をはるけんと思はゞ、いかなる隈よりも穢麻呂を探し出せ」と

はるけん―はちさん

いひて、二人は馬に打乗りて歸るに、守部ども思疑ひて、又立歸りて清麻呂が臥したる跡を見れども、跡かたもなければ力及ばず、さは尋ね覓めんより外なしとて、道を彼方彼方にさして行別れぬ。さて、牛養大井戸の二人は、清麻呂が首を抱きもちて、道鏡に申入れければ、「側にてあはん」と、人を避けて昨夜の有樣を聞き、「よくしたり」など稱め、衣裳の袖より金多に取出でてあたふ。牛養大井戸いたく恭ひ、「如斯仕終せたる證なければ、穢麻呂が首はかく持ちてさむらふ。穢の恐あれど、我々が心やりに候を」といへば、「穢何かあらん、いで見ん」といふに、包を解きほどきたるに、首はなし。「是は如何に、只今これまで携へて參りつるに、大井戸いかにしたまひし」といへば、大井戸怒りて、「汝一人の譽にせんとて、穢麻呂が首は討ちたるならずや。さてこそ汝が物に包みて持て來たれ、我は手もふれず」といへば、彼包める帛を打返して見るに、人の面畫きたる紙のうち皺びて出でたるに、「是は何事ぞ」とてさわげば、道鏡大にいかり、「汝等我を欺きて、穢麻呂を助け、かゝる紙繪を貯へもて來て、祿を貪り收めつるはいかに」といひざまに、太刀を拔きて、二人を眼前に斬殺し、「人參れ、此穢物を舁出せ」とて、睨みわたして奥深く入りぬ。是は何事の行にかとおもへど、恐謟ひてとりかたづけぬ。さて守部どもは、多くの人を彼方此方にわけて、塞男遠くは行くまじとて、大和の山の隈邊かいもとめ、巨勢路をさして行くに、日も暮れぬ。續松打ふらせて猶行くに、人ありて語るを聞けば、「巨勢金石ぞ塞を負ひて家に歸りつる、いかなる人にか」などいふに、守部ども、「さてこそあれ。何にまれ、金石が隱家を圍みて、金石ごめに召縛れ」などいひさわぎて、守部解部三十人あまり、仕丁どもに續松ともさせて、巨勢金麻呂が庵を圍み、「金石塞を負ひて歸りしといふ、其塞ぞ罪人なり、今只今見あらはさん」とて、柴垣を踏みさき、門をうちはなして立入るに、人氣更になし。戸をこぢはなちて續松を照して内を見れば、今はかなひ難く思ひて、清麻呂は上座に居りて、腹かき破り、うつむけに臥居たり。金麻呂は妻を刺殺して、おなじく腹斷破りて、その妻の死骸にうちかさなりて死に居たり。金石又下座に居りて、腹を十文字如す斷破り、咽をいたく突破りて死居

金石ごめに―金石をも一緒に

たり。さて見るに、血のかをり庵にたち滿ち、腸こぼれ出でて、臭きかをり鼻にとほり眼にしみ口にむせびけるに、守部ども頭を痛くし、嘔すべく胸さわぐに、「さもあれ斯く死にたれば、これが首をとりてまかり歸り、かくと聞え奉るに何かあらん、おのれらが役は終りたり」といひて、四の首を四の槽にをさめ、ひとつ〳〵札を立添へて、夜通に都路に赴き、明日の日の夕方漸に歸りつき、訴所に出でてしかぐのよしを申せば、卽ち「首ども見ん」とあるに、それぐの司立添ひて、槽を開き見るに、首にはあらず、只繪きなしたる首の形ぞ入れたれ。司ども大に怒り、「汝等は上を欺く罪人なり、かゝる曲事類あらじ、罪は追つて御定あるべし。一人々々徽纆に括り、彼等のこりなく獄屋に繫げよ。嚴しく守り仕れ、いと辛く責れ」となん訇りあへり。

第十條　金麻呂親子淸麻呂を將て紀伊の溫泉に忍ぶ鼻彥軍書を講く

さしあたる一目前にさし迫りたる

金麻呂繪の妙術をもつて多くの守部を欺き、さしあたる危さを遁れて、隨居たる所を這出で、「さてもかくては隱しまゐらせ難し。又御脚かなはではいかでおはしはてなん。紀伊の溫泉に將てまゐりて、夜など人見まじきときは、をり〳〵湯に漬けて養ひたまはゞ、大神の御惠もいよゝ加はりはべらん。又溫泉のさむらふ所は賑ひてあれば、かへりて人に紛れては隱れ得べき所なり。此夜のうちにもとりまかなひて、巨勢山を越えて山道をさして行くべし。又道の序なれば、巨勢山の彼方に日頃此老夫に繪を習ひて、これもかすかにてさむらふもの二人まではべり。志いと雄しければ、此うち一人を伴ひ、又ひとりをば我子金石に添へて、朝臣の御消息をもたせ、金をも蓄へさせて都に遣し、御家の有樣、御妻子の御上を伺はせ侍らん。いざや」とて急がしたて、金石問屋にいきて、「脚弱き旅人の馬借らんと申すなり」といはせ、肥馬の脚疾きを引かせ、淸麻呂を中に乘せ、老父と二人は左右に乘り、金石は筆硯やうの物かい捨てがたき具どもをば、荷の緒に堅く縮めて、うち荷ひて跡につきて出行く。夜は丑三つばかりにて、秋の風うちさやぐに、

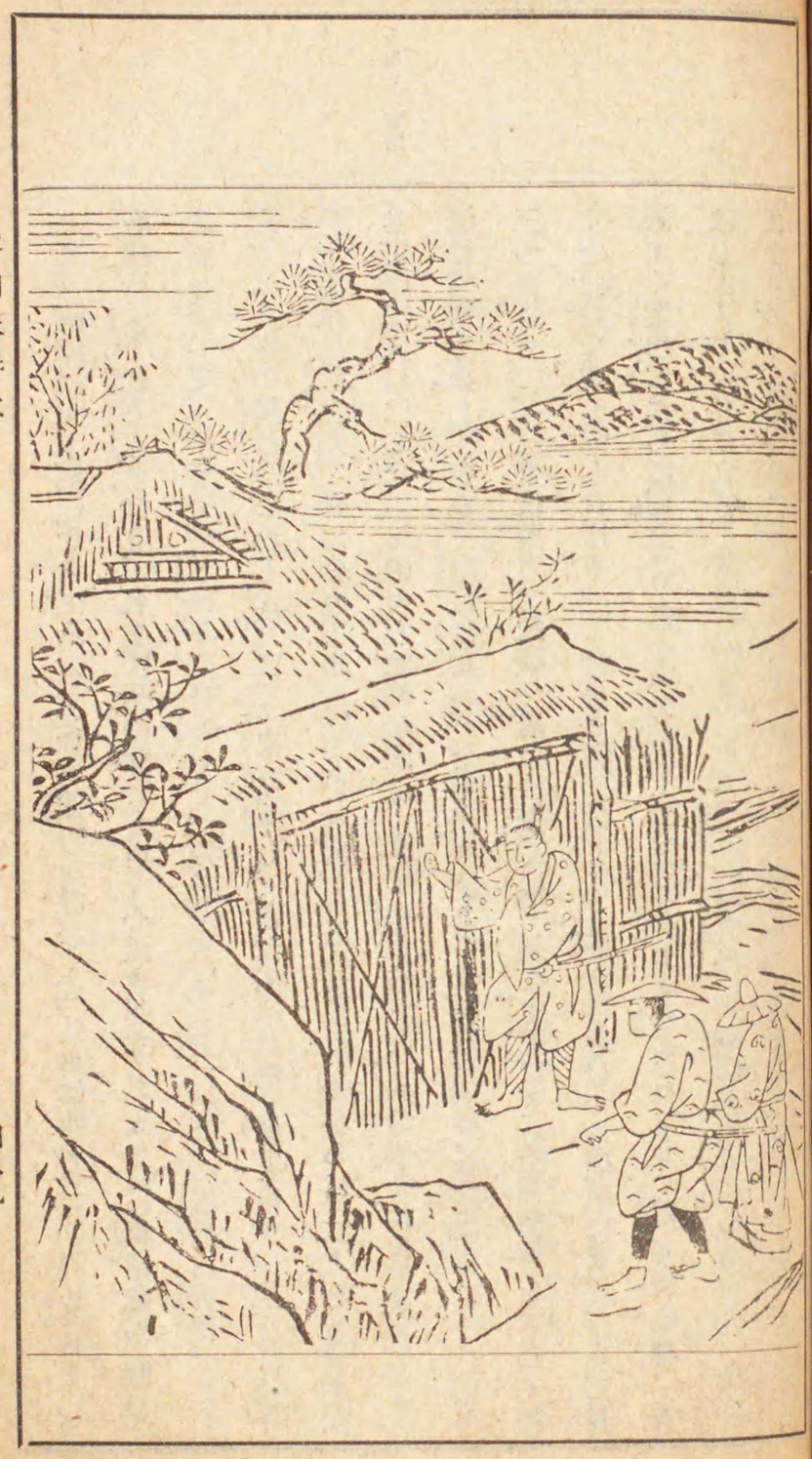
星はきら〳〵と照りて、山の端を見れば月いと細く落ちかゝりて、鶉いと高く鳴く。芒花雀麥を分行く道あり、谷水にそひて行く道あり、木むらを左右にとりて立ちまとふ道あり、岡を過ぎ尾の上を越ゆるに、巨勢の高山を遶りいきて、家の十ばかり往並みたる所の侍るに、金丸清麻呂に語りて曰く、「むかし大寶の頃太上天皇紀伊の國に行幸のとき、御供せる坂門人足が、

巨勢山の列々椿つら〳〵にみつゝ思ふな巨勢の春野を

と詠めりけるより、此處をば椿原と呼びつゝ、終に所の名とはなせり。彼方にさしならびて、黑木もて葺ける家の、山近くて二つ侍るは、卽ち我繪の學つかうまつる男なり。先づ此處に休息はせ參らせて、此事彼事しおかん」とて、馬をばその門に繫がぜ、清麻呂と老刀自をかき下させ、我ははひ下りて、まだ曉なれば主人は睡入りてあるに、門うちたゝく間に、金石も追ひつきぬ。金石荷ひを下し聲を高くして、「獵野やおはする、金石親を將て參りぬ」とて起せば、「をい」と答へて、帶など引結びながら、蔀を差上げ、

よみ―數へ

戸の鍵ひき開けなどするに、人みな立入れば、「是は思ひかけね、門邊にだも立出で給はぬ我大人の、刀自君さへ將て在したるは何ぞや」と問ふに、金麻呂聞きて、「是は脚毀ひ給へる人の、昔の友なるが、紀伊の溫泉に在したくおほすに、一人にてかひなくおほせば、おのれら伴ひ參らせし。物語どもは靜かに聞えん。さて此處の牛をかり得て乘せ參らせんに、馬をばかへすべし」とて、馬の借代よみてければ、馬飼が見て、「今朝は荒き山を越え、又寒き朝川渡りたるに、酒代取掛け給へ」といふに、金石袋より取出でてやりければ、馬飼掌に振鳴らして、「いと微かなりや、此邊の酒屋はよき酒もたらぬ上に、錢多く欲す、賜はりし酒代にては、一杯にも滿たず、老父その袋の重げに侍るに、今一杯の代を賜へ」とて笑みかけたるに、金麻呂、「その錢をやりてはやいなせ」といへば、金石、「これはいと過ぎたり、巨勢方の酒屋ならば十杯も呑めんに」とてやる。馬飼頭にあけて押戴き、「よき我子なり、老父眞幸くて歸らせ、刀自子無恙く歸らせ、旅人よく牛に召させよ」などいひて、謠うたひかけて行く。老父馬飼が歸り行くを見いでて、內に入



りて、清麻呂を上座にかき据ゑさせ、さて獵野を呼びて、「此男は昨夜物語らひ參らせし、我繪の學仕る徒なり、名をば巨勢獵野と申す心深き男なり。これに御消息を賜ひ、金石を添へて、御妻子の有樣を問ひ參らせ、逢ひ奉らば、直に紀伊の溫泉に伴はせ奉らん。又此家の隣は、これも徒にて志又厚し、彼が名は巨勢長勢と申す。彼をば我々將て溫泉に伴はん。金石參りて申せ」といへば、金石行きて將て參るに、二人をひきあはせて、二人にはしか〴〵のよし始終を聞え、さて朝食などは粟の飯をたきてあるじす。清麻呂文を委しく書きて獵野に與へ、金麻呂は袋より金を取出でて金石に授け、さて牛三つを借りて、三人は乘りて紀伊の溫泉に急ぐに、道を山間にとりて眞熊野をさして行く。此處ゆ夜に臥し日に歩みて行きと行くほどに、遙かに思ひつる溫泉に著く。さて長瀨よく案内したるに、奥まりたる家の靜かなる所を借りて宿りと定む。曉夕暮の程、夜はしば〳〵にしければ、清麻呂溫泉にうち漬るに隨ひ、大神の御惠や加はりけん、三日ばかり過ぐるに、筋は延らかにいきめぐりて、脚よく歩み出でたり。いとかたじけなく

あるじ―饗應

畏く覺え、此上はしば〳〵も出でず、深くその家に隱れ居りて、金石獵野が都より歸り來ん便を待ちける。さてその家の隣に引移る人の侍るを、いかなるものと思へば、夜ごとに人を集め軍書を講きて、錢をとりて、世の渡らひとする人なり。「是はいと淋しきときに壁の此方に聞き居らんは、よき慰なり」などいひをるに、その夜になれば表に燈を出し、その燈の覆に張りたる紙には、「鼻彦」と書付け、又傍に、「伊波禮毗古命白肩津の軍の條、ならびに五瀨命痛矢串を負ひ給ふ條」と記したり。入來る人そのしるしを見て、「是は面白き所ぞ」など言ひては入る。又來る人も然言ひては入る。又その鼻彦なるや聲をかしう打揚げて、「いづれも召させたる沓をよくとり入れ給へ、外の方にな脱置き給ひそ。昨夜も小盜人の取り行きし。さて僕も先つ比まで居りつる所は、溝河など渡りて、通ひ來給ふに便惡しく候へば、此處は少し奥まりては候へど、おはさん道平に侍れば、此所に移りて候。變らで御在し集ひぬるぞかたじけなき。さて今夜申す條は、伊波禮彦命、これは知召すごとく、神武天皇にておはします、浪速の渡りを經て、青雲の

おはさん―御出で下さる、來り給ふ

はためかし―にばた〳〵と音たてて

しぞかせ―退き給ひ

白肩津に御船泊て給ふ。さても此津はうちよする浪の速きに、浪速のやを略きて、今はなにはとは申すにてさむらふ。そも那賀須泥彦は五百萬の軍を引き、前は堺の海邊、後は河内の大野にかけて、雲の如く霞の如く、旗指物をはためかして、官軍を今か〳〵と待つときに、寄人の大將は、伊波禮彦の御兄五瀬命なり。その日の御裝束は、唐金の御甲に鹿の皮の御下著に、上の御冑は牛の皮をなめしになめし、鐵よりも堅くしたるに銅を延べて三所四所ひきしめ、白珠青玉を黄土染の緒にくゝり垂れて御飾としたり。御手纒には韓珠を飾り、御脚結には鈴をかけ、御執の梓の弓に、鳶の羽たかくかりて作りたる征箭を持添へ給へり。此方は旅ながらの御戰なれば、吉備の軍兵未だ御船に追ひつかず、軍兵僅かに萬にすぎず。されど御勢強くおはすに、那賀須泥彦が五百萬の軍を、後ざまに追ひかへしたまふ。ときに登美彦といふもの、槻弓のいと強きに、雁の羽を作ぎたる矢をはげて、搔投りたりけるが、その矢流れ行きて、五瀬命の御臂に中る。御血のいたく流れたるに、しばし立ちしぞかせて洗はせ給ふ。さてぞ血沼の海といふはその

袋―財布

蒸衾―暖かなる夜具

利口かな―物言の達者なるかな

故にてさむらふ。かゝる賤しきものの射ける箭、御身に立つべき樣はあらねど、これは正に西の方に御軍をたて、東に向ひて挑ませ給ふにより、日に向ひたまふ御罪なりと覺し。しばらく軍兵をひかせて、備かへたまはん謀慮をしたまふ。さて是に次ぎて申す所は、五瀬命終に崩れ給ふ條なり。いとあはれにて面白く候へば、此間に先づ世業仕らん」といひて、小き籠を人の鼻の方にさし出すに、人皆袋をときて、錢一ッ二ッ三ッ四ッと差入るゝに、から〳〵と振鳴して、「其處へは手の伸べがたきに、投げおこし給へ」などいふ。さてある間に、向ひの家うち騷ぎて人叫び立てり。「何ぞ」と聞けば、蒸衾に火つきて壁に移り、軒の端に燃上るとて騷ぐなり。集まる人あわて惑ひて、袋も締めあへず、錢のこぼれ落つるもかへりみず、沓もはかで逃去りぬ。さてあるに、火は事にもならで消えぬ。かく騷ぎたるまゝに、表に燈せる火も吹消し、内に入りて物食べなどし、落覆れたる錢ども搔集めなどして寢つ。さて隣にはうち靜まりて、「隣の大人はいと利口かな、都の人なめり」といひて、昔の軍の例どもを聞くによりて、世の中いと騷がしく

民の歎きさまよふを、如何にして助け侍らん。又道鏡を討つべき段などにつけては、清麻呂の名を呼び、惠美押勝など、祖王の御上など物語り出づるに、鼻彦壁に耳をよせ、あからさまに聞き居て、隣なるはいとゆかしき人々なり、殊に清麻呂と聞えつる名の侍りしぞ怪しと思ひて、夜すがらその有様を窺ひ居れり。鼻彦はこれ何等の人ぞ、後の物語を待ち得て知るべし。

あからさまに―かりそめに

本朝水滸傳

卷之六

第十一條　守部が輩罪を許されて清麻呂金麻呂が跡を追ふ　清麻呂が妻子金石獵野に逢ひて紀伊の國に行く

清麻呂跡をくらまして逃去りしより罪いと重くなり、その家を壞たれ、妻子をば追放たれぬ。又刑部省には、彼獄屋に繋ぎおきし守部どもを、訟の場にひき出させて、猶責問ひて曰く、「汝等繪ける首の形を持て歸りて、訟の官人を盲にしたる、類なき罪人ぞや。かへりて金麻呂に賄賂せられ、清麻呂を救ひたるか、事を明白に申せ。さなくば獄屋の棟にさかさまに繋ぎ、爪を拔き髮を拔き、刑罪は列木の宮の御時にたぐへん」武烈天皇は長谷の列木の宮と懲せば、守部等色は草よりも靑くし、身は飛立つばかりに顫ひ上り、咽をつまらして暫くえいはず。「早く申せ」とて責むれば、唾を呑込み、鼻を吹鳴らし、漸々に、「や

つがれらは欺き奉らず」と申す。「欺かざるものがしかすべきや」「さるはさる事なり、さあるも一人二人の落にも候はず、何れも大刀は佩けり、火はともしたり。中々に狐ならばとく見あらはし侍らん。是は唯さる迷にも侍らず、多くの人の眼にかけて侍る上に、血もいたく薫り、腸なども汚穢げに引きちらし、是を見るものは嘔すべく侍りしには違はず。此上は御使を金麻呂が家に遣され、察させ給はど、時の間に人來りてさる汚穢げなるあとをかき拂はんとも覺えず、又從弟なども疎かるべきに、彼等が死骸をとり隱しも仕るまじ。さるは察させたるうへに、死骸もし殘りてはべらば、首の紙繪に化けたりしは覺えず、彼等正に腹斷破りて死にたるにはたがはず。もしまたあらぬ事に侍らば、我我どもは狐に惑はされて侍るなり。さる上は御刑罰のことは如何樣に蒙りたてまつるとも、一言も申す旨は侍らじ」と申すに、「誠にさる事なり」とて、一時に千里をも往復るべき馬に、騎部眞龍といふものを乘らせ、「只一時にいきかへり、金麻呂が家の有樣を明白に申せ」と聞ゆるに、眞龍うけたまはりを申し、鞭を打鳴して走せ參りしが、二時

覺えず―知らず

あまりして地ゆ烟を踏み起し、騎り返して申さく、「直に金麻呂が家に參りたるに、門は鍵もさゝで、戸は引きよせて候に、入りて見れば、家には一人もなく、もとより死骸もあらず、血などのこぼれたる跡もなく、いとといぶかしく思ひて、家の隅々かい探し候に、引破りたる紙繪の、風に吹散りてあるを、一枚二枚拾ひ得てかへりぬ。その外何も侍らず」と申すに、訟の官人眉を集め、「怪しの事や」とて、その紙繪を開きて見るに、腹斷破りて俯伏しに伏したる姿もあり、又老婆を刺殺したる所を畫けるもあり、これを見るに、おの〳〵首はあらず。さてこそとて首をかきたる紙に引合せて見れば、人の形連なりぬるに、人々手を打鳴し、「是は正に巨勢金麻呂が畫きたるならん、金麻呂圖書寮にさむらひしとき、御壁のめぐりに放駒を畫かせ給ひけるに、その後此駒夜ごとに出でて、御園の萩を嚙ひあらしてさむらひける事あり。是必ず彼が筆の神にいたれる所なり。此度又斯の如き事あれば、これ私に承りおくべきにあらず、奏したてて見ん」とて奏し奉りけるに、道鏡御傍に頭をかきて、「我早ぶりて牛養大井戸の二人を伐殺したるは、こ

地ゆ―地より

れも金麻呂が筆に欺かれたるなりし。よし〳〵金麻呂を捕へ來れ、清麻呂を縛り來れ、憎き奴かな」と怒りに怒りていへば、天皇聞召して、「清麻呂は掟を犯して逃げ去りたるなり、金麻呂は眼盲ひぬべしとて官を返し、私に繪かきすさび、剩へ罪人とともに、公を欺きたるその罪咎、國つ罪に超えたり。草を刈拂ひてもその隱處を求めよ、山を枯してもその住處を知れ」など、天の御氣色いと荒きに、百官これを畏み、御道理を聞え上げ奉りて、卽ち官人に勅下し、「守部が輩の罪を許さん、さる上は命にかけて、金麿呂清麻呂を召捕り來れ」とて、訟の場を退出させける。守部等畏を申し退出けるを、「今暫し」と呼返して、「もし金麻呂を捕へたらば、先づその體に水を灌掛けよ。しか檢したらば、紙繪の人か、眞の人なるか、その分別は立所に侍らん。急げ守部、心得て侍るか」などいひ聞かせて遣す。守部等辛き目に遇ひて、「金麻呂を追求めんには、桶と柄杓を持歩かん、兵具これに過ぎず」と、口々にいひ別れぬ。さて、清麻呂が妻は、娘なる少女が十まり七になりて侍る、小松の少女と申しけるが手をとり、西の大路を彷徨ひ出でて、

そぼち―濡れとほり

親屬をも離れたれば、寄るべき所もなく、明日香の渡に聊かの知方あるを心ざして行くに、唯泣きそぼちて眼も見えぬに、道をば歩みかねて、かゆきかく行き佇み給ふを、金石獵野不意行きかゝりて、いかさま常ならぬ君と思ひしかば、金石近くよりて、「見奉る御有樣は、世にさすらひ給ひつる人ならん。もしは清麻呂卿の御由緣にかは」と問ふに、暫し答へかねておはすを、「さな包み給ひそ、卿の御文これにはべり」とて出せば、親子の君欣ばせ給ひ、讀果てて、或は嬉しみ或は打泣きて、「月日は我ためには照し給はぬと思ひ侘びて侍るに、神亦捨て給はざりき。さは在さん所に今の間にも」と聞え給ふを、「さることにこそ。ことに父の金麻呂が繪をもて欺きしことあらはれて、是さへ甚く追ひ止め給ふと、街の言に承りぬ、これは又俄の事なり、紀伊の山に入りては御轎駕もあらじ、夫が間は御轎まうけて乘せ奉らん」とて、かひ〴〵しく走せめぐりて、怪しながら轎駕二つを借り得て、二人の君を乘せ參らせて、日に夜をつぎて歩み行くに、巨勢獵野が宿にも著けば、「爰に夜の明くるまでは息はせ參らせ、次の日になりてば、馬牛など借り得て、

壺折姿―壺腰束ともいふ、中古身分ある婦人の徒歩外出になせる所也

乗せ参らするより外はあらぬ山里なれば、如何にせん」と詫ぶるに、「さる怖しきものには如何で」と宣ふに、「さらば山のそぎ岩が根の道は、負ひても仕うまつらん」といひて、杖突かせ参らせ、笠などもいと深くして、壺折姿にかい繕ひ紛し、金石獵野は長き太刀を佩き、樫の杖のいと太きを突き、御前方後方に立ちて、「此道は先つ頃夫の御君も通らせ給ひつる」など聞えければ、母君、

我夫子をいで巨勢の山高々に思ひてひとりけふ越えんかも

小松のをとめ、

あさもよし紀方にありてふ夫の山を我柞葉の母と戀ひつゝ

といひ慰みておはするに、日も西山に遶れば、御徒然を慰め参らせんとて、椎の葉に飯をもり、蕗の葉には谷水を汲みもち上りて、「旅にしあれば」など吟ひ出でつゝ奉るに、いと珍らかにおぼしたり。「いと〳〵疲れ給へど、いかで草刈りふきて、かゝる荒山中には宿らせ奉らん。今二里ばかりを歩み給はゞ、金石よく知りて候ものの侍るに、宿を乞ひて息はせ奉らん。かく雲霧ひては候へども、日はまだ暮るまじきに、我々負ひ奉りても、さる人里へは行きたらはし侍らん」とて、いと輕らかにおはせば、二人が二君を負ひ参らせて、いと細き道を芒雀麥蹈分けて、「右よ」「左よ」などいひつゝ行くに、秋の末なれば、山越の風のいと寒きに、猿近く梢に叫び、蟲の音などは鳴きよわりて、行先とも覺えず、夕霧立隱したるに、いと〳〵心細くおぼしたり。荒坂とふ山方に掛りて、岩立ちさかえたる道の邊に暫し下し奉りて、むしたる苔などかき拂ひ、息はせ参せけるに、少女の胸痛くし給ひぬるに、看病り参らするとて、時の移るも知らず、水など汲みてあやしき藥など参らするに、すこし怠り給ふ樣なれば、「日も暮れんずるに、此坂越えれば御宿は近かるべし、いで急がん」とて、又負ひ奉らんとするに、坂の半ばかりに臣の木のいと大きやかにて、小闇く打垂れたるもとより、丈は七尺ばかりなる荒男の、八束の劍を差し佩き、手に長き杖をつきて、唯獨り立てると見しが、又後にいや優りたる荒男の、是もさる樣にて立ち居れり。

旅にしあれば―萬葉「家にあれば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる」

いと輕ちかにおはせば―御身甚く輕くおはしませば

とふ―と云ふ

第十二條　山賊清麻呂の妻子を盗み去る明日香大太刀　金石に逢ふ井紀伊なる人々伊吹山へ行く

君達いと怖しくおぼして打戰き給ふに、金石獵野は丈夫なれども、かゝる御伴の侍るに心おくれて、後めたく覺えけれど、後方にも下りがたく、横樣にも隱れがたくて、暫し佇めば、荒男等杖を岩が根につき鳴らし、脚は濶く歩み、肩は首より高く差張り、下り曲りて道を遮り、山彦高く吼轟きていはく、「小童よ、汝等かゝる山道を、いと闇きに、女を將て何處へか行く、さこそ物憂からめ。色好き少女ぞ、手をとりて往かん」といふ。金石獵野はやくさとし、弱きより强きを討たんと心にはかり、「是はいと忝けなき。我我は都のいとこが脚を病ひて候に、溫泉にまゐらん、といふを、伴ひて侍る。此坂の彼方に知己のあるが、早程も近し、その故に急ぎても參らず。さのたまふは何らの人ぞ」と問へば、「さこそあらめ、都の少女等を惑はし、加太の浦の遊女につき出して、錢を致

さのたまふは―そのやうに言はるゝ御方は

す事は、我々が家業なり。さるを我々へ詔もせず、ことわりもなく、汝等が致さんとするか、又我々が名を聞かんといふや。そも我は昔磐余彦に魂ぎらせし大熊の神の子孫にて、熊野山の鷲熊、又の名は長爪とのる。この男は八咫烏の神の子孫にて、八鬼山の山烏、又の名は嘴太ともいふ。さはよく摑みよく喰ひさいなむゆゑなり。小童等、その兒等を我々に貢し、命を體に收め歸れ、さらずば命をば體より追出さん。此熊樫の杖を見よ、平群の山より選出して、飛驛の木工が首を押へながら削りとらせたる八角の杖なり。いで小童ども此杖の下に死なんや、又今いひし貢をするや。いで云へ、いで答へよ」といひて立ちよるに、君たちをば岩群の間に隱し參らせ、金石獵野太刀を拔きて、不興言切りかゝるに、鷲熊八角の杖を延べて打拂へば、金石いたく兩膝をうたれて、地に伏して起つこと叶はず。獵野是を見て口惜しく思ひて、すこし躇躊ふ所を、太刀を打落され、肩を打たれなどして、眼のくらくなるを、又打倒して、「一人の小童は脚を打折りたれば、此處に捨ておきて狼の牙にかけて喰殺させん。此奴はなまくし死にかゝりつるに

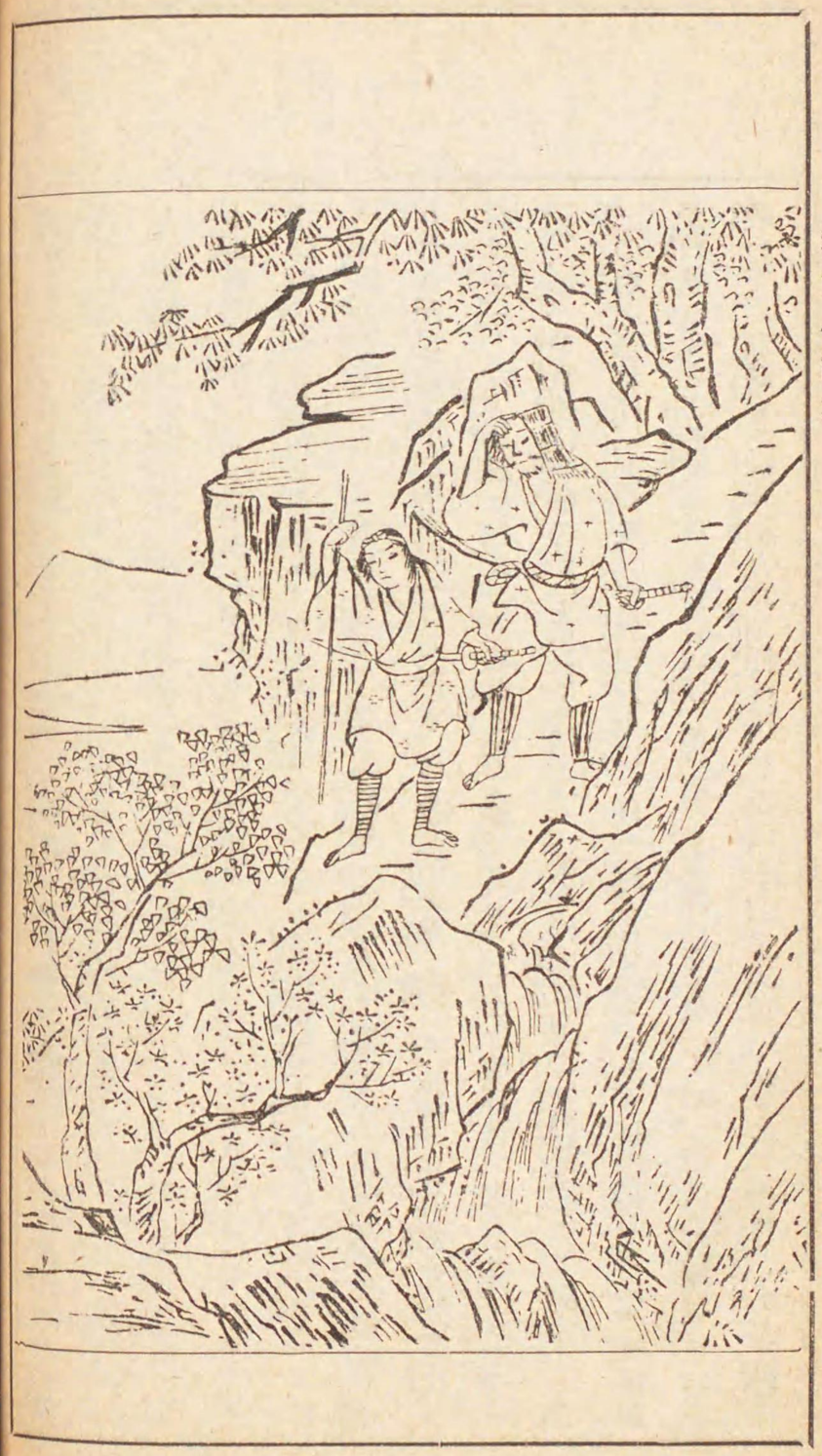
さいなむ―責め苛しむ

犬じもの―犬の如く
はふれ―こぼれ
ありのことゝ―有りつたけ

よく蹈みて踏殺せ」とて、石ごめに蹈みたゞらして殺しぬ。さて、「かの貢は彼方の岩間に收め置きつるを見つ」とて、立遶りて、「さてこそ爰になん、味食まゐらせん。泣きいざち給ふな」とて、唯兎など打被くさまに、肩に二君を打掛けて、小柴高菅蹈分けつゝ山深く上りぬ。金石眼をいからせ齒を嚙鳴せども起ちえず、このまゝに死なんと思ひて太刀を拔きながら思へらく、我親金麻呂また淸麻呂の卿をも、上よりいたく追ひ止め給はんと聞くに、是又早く告げまゐらせでは、犬じもの道に果敢なく死にたるならん、躄り行きても我知己の人に逢ひ、牛にもあれ馬にもあれ乘りて、溫泉におはする人々に告終り、その上に如何にもならんと心を定め、手をもて我脚を引寄せ、我腰を引延して、一尺二尺づつ登り行くに、蝸牛のごとき歩みなれば、息絕え氣たゆみて行きえず、唯口惜しく甲斐なく腹立しく、神をさへ祈り得ず、涙のみはふれ落つるに、坂を登りくる人の音の、遙かに下方に聞えたるに、「いでや人ならん、登來よかし。言を告聞え、懷中の金はありのことゝ如何ばかりにも賴聞えん、人なれやゝ」と祈りて待つに、木の根を蹈みならし、石を蹈渡る音などして近くなれば、いと嬉しと思ふに、何にかあらん、馬に負はせて此方ざまに登りく。是たゞ神なりと思ひて待居るに、

荒坂の坂の岩波高ければ重荷をなづみ馬ぞつまづく

と鄙風俗に謠ひて、まのあたりに引きかけ、「偖も醒しや。これは魚の臭にもあらず、此山の獵夫が猪射たるならん。血も多く流れてこそ」など獨言ちて行過ぐるを、「暫し」と呼べば顧みして、「人こそあれ」とてつらゝ打見、「此二人は蹇よな、獵夫が痛矢串にや中りたるが、此馬借らんといふなるべし。さあらば粟重く負せたれば、任せ參せず」とて又行くを、「しか宣ふ聲は我聞きしによく似て候人あり。そこは明日香の大太刀ならずや」「をいな、さ宣ふは巨勢のか」といひもはてず、馬をば引放ち、「此有樣は」とて驚くに、云云の由を語れば、「しか承りては己が上にも捨て難き旨あり、急ぎ將て參りなん。又獵野が死骸は今とて葬せん樣も侍らねば、梢の雲と鬆鬣くぞよき」とて、石など打圍ひ、死骸を收めて、利鎌もて楚押切り草刈添へて、灯を燧出して火つけて燒くに、山風吹上りて煙の



いと高くなるに、我は粟を荷ひ、馬には金石を乗せて、足掻を打早めて、行く〳〵金石に語りて曰く、「おのれ今は紀伊の山邊に住めども、明日香をもて家の名を呼ぶは、和氣の御家の恩を忘れ奉らじとするなり。委しくは知り給ふまじ。我壯年の血氣に乗り、劍術を好み、馬に乗り弓を執り、鎗を遣ひ、相撲を好むによりて、農業を忘れたるを懲して、我父飛鳥川老我を追放ちて候に、世に似げなき國罪を犯し、公に捕へうたれて、獄屋に繫がれて侍りしを、清麻呂の卿我領所の民なり、いかで命を召させんやとて、御なだめ聞え上げ給ふによりて、去々年獄屋を出され、大和の國を追放たれて候。されど一度は御赦免を乞ひ奉りて本國に歸り、卿へ御恩謝仕うまつらんと思ひ候ときなり。我久しく此山に住めば、鷲熊山烏など罵り侍るものはよく見覺えて候に、此道を一時に通り、溫泉におはさん人々をば生き忍ばせ奉らん。夫より君達の御ゆくへ求め奉らん」と語る語る行くに、夜と暮れ日と明けて溫泉に著く時は夜半ばかりにあらん、金麻呂がかくれ家に至り、大太刀金石を舁下し、戸を靜かに打叩きて、「金石歸り給ひぬ」といへば、内にはほと〳〵出でまどひて、まづ灯など明くして、「いかに」と問ふに、金石は痛みたる上を馬に乗りて山坂を越えたるに、今は氣上りて物をもいひ得ず、大太刀は又清麻呂の御有樣を見るより、涙を止めかねてあるに、清麻呂早くそれと見給ひて、「こは如何に」と宣ふ。さて金石には藥などいふ間に、大太刀行きかゝりて計らひたる始終、又聞きつる其夜の騷の有樣、君達奪はれ行給へること、委しく語り、「我直に追ひゆきて、君達取返し奉らん」といふに、清麻呂たゞ世の中の任せざるを歎き、又人の緣の變異しきを思ひ遣らし、まづ金石が痛を看病るに、漸う息つき出でて、「まづ申さん、都の追手の事迫れり、いかでか此處に隱れまさん、此夜何方へも忍ばせ奉らん。事はしかぐに迫れり、此般は父が繪の精力も及びがたし」と申す。「さて、おのれはかゝる足痿にて御供仕うまつりがたし。大太刀又是に候へども、これは君達の御跡を求めん。父は老いぬ、母は老いぬ。如何にせん〳〵」とて立騷ぐ音の漏れ聞えてや、「その御案内こそ」といふ聲して、壁を蹈破りて入來る人は追首口足なり。清麻呂よく面知りてあるに、「夢の中の人にか、

現にはあらじ。三尾が崎の騒に、押勝もろとも火の中に紛れたまひしを、焼けたゞれたる首とて佐保の川邊に梟けたりといひき。かくては如何に長らへ給ふ」と問へば、「されば候、三尾が崎の戰は、押勝思ふ旨ありてたやすく退き、太子祖王の御供仕り、伊吹山の麓まで參りしに、卽ち押勝が兄の豐成は、過ぎしころ浪花の海に入りて死にぬと承りしが、今は白猪老人と呼ばれて、伊吹山に隱れて候に、不意めぐりあひ、是によりて祖王もそこに忍ばせ奉り、押勝始めおのれ等は、かく太政官の印を懷にし、同志の人を語らひ、唯道鏡を討たんことを思ひかけて候。かゝる上は御身の上も金麻呂の上も、いと迫りて侍るに、我御供申して共に伊吹山に隱し參らせん。又金石は面知りたる人もあらぬに、おのれが弟にて候といひふらし、我暫し旅ゆきの間、家を守らせ置ささむらふと聞えおかば、此處の人何か怪しみ侍らん。さる間に湯にひぢて、脚だに立たば御妻子の御跡求め給へ。さて大太刀は刀自君姫君の御行方を求め、行逢ひ參らせしその上には、ひそかに近江路に御伴ありて、伊吹山の麓に胡丸といふものの家あり、其處に至りて

ひぢ―浸り

山路を訪ひ、豐成がかくれ家にのぼり給へ。かく申すはしにも時移りぬ。はや御伴申さん」といふに、人々はたゞ夢の心地に、「いざや」とて出行くを、金石兩の膝を摑みて、かひなく口惜しく思へど、せんすべなければ、大太刀にむかひ、「我少しも脚立たんずるときにもならば、如何樣にもして追ひつかん。汝まづ加太の浦をさして行くべし。彼荒坂にて騒のとき山賊どもが詞のはしには、加太の浦邊ときこえつる事あり。しか心得たまへ」といふに、飛鳥の大太刀、巨勢の長谷ともに、「何事も心得つ」といひて出でぬ。こなたはあやしき旅人の姿に窶し、よろづ金石にはいひおきて出でぬ。

しかーそのやうに

本朝水滸傳

卷之七

第十三條　忌部宿禰海道跡見武雄同じく武荒の兄弟に逢ひて清麻呂の妻子を救ふ　并三人ともに清麻呂の捕はれを救ふ

見ゆる一占の表にあらはる

忌部宿禰海路は、押勝に別れ、伊吹山を下り、姿を卜者に窶し、和泉の國まで參りつきて、船を乞ひて渡らんとしけるに、汐占を考へたれば、「爰ゆ渡らば事あらん」と見ゆるに、何處より渡らんと、又汐占をみれば、「紀伊の國に行きて、荒坂の津より渡らば幸あらん」とあらはれたるを、只占に任せて、荒坂の津に向ひて行くに、その日も暮れしかば、船屋を問ひ、「土佐の國に渡らん船やある、我も乘りて下らん」といへば、船屋の主人どもが、「この風暫しあらば下りにや吹くらん。今は横樣にて追ひがたし、しばし爰に待たせよ。又飯など參るべくば、此處にはさる物はあらず、是より一丁ばかり南の海邊

燈のおほひ一軒燈の外蔽ひなる紙

に、はなれたる家の侍るは、さる物を旅人に賣る家なり、其處に往きて物喰ひて待たせよ。風直らば迎ひまゐらせん」といふに、「さはそこに行きて待つべし、よき時にならば告げおこし給へ」とて、包などうちかたげ、南をさしてゆけば、いひしあたりに家の侍る。家はいと大きくして、門には馬など繫ぎて、旅人めくものいと多く入り居たる樣なり。扨、軒には燈をかけ、燈のおほひには「一膳飯あり、溫飩蕎麥あり、酒あり、種々の魚あり」と書き、又ひとつには、「熊野屋」とふ三の文字を太く書きたるを、これも火を燈して軒に懸けたり。宿禰笠を提げ包を負ひ、物喰はんとて入れば、竈の煙立ちみちて、誰ありとも見分かず。馬奴にやあらん、水子どもにやあらん、いと多くおり居て物食ふに、「許し給へ〳〵」とて通れば、主人めく男、「旅人か、此方へおはせ。そこは烟籠めていぶせからん。便船を待ちたまはゞ程も侍らんに、こなたの一間へ入りて暫し休みたまへ」といふに、草鞋を脱ぎて簀子の下に押入れ、裳をすこし下して行くを、つら〳〵打瞻りて見る人あり。宿禰は心なければ顧みもせず、一間に入りて火桶に炭火などもて來

あぐみ―胡坐をかき

いよ〳〵ゆかしく―いよ〳〵事の一伍一什を知りたく

見おこし―此方を見

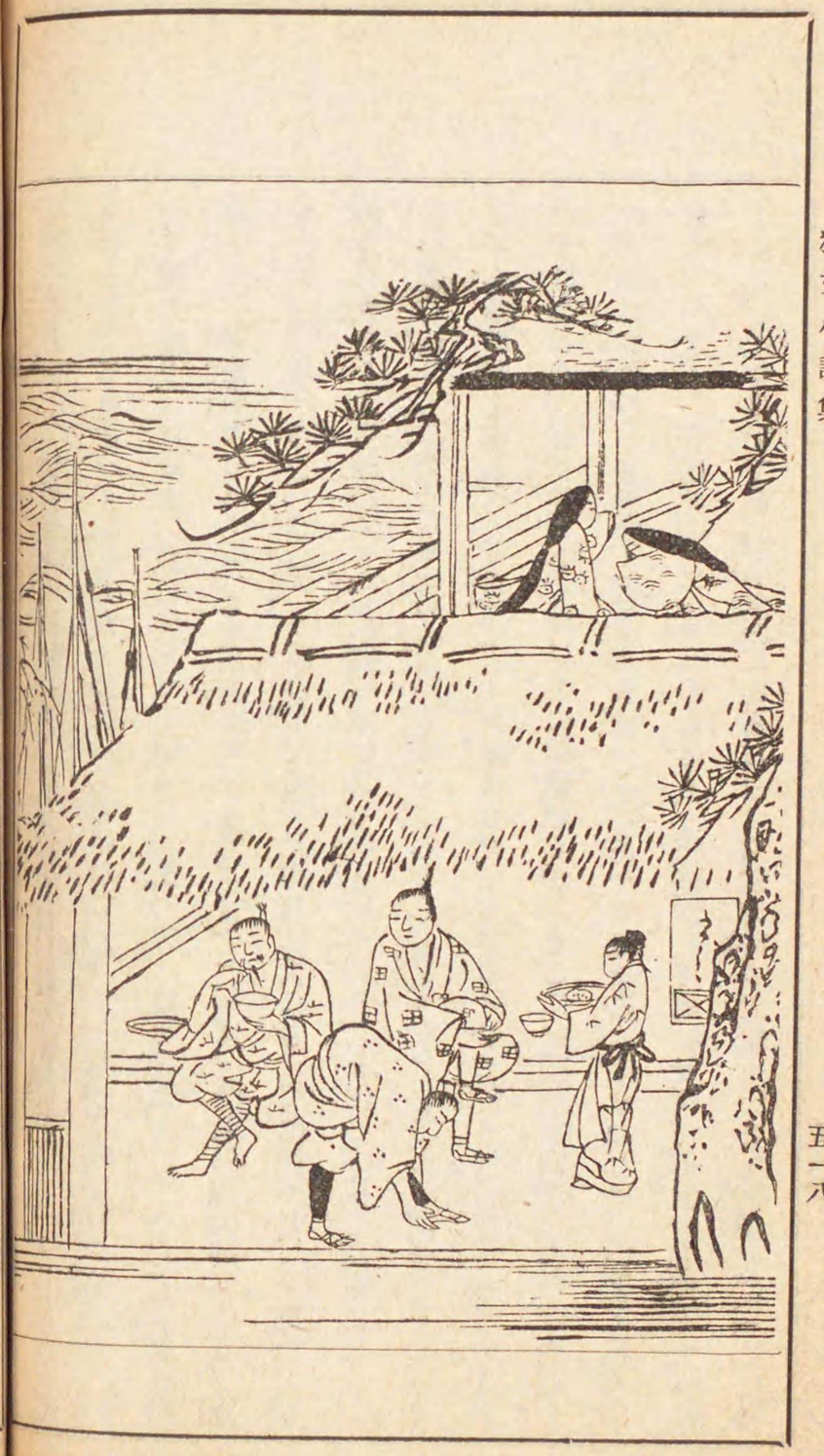
るに、さしむかひてうちあぐみ、「いと寒き夜ぞ、温飩たまへ、たゞ暖かに盛りて出せ」といひて居るに、打並びたる一間の、怪しく圍みたる中に、旅人にやあらん入り居たり。さて靜めて聞けば、女の聲にていと哀げにひそめき泣くを、何にかと思ひて聞きをるに、端々打聞えなどす。都の女なめり。遠き旅寢を苦しくして泣くならんと思へば、いと高く泣出でて、娘などの聲にや、「自ら一人おくれ奉らんや、いかなる海の底にも、母君の御供仕うまつらん」といふなども聞ゆるに、いよ〳〵ゆかしくなりて、和らさし寄りつゝ、耳を直向に向けて聞けば、清麻呂の卿の御上など聞えたるに、さてこそと思ひ、小便に立つさまにしなし、火をともしてつと行きかゝり見れば、よく見覺え奉る御方なり。此方をも怪しとばかり見おこし給ふに、なほ正目に見れば御主押勝の御いとこにて、粟田朝臣の御娘にておはすと思ふに、其後清麻呂の卿の御妻となり給へるよしを思ひ出でしかば、近く參りて、「こは如何にしてかゝる御有樣なりける。君まだ若くおはしましける頃、田村の館押勝の別業なり にもおはし給ひしが、やつがれ御まのあたりに見奉りき。その後和氣の御家に入り給ひて後も、我主の殿にはおはしましける。やつがれは惠美押勝が家人にて、忌部宿禰海道にて候へ。御有樣委しく語らせたまへ。隨分々々御仕へ奉らん」と竊やかに申せば、泣きそぼち給ひて、「如何にもよく其方の面は見おぼえて侍り。さこそ聞給はめ、我夫の君宇佐の御使の後は、種々善からぬ事に苦しみたまひて、剩へ御行方知れず侍るに、不意金石獵野が情にて、御跡を覓めて參りしに、荒きみ坂を越ゆるとき、おどろ〳〵しき人に逢ひて、我を案内せし若人二人はその鬼に殺され、賴む方なくて隱れ居しを、これなる姫と我を、その鬼等が肩に負ひて、山を行き谷を下ると覺えしが、此家に連來り、此一間に入れおきて、おのれらは何處へか行きつるに、如何にあさましくてはふれ侍らんより、此所は海邊なれば、我は海に入りて死なん、此姫は生先も侍れば、世に堪へ忍びて長らへ給へ、天には神ませり、地には又父ませり、命だにあらば逢ひ給はん、又父君に逢ひ給はゞ、母は荒磯の巖を枕にと聞え奉れと、申聞かせて候ときなり。其方は又如何にして怪しき卜者の姿となりて、此所には如何にして」と問ひ給ふに、

「身の上語り奉らんには時も移りて人怪しむべし。かく逢ひ奉りける上は御後安かれ、御夫の君にも逢はせ奉らん」など諫め聞え奉りて、「さて、その鬼と宣ふものどもは、何處へ参りて」といふが後に、疊をひし〳〵と踏鳴らして入來。親子の君は此宿禰をも喰ひ殺さんと思して消入り給ふに、二人の荒雄等禮儀正しくして、忌部宿禰に向ひて曰く、「かゝる髪、かゝる衣、かゝる姿を見給はゞ、俄には思出で給はじ。おのれは粟田朝臣眞人が家人跡見人成が二人の子になん。やつがれは兄にてすなはち跡見武雄なり。これは又弟にて跡見武荒にて候が、天性剛力にて候まゝに、武士の道を忘れ、唯山に入りて熊をうち、里に出でて人をあやまち、年頃恋に仕るを、父の人成思捨てて、上に訴へ我我を逐ひやらひけるに、かへりてそれをよき事と思ひ、世の業も侍らねば、あらぬ名にかへて熊野の山に隱れ住み、往來の旅人を驚かし、財寶を奪ひ、衣裳を剝ぎて、其を酒にかへ米にかへて、道なき命を繼ぎ侍るに、不意荒坂にて、過ぎし夜此君達の通り給ふを、我故主の御君達とはゆめ思ひかけず、いたく驚かし奉り、又御供の若人も二

あやまち―殺害し

人ながら打倒して候に、一人はいたく振舞ひたるに、御命も侍らじ、一人は脚を打折りたるまゝに捨置きて候ひしが、如何になり給ひけん。さて君達の深く歎き給ふを、いたく懲し奉り、此處まで負ひ参らせて侍るに、先つ方、逃出でたまはんなど立騒ぎ給ふとて、御懷中より落ちたる文の侍るに、讀みて見しかば、清麻呂卿の御手にて、細かに書付け給へるを、始終を讀み果てて、兄弟共に大に驚きては候へど、今更かゝる御身の上なりと申詫びんも、此姿にてはよも誠とは承引きたまはじ、梳らん家に行きて先づ髪を結ひ、衣裳などもかい改め、容姿を正しくし、言をあらため、よく聞きとりおはしまさん樣に聞え奉るべしと思ひて、彼處に行きて兄弟申合せて侍りける時、そこの人來たまひつるを、よく見知りて候ほどに躊躇ひしが、そこには顧みず過ぎたまひ、先刻この一間に立忍び、姫君達とひそめき給ふを、あからさまに立聞きぬれば、いよゝ我も落居て、いな〳〵今は此姿にて見え奉るとも、宿禰かくておはせば、御執成し聞えたまはらんと、かく出でて身の上を聞え奉るなり。君達罪許させ給へ」とて詫ぶれば、「さは鬼

あかちさまに―かりそめに



にてはあらざりし。思ひがけぬ事ぞ。此上は卿の在します方へ、負ひて參れ」とのたまはするに、宿禰も久しく絶えたりしを語り出で、「かゝる上は御仕の忠誠を盡したまへ。我も外ならぬ君達に在せば、如何ばかりも御仕の事は承らん。さは夜の紛れにも御輿をものし、溫泉におはしつけ奉らん。山の案内は頼み參らせん」など、いと頼もしく聞ゆるに、いよゝ君達の落居たまふに、三人の者も勇みたちて、先づ食物など勸め奉り、御輿の事物し歩くに、「何にかあらん、只今公の罪人參り來」とて、人立ちさわぎ、先には鐵杖を引鳴らし、松纜立てて大道を照らし、多くの守部左右を圍みて、「今夜は此津に罪人を臥させ、明けなば山道を指して都の方へ」と聞ゆるに、「誰にか」と聞けば、「和氣清麻呂を紀伊の溫泉に捕へて、都には將て參るなり」といふに、君達は、たまく朝露にきほひ出でし初花の、忽ち照れる日に萎るゝ如く、「こは如何に」とうらぶれ給ふに、跡見の兄弟諫め奉りて、「君此處に宿らせ給ふぞ御緣の盡きざる祥なり。我々兄弟に宿禰を加へてあらば、たとへ敵は岩にて候はゞ手握り持ちて打碎き、敵また鐵にて候はゞ、脚に

うちぶれ―歎きしをれ

かけて踏みたゞらかし、清麻呂の卿をばいと安く奪ひ返し奉らん。後安く思してよ。唯今逢はせ奉らんを、待たせ給へ」といひをはり、兄弟立ちありきて罪人宿らせたる家を見置き、夜の更くるを待つほどに、君達心許ながらせ給ふに、宿禰一人は御見扱ひに聞えに至り、高垣を跨がり越え、不擧言戸を押破り、板敷をとゞと踏むに、守部ども目を覺して、「盜人ぞあれ、いで起きよ、罪人を顧みよ」などいひて、太刀を取りて立合ふをば、柄だにも取らせず、手を打折り脚を打折り、腰をくじかし、肩を歪ませ、頭を裂き、胸を打破りて、見るがうちに三十人ばかりを殺せば、主どもは皆逃出で、守部どもも生殘りたるは垣を破り溝を潛りて、罪人の輿は捨ておき、暗に紛れて走失せぬ。兄弟靜かによりて、「今は誰をかは憚らん、彼處は人集ひて喧しきに、汝行きて君達と宿禰をあともひ奉りて爰に來れ。さて參り給はゞ、君達はいと小く在しますに、此御輿へこぞり乘せ奉り、我々して舁き參らせて、まづ眞熊野の山道に入らん。急げ、しかせよ」といへば、弟

あともひ―伴ひ

眞熊野―「まくまの」「みくまの」兩樣の傍訓原本のまゝ

なる武荒脚とくして彼處の家に馳行き、兄弟思ふ儘に仕りおほせ、清麻呂卿をいと安く奪ひ返し、卽ち其處に置奉る。又「守部どもをば、皆殺しに殺して候に、今は追ひ來る人も侍らず、靜かに眞熊野の方に御供仕らん」といふに、宿禰も兄弟が勢を稱へ、君達の御手を取り、急ぎて在しまさせ、さて輿の鍵どもを押切り、清麻呂を出し奉れば、「君達在しましぬるか」といひて、巨勢金石が踊り出でたるに、君達も呆れ在して、物も得宣はず。金石二人の荒男を見て、「汝は荒坂の盜人よ、よき時に出あひぬ」とて、かひ〳〵しく裾を卷きあげ、君達を後に在させ、眼をいからし、まくり手にして立てば、君達、「彼等は鬼と思ひけるに、自には故あるものにて、その後はそこばくの心を加へて給はりぬ。又これなるは押勝の君の御家人にて、是又他人には在さず。さて御身のかゝる樣は如何なる故ぞ。夫の御君は如何に」「父君は何處へぞ」と問はせ給ふに、金石しか〳〵のよしを語り、「卿いと平けく道首口足御供仕り、伊吹山に在しまさす。さて、やつがれ一人溫泉に殘りて、見しる人もあらねば、うち膝行りて二度三度溫泉に濕ぢて候に、もとより

もこたりー癒え

のりー告げ

深き病氣にもあらず、忽ちおこたりて、脚は元の如くなりしに、今は姫君の御跡を覓め奉らんと思ひて、先の夜一人寢ねて候ひしに、何人にかあらん、表裏を圍み、繼松いと明くして、先づ案内せる男と覺えて、我家の軒に立ちそひ、此山にて脚なへの男を搜し給ふことあらば、唯此男一人にて候、如何にも都方の男にて侍るが、いと脚なへて候へば、脚の筋がな拔かれたる人ならん、など申し、まづこれまでは御案内申したり、といふ聲するに、又守部が聲と聞えて、さる上は清麻呂に極まりぬ、何にもあれ、家を打ち破り、込み入りて捕らんと聞ゆるに、下官思ひ繞らして候は、卿山道にかゝりて落ちさせ給ふに、追人參らんは後めたし、さは我此所にて彼等に捕られば、さる騷に時移らん、しかは御道おはし給ふにも障なけんと、いよ〳〵衾深く引被き、頭をも物に包みて蹲り居りしに、守部ども戸を打放ち、壁をうがちて入り込み、清麻呂を召捕れ、とのりて、我を引立てしを、脚も蹇へ腰も立たざる樣に振舞ひしかば、いよゝ清麻呂なり、などいひ騷ぎて、そのまゝ輿に打入れ、きびしく守りする樣に見えて、爰までは連來りぬ。さ

て人々の御物語は、山道に休らひてうけたまはらん、先づ急ぎて熊野道へ」といへば、宿禰柄短き筆をとり出で、懐紙に書きつけて、金石に與へていはく、「かく確なる御後見の侍るに、今は心安し。おのれは天下の御爲に、公役をうけたまはり居れば、これより直に土佐の國へ罷り下らん。兄弟二人に金石を加へて、君達の御供を申さすよしを、此文に書認めぬ。これを懐にして伊吹山を指して急ぎ給へ。まさきくあらば逢ひ奉らん」と、互に袖を振りあひて別れんとする時、明日香大太刀巨勢長谷、山の小道をたどり來るに、金石行逢ひて、「事はよしゆく〳〵語らん、いざ山道に」と、あともひ入りぬ。

まさきく―壯健に
あともひ―伴ひ

第十四條　海邊鰹劍術を敎ふ　并奈良麻呂を立てて大將とし徒を集へて白山に登る

越の國白山の麓劍の里に、劍術を敎へて海邊鰹と稱へらるゝ先生あり。其徒學せんと入集ひてあるに、先生その場に立ちて敎へていはく、「太刀はそれ人を伐る物にあらず、身を守り敵を防ぐべき物なり。たとへ默止しがたく人を斬るも、唯其本を切つて末を切らず。本を切るときはその人を生捕へて、事を正し命を助けて、我死を免る、是その身を守るに當るなり。さる心を得るが敎なり、その業を得るは習はしなり、その本末を辨ふるが傳なり。爰をよく學び得たまへ」とて、先生自ら木太刀をとり、頭より高く振上げていはく、「是太刀は人を斬る太刀なり、身を守る太刀にあらず。徒よく習ひ得よ」といひ終り、又太刀を直にさしのべ、身をひとへにし、脚を集めて立ちていはく、「是はこれ身を守る太刀なり。かくさし延べたる太刀の名を青岩といふ。たとへば青岩の堅きを前に支へて立つが如し。人これを窺ひ難く、又碎きがたし、爰を以てしか名付けたり。扨又その本を切りてその末を切らざれとは、本は何ぞ、凡そ太刀を握りての上は、唯是五つの指ぞ本なる、仍てその指を切落す、これをその本を切るといふ。又その指を切落すも、一度に五つの指を切落すとな覺しそ。五度太刀を振りて、五度にその五つの指を切落すなり。又十太刀振らば十の指をなん切落すと思せ」といひ終り、又長き太刀を左右

に打振り、電光の如く閃かし、飆の如くに振かへし、雨の如くに打掛け、雲の如くに遮らし、風の如くに打鳴して曰く、「是は又守を破り敵を追ひ、備を崩し前後を防ぎ、左右を防ぐ、天下獨往といふ術の上の極なり。是等を習はし得て、始めて、太刀は斬るべきものにあらず、身を守るべきものなり、といふ事を覺す」といひ終り、汗をうち拭ひ、扇を飄かし、袴の前を撮み出し、上座に著きてひどらき居たり。徒聞終り習はしをはりて、禮を正し列を整へ、わが先生に謂ひていはく、「やつがれ等、先生に對ひていと畏けれど、願ひ奉る旨ありて、一條の願文を書認め、各懐に仕りて參れり」と先づ小松藤見、松任足日などが恭しくもて出づるにつきて、その徒五百人ばかり、各懐に願文を差入れて、出でては先生の前に差置き、出でては又差竝ぶる程に、その文眼前に、堆くなりぬ。先生眉を揚げ眸を揚げ、面を靜に回らして徒に對ひていはく、「これは何事とも覺えず。されどかく一時に物したまふからは、事は同じ旨ならん」などいへば、徒一時に蹲りて、「先生の宣ふごとく、願の旨別異にあらず、各申しあはせて候」といふ。先生聞き得て、「さら

ひどらきー得々と身振ひして、源氏物語に「馬の頭ものさだめの博士になりてひどらき居たり」とある例也、原本ひゝちぎ」とあれど、そは轟る義にてこゝに當らず

ば徒の頭たるにより、まづ藤見が文を讀みて、その次も皆その故を知るべし」とて、その文を開く。その文にいはく、

やつがれ小松藤見恐惶謹みて申す。先生の恩の山ゆ高く海ゆ深き、今爰にあらためて申さんや。やつがれ承らく、「白山の西の山邊に、醜の盜人さはに住み居て、往來の人を切殺し、財寶を奪ひ、衣裳を剝ぎ、又然らざれば連行きて、おのれが徒黨に加へて召仕ふ」といへり。又「その盜人の張本ありて、劍術人に優れ、是に逢ひて立會ふもの、勝つ事更に叶はず」といへり。やつがれ等先生の教を蒙りてより、身に鐵の楯を竝べ、心を堅磐の窟に置き、夜行くも晝行くがごとく、晝行くは猶虎に乘れるが如く、かゝる心を備へ、かゝる身の術をもて、さるえせものが擅にするを、耳に聞流してんや。先生許し給はゞ、僕參りて打殺し、往來の人を安くし、その邊の村里を穩めまくほりす。其御許を願ひ奉る旨は是なり。

と書きとゞむ。先生讀終り、又其次なる松任足日が願文を讀むも又同じ。先生徒弟に對

山ゆ、海ゆ―山より海より の義に用ひたる也

び、面を赤くし眉も眸もなほ高く昂げて、聲を張り出し、臂を張り起し、手は膝の上に置きならべ、身をそばだて、一座に打見やり、いたく匐りて曰く、「徒多くの月日を此場にあり通ひ、我教を受け、習を傳へ、術を習はし、氣を練り、手を馴し、我はと思ひ上り給ふべきが、徒の頭たる小松藤見、松任足日といへども、未だ我に勝つこと能はず。その次なるは猶此二人に勝つ事あたはず。さて愚者の事は我先づ早く聞けり。彼が人を切殺したる、その數我が耳に入るだも三百ばかりの人なり。かく教ふる我といへども、未だ生ける人は一人もはなち打たず。しかは愚者はよく生ける人を斬りて、その危き境を馴したり。我は今徒に申すごとく、唯木太刀を持ちて、さる心を馴したるのみなれば、いかで彼に勝たん。いはんや徒の人々におけるをや。かゝる願は、自ら手脚を縛りて猛虎を打殺さんといへるに等しく、石を抱きて深き淵の薄氷を渡り行かんといへるに同じ。危きかな、危きかも。さるにても思ひ得ずば、彼愚物に立抗ひて、二つなき命を失はんより、今夜我大野に行きて此願申出づる徒を集め、眞劍をもて太刀擊せん。我もし徒に打たれたらば、いとかひなき先生なり、果敢なき先生なり、何ぞ先生といはん。これまで年月を上座に居て、人々の敬禮に遇ひつるは、是又欺けるなり。徒また五百人にもあれ、殘りなく我に斬殺されなば望足りなん。如何にとなれば、ともかくも彼盜人に奉れる命なれば、我手に死なんは足りなんといふなり。いで今夜白山の麓に出でて大野の原に我待つべし、人々來りて立合ひ給へ。もしさらずば此願は本心ならず、みだりに申出せるなり。又さるみだりなる事にあらば、何ぞ徒とせん。かく申放ちて候ふ上は、思返して何ぞ許べん。今より人々まかん出て、私によく馴して出合ひ給へ。我行きて彼處に待たん」といひて、つと立ち、長き太刀を拔き、「人々にも太刀を拔きはなち給へ」といひて、一人々々に向ひ、その鎬をうちあて、打鳴し終りて、いつて曰く、「是はこれ誓約なり、昔天照皇大神武須左能雄尊に逢ひ給ひて、劍と珠とをもて誓約給ふは、我御國の例なり。心得給へるや」といひ終りて入りぬ。徒大に思ふに違へど、「かゝるからは我々も武士なり、習ひ得たる先生の恩を仇をもて酬ひ奉らんは、かへりてこれ我先生の御心な

をやみて―小止みて

らん。いで此夜その所に立出でん」といひて、各退出けるに、その夜酉ばかり、薄雪ふりをやみて、月のいと寒くさし出でたるに、先生身には鐵衣を著、頭に甲の鉢を皮もて包める頭巾を著、手に手纏を隠したる布の手結し、脚絆をもしかして、皮の沓をはき、太刀を懸佩き、短き太刀をば帶に插し加へて、いひつる大野に立出でつゝ　山風吹當る大葉櫪の森の東の陰に立添ひつゝ居れば、藤見足日の二人を始めて、心々に裝ひ、おもひおもひの太刀を佩きて、此方ざまに立向ひ來。さて先生は何處にか立出で在すらんと思ひ窺ひて、とみにも進まず、しばし躊躇みて歩み來るに、後の山の邊より小道を下り來る人の、面を塗り黑き裝束して、長き太刀を懸佩きたる男の出來、聲を低くして、「我先生、さこそ待給はめ」といふ。先生顧みて、「今宵は如何にして遲く侍りし。今日なん我徒かゝる願を申立てしを、時こそ來たれと思ひて、豫て思ふ樣に申聞かせつ。かの軍兵どもは參り集へるか」といへば、今來つる男答へて、「後の森の陰に皆參り居れり」といふ。「よしさらば打合はん。志弱きものは眼前に斬殺すべし。又その術はいたらずとも、志いたり心猛きものは、かの軍兵に縛りとらせん。いざ」とて、先生太刀を提げて行くに、物の蔭より、「小松藤見候ふ」と名乘りて、一番に進みて打ちかゝるを、「心得つ」といひて、暫し打合ひつるが、太刀をすり落されて立惑ふ所を、伏せたる軍兵二人三人馳せ來り、捕縛り、口をふさぎて連れ行きぬ。次に足日と名乘りて駈向ふも、またさの如くして連れ行きぬ。さて、駈向ふものは一人も疵つけず捕縛りとり繫ぎ、先生疲れたる時は、後の男たちかはりてしかするほどに、三百餘人は捕へ得つると思ふに、纔に切殺したるは三人四人に過ぎず。さて殘れる徒はさすがに退かず、皆太刀を投捨て頭をうなだれ、手をつき尻を高くして、「我先生々々、大に誤を聞え奉る」と呼ぶ。時に後の軍兵を呼出でて、皆その太刀を乞取らせ、捕縛りたる人を引出させ、まづ左にあぐらをかゝせ、後の男を据ゑまゐらせ、我は側にさむらひて徒にいつて曰く、「各志はいたしたり、いと賴しきかな。さて左のあぐらに据ゑまゐらせつる人を、誰とかも知らじ。我徒に告分きて申すべし。これは左大臣橘諸兄公の御嫡子にておはす、御名は橘朝臣奈良

かくろひ―隠れ

麻呂卿にておはせり。父君思す旨ありて一首の歌を残し、此北國の山陰に隠れ在しまし、今の御名は井出諸兄、又の御名は枳殻麻呂と稱へ奉る。父君は君臣の禮を思し、君道鏡を愛でたまふは、是君の御心なり、臣老いずあらば、いかさまにも時を待ちて奏し聞え奉る旨も侍れど、現身の息のうちには、大御心を窺ひ奉りがたし、さはとて官位に侍りて、かゝる横ざまごとを默止しあらんやと、唯何となく山に隠れ、今はたゞ雲霞にまじりて、藥を採食ひ水を飲みて、人の世の中を背向にして、庵にだにもおはしまさず。是はこれ御父の御心なり。又是なる奈良麻呂卿は、我は是正男なり、如何樣にも道鏡を退けて、天下の民を撫でんとのたまひ、御身をいたく窶し、此白山の山の邊にかくろはし、唯よき正男を得てんことを思す。我さる御人ともしらず、不意行合ひ奉りて、互に深き心を明し、即ち此劒の里に栖を定め、月比心を碎きて千人に及ぶ徒を得たり。さて我名は、海邊鰹は苟且に呼べる名なり、誠は恵美押勝が家人和爾部眞太刀なるぞ。晝は徒に劒術を教へ、夜は此山の邊にかくろひて、姿をかへ面をやつし、此卿と心を合せ奉り、多

麓ゆ―麓より

くの軍兵をなつけ得て侍り。さて汝達はかく召捕りたれば、命はこれなきものにあらずや。さらば今ゆ身を無きものとして、我願を助くべきや。我願私にあらず、唯天下の民を思ふなり。又さらずば眼前に首をとりて、此君の御軍を祝ひ奉らん。我徒答せよ」と、勢に乘りていへば、徒唯涙を落して、「おのれ等いと賤しといへど、天下の百姓なり。民を思さどるは君としも思はず、民を撫で給ふは我君なり。道鏡政をとりて民をありとせず、その恨いづこにか酬いん。今日より君の軍兵なり」といひ終るに、奈良麻呂大に欣びたまひ眞太刀も、「恥み知りたる者共なり」と稱へ、「かゝる上は軍兵を將て此君籠り在す所あり、直に參れ」とて、奈良麻呂眞太刀馬に乘りて先に歩み、軍兵等後に立ち、ともがら又あひ加はり、白山の麓ゆ遶り登る。

本朝水滸傳

卷之八

第十五條　二人の大將軍軍兵と徒を將て白山の窟に籠る
并泰澄法師兵粮の事を謀る

神無月十日ばかりなりける、山の麓すらあるに、半あまり遶り登れば、林の木の葉のこりなく降落ちて、谷の八十隈はいたく氷こり、岡の彌千峰は雪高く敷きて、夜嵐寒く吹きおろすに、梢は枯れて鳥やどらず、松はたれて猪いはひ臥しぬ。行く〳〵岩根を踏みて、馬つまづけば、大將橘奈良麻呂馬より下り給ふに、和爾部眞太刀も同じく下りて、高坂に息つきなづみ、横山に佇み息ひて、後方を遙かに見下せば、軍兵五百人あまりに、又さる勢を加へたれば、唯大空にはひ登る龍の、雲の彌重むらにうごめくなして、左にめぐり右につらなり、山道の雪を踏みさけつゝ、捧ぐる鉾はしもと原の如く、うちあへぐ

いはひ―這ひ、いは發語

なして―如くにて

しもと―枝のしげき若き木立

息は朝霧の如くて、漸々と登りいたるに、洞を家としたるを、巖もて閉せる門方に著く。軍兵多く出でて禮儀をなして、大將を迎へ奉るに、かくばかりの人の居るべきくまもあらじと思ひて、追ひていたるものは門方に立てば、「皆此方へ」とあるにつきて入りぬ。さるは今此上に百千人を加ふるとも、こぞり居べしとも覺えざる洞の中なり。又洞の外の方には、大なる釜百口を備へて、粥を煮て人々にむかへたり。夜明けもて行くに、此上なる岩屋の中より、としは七十歳ばかりに見えて、髭髪雪なすおしたれ、面は節木なす枯びたるが、身には佛の衣を著、手には銅の鈴をふり、脚には黑きうけ沓をはきて、下り來りて二人の大將に告りて曰く、「軍兵すでに千人に越えぬ。軍はそれ天を賴まず地を賴まず　人を賴まず我を賴まずといへり。汝達千萬の軍兵を集むるは何ぞや。千人もし一人の心ならばよけん、千人もし千人の心ならばもとなや」と聞ゆるに、二人の大將聞得て、「よく試みてさむらへば、此上の勢は唯加はるに任すべし、しひて覓むべからず、と申合せて侍り」と申さす。老人聞きて、「かゝる山籠りにおはすれば、糧のことをしもい

くま―隅、餘地

雪なすおしたれ―雪のやうに白く垂れ

うけ沓―やぶれ沓

もとなや―心もとなきかな

と難くしたまふべきに、おのれ唯今より越中國に參り、國の守大伴家持に逢ひて、その糧の事を物せんと思ふなり。早からば五日ばかり、久ならば十日ばかりのうちに、必ずその糧は送り參らん」と聞えて、靜かに山を下りておはしけるを、今參りの徒見おこしつゝ軍兵にむかひ、「彼はなぞの老人ぞ」といへば、「彼は卽ち此岩屋をひらける泰澄法師にて在せり」といふ。「さては泰澄なりける、此法師ぞ太子の御祈の師と承りて侍るが、天下の氣を考へ、必ずよからぬ人いで來なん事をさとし、暫く此白山の岩屋をひらきて、籠り在すとあるは、風の音の仄かにぞ聞きつる。いと貴き異人や」などいひあへり。さて岩屋の中は、弓を削り、箭を作り、太刀を磨ぎ、鉾を磨きて、さるべき時をぞ待居ける。

なぞの―如何なる

風の音の―「ほのか」と云はんための序詞、風聞に聞きたりとの意

越と云々―越中守に任ぜられたるを云ふ

第十六條　大伴家持泰澄に逢ふ　并家持が放てる鷹を諸兄するもちて返したまひ糧を白山に贈らしむ

守大伴宿彌家持卿は、大君の御言畏み、み雪降る越と名におへる中つ國をなん任けられけるに、國の政務に暇あるときは、布施の海邊に立ちあさり、あるは立山の方に獸を獵り、あるは麻都太要の濱に鷹を放ち、又その暇は歌にかゝりて風流に心をなごし給へり。比美の入江も水草枯れて、濱風寒くなるまゝに、水鴨いとさはに集けりと聞きたまひて、守ますらをの伴を誘ひ、今日の比美の江に鳥狩せばやと、手放れよく馴れて遠もやすき、八形尾の大黑とふ鷹に、尾鈴とりつけてかいつくろひ、鷹飼の太波禮麻呂ぞ、馬に立添ひてとりするたり。さて多古の島邊にかゝりて、蘆鴨集きて侍るを見つゝ、太波禮麻呂蘆陰に立ちしぬびて、尾鈴も玲瓏に放ちやれば、水鴨は羽きりて飛び上るに、群れたる羽風にうち驚きてや、鷹は横ざまに飄り、風に向ひて空にあがり、二上山を飛越ゆると見しが、雲がくりつゝ翔り失せぬ。守馬を馳せて呼返したまへども歸らず。太波禮麻呂は天にあふぎて打招きても、爲ん術なければ、守は御心に火さへ燃えて、思ひ戀祈み給ひけれども、たどきを知らねば息つきあまり、今は物をさへ宣はで、馬を引返し給ふはしに、麻都太要の濱方ゆ、此方に向ひて、あやしき法師の立ち來つゝ、「暫し待たせ給へ」といふ

さはに―數多くとふ―といふ

たどき―てだて、方便

たじろかず―後退もせず

かゝり―斯くあり

ふに、御供仕うまつりける人とりぐに出でて、「守御氣色あしき時なり、怪し樣にて立來り給はゞ、必ず御怒を蒙り給はん。いかなる世捨人ぞ、名を告れ」と聞ゆるに、法師たじろかず近くゐよりて、「守は今大鷹を放ち給ひ、さこそ口惜しく思せるならめ。我その鷹の止まりて侍る處を知れり。守もしそを得まく思さば、我詞につきて尋ね行かせ、必ずその鷹に逢ひ給はん。かく申すは白山の道をひらける泰澄法師にてあるなり」と聞ゆるに、守馬より下りて禮儀正しくして、「是は大德にてますか、かくまのあたりに逢ひ奉りて、大德なる事を知らざりしは、是正に眼ありて白山を見ざるといはんに均し。彼鷹は我命にて候へ、とめ得ば何の幸か是に過ぎなん。大德早くその在所を敎へ給へ」と聞ゆるに、「然らば申すべし、その鷹は二上山を越え、うしろの山方の松枝に止りしを、その山の仙人手にするゐて鷹の主を待つにてさむらへ。是を得て歸らんと思さば、御供は此わたりに止めたまひ、守一人鷹飼の太波禮麻呂を伴ひて、御馬を馳せて參り給へ。我能く知る旨ありてかゝりとは申せ。さておはす道は、松並植ゑし木陰の道は平かに侍れど程遠し、此比美の江の淺瀨を渡り、岸に上りて田道を傳ひ、山にかゝらば、小道のあらんに、馬を馳せ登せて參り給へ。さてその仙人に逢ひ給はゞ、仙人必ず賴みまゐらする旨あらん、守必ずな默し給ひそ。畏けれど天下の蒼生の上なり、我袖はいとせまし、守の御袖におほひたまはゞ、必ず蒼生は安からん。何にまれ急ぎ給へ」と敎へて、鈴を西ざまに振鳴して過ぎぬ。守いと嬉しく思して、泥障を卷き、手綱をゆるめ、比美の入江をうち渡し、岸に上り田道を過ぎ、山にかゝりて小道を登るに、遶り登る道のくまを行きつくして、峰のへを越ゆれば、彼いひ敎へつる向峰の侍るに、雲の浮橋もがなと思ひなれど、谷深ければせんすべなく、又下り又登れば、岩垣うち重なる道のあるに、今は馬より下りて、枯れたる蔦のかづらをとり、伏したる小笹の枝にすがりて、太波禮麻呂に後方をおさせて、辛うじて這ひ登り給へば、かの泰澄の敎へたるにやあらん、一株の松のこたれたる陰に、一つの亭の侍るうちに、身には木の葉をうち重ね著て、さすがに鷹は右手にするゐて、左の手には朮の花を持てり。さて近くよりて見れば、頭はうち顯し

かづら―蔦

こたれ―木垂れ

たくり―古へ絲を卷くに用ゐし具

さはに―多くさとし―知り

たるに、髪は白金を打延べて、たくりにかけて組垂れたる如く、眉髯は面を隱し、眼の光は眉を照りわきて、金の如く輝ひたるに、守おもほえず頓首、「翁のする、おはせるは下官が鷹なり、尾は八形にて、名は大黒と呼べり。此鷹巣よりもりおろして手馴らしぬ。今まで政務の暇あるときは、朝獵にする、夕獵にする、暫しも手より放たざりしに、けふなん不意比美の浦に鳥獵して、是なる太波禮麻呂が手よりあやまてるなり。さて如何にせんと思佗びて侍る所に、白山なる泰澄來りたまひ、かう〳〵尋ね參れと教へけるまに、供をも召連れず參れるにて候へ。翁その鷹を我に賜へ」と申すに、翁うなづき給ひて、「如何にも守の參りおはさんを待てり。さて易く此鷹を返し參らすべきが、翁が賴みきこえまゐらする事を、守承引きたまふべきや。まづ一言の御契約をうけたまはり、さてその上に如何にも返し參らすべし」とあれば、守は言さはに告らず、「かく參りたるが直々に誓約なり」と申せば、「しかあらば申すべし。翁かく深く隱れ居れるをさとし、白山の泰澄この曉此處に來り、我に告りていはく、今日なんかまへてかゝる事の出來べし、此國の守必ず此亭に在さん、さるとき守に賴み參らすべきは、天下の民の上なり、米を千疋の馬に負はせ、鹽を十頭の牛に負はせ、豆を百人の人に負はせ、早く白山の岩屋に送り給へ、如何にとなれば、天下の祈のために、千人の法師を集はせたり、そはこれその供養する糧なりと申しきこえ、守もし承引給はずば、鷹をな返しそ、そのまゝに放ちやれ、と聞えおきて、何處ともなく罷出られしが、我泰澄が詞を忘れず　守に此事を傳へ參らず。此處の御館に歸らせば、必ずしかしたまへ」と聞ゆるに、守はいと易く諾ひて、鷹を左にするかへしたれば、雲霧高く立登るに、翁いと輕げにうち乘りつゝ、「天下の事は我いはじ、翁は橘諸兄にてあるぞ、忌、人になゝ漏し給ひそ」と告りて、彌百重の尾上を踏みわたり、南をさして行くと見しに、家持くしき思をなして、馬を打早めて歸り給へり。

本朝水滸傳

卷之九

第十七條　守大伴宿禰家持糧を白山に贈る并和爾部眞太刀家持の館に來る

泰澄法師の教に任せて、諸兄の翁に鷹を得給ひ、御館に歸りて思ひめぐらすに、怪しき人の有樣なりける、何にもあれ誓約ひつる旨は違へじと思し、俄に使を立てて召すに、掾大伴宿禰池主、大目泰忌寸八十島、裝束を整へて頓に來たるに、守大伴宿禰家持出居に迎へて告りて曰く、「今日なんしかぐ〳〵の旨あり、白山の泰澄はこれ太子の御祈の師なりしが、京師を退きて白山に籠るといへども、天下の民のためには御祈仕つる旨あれど、狹き袖をば天下の蒼生に覆ひがたしと聞え、それぐ〳〵の事を我に賴みつるよしを、不意諸兄の翁に逢ひて、法師の望を詳しく聞きぬ。さて諸兄の翁は今は仙人となりおはし、木

の葉を衣とし、草をあぢはへ、雲を道とし、山を家とす。さて我に別れ給はんとする時、天下の事は我はいはじと宣ひ聞え、みそらを渡りて去り給ひぬ。さはこの一言ぞ心あらん。又泰澄が諸兄の翁をもて賴み聞えつる旨は、百人の人に豆を負はせ、千疋の馬に米を負はせ、十頭の牛に鹽を負はせ、白山の窟に贈りやらへ、そをもて千人の人に供養へて民種の上を祈らんとなり。我是をうけひかずば、放てる鷹を返さじとのたまふ。我爰にして思へらく、鷹はよし思捨つべき物なり。しひては是を得まくせねど、民くさの御祈とあれば、我承引かざらんやと誓約ひて、その所をまかんでしなり。此事公に似て私なり、私にして默止もならず。汝達の御旨は如何に」とあるに、池主八千島共に聞きていへるは、「こはいかで默止もあらん。たとへ重ねて公の御咎ありとも、下官ら承引き奉らん」といひて、御藏をひらかせ、米を出し、豆を出し、鹽を出し、すなはち泰忌寸八千島に察させ、人に負はせ、馬に負はせ、牛に負はせて贈りやらふに、日に行き夜にいきたらはして、二日二夜の曉にいたりて、白山の麓に著きぬ。岩屋とおぼしきあ

たりは、里人に問ひ聞えて、八千島まづ馬を馳せ登せて行けば、山半ばかり行き至らざるに、多くの民ども迎へ來り、そが中には二人三人袴に布肩衣をうちかけて、太刀佩けるも迎へ出でて、「岩屋の道はいと險しく、雪深く降積みて侍るに、御送の人を煩はし侍らんが無禮ことに候へば、我々爰にて承りたし。御贈の品を受取り奉り、是の民どもに負はせかへ侍らん」といひて、千人ばかりの民を出し、米を負はせかへ、豆を負はせかへ、鹽を負はせかへて、釜を具へ湯を沸し、酒を暖めてもりをはり、かの太刀佩けるが懐より筆を取出て、一枚の證文を認む。その文に曰く、

泰澄法師天下の御祈仕うまつるにつきて、千人を供養すべき糧とし侍る、米の俵二千丸、豆の俵二百丸、鹽の俵十丸、白山の下にして是を負ひかへて受取り奉る。ていれば御祈の事足りぬ。卽ち泰澄が家人小松藤見、松任足日、承引き奉る旨ゆめ〳〵違はず。よつて印をしるしてしかいふ。

天平勝寶元年十月廿日　　白山泰澄

泰忌寸八千島主へ

と書いとどめて出すに、八千島讀み終りて禮をなし、文を懐に入るゝにいたりて、藤見八千島にいつて曰く、「今度の御禮使を立てて酬い奉らんと、守大伴卿へ聞え上げさせ給へ」と申すに、八千島承りをはりて、役の民に馬牛を曳かせて歸りぬ。さて今般は四日ばかりを經て御館に歸り、守へしか〴〵のよしを申しぬ。さて二日三日過ぐるに、何方ゆともなく、馬に乘り鉾を持たせ、先を拂へる供人、後をおさへたる供人、五十人ばかりを將て、身には裝束し、冠したる武士の、守の御館の門邊に詣で來て、馬より下り、案内を請ひて、禮正しく謂ひて曰く、「我白山の岩屋より來れり、此程の禮を聞え奉らん。守御目を賜はるべし」とあるに、御館の家人承りを申し、「先づ此方へ」と聞えて、廣間の上座にとり迎へ、供人らは長屋に息はせて、さて入りて守に申すに、守又裝束し冠し、出居に迎へて相見ゆ。武士禮正しくし座をはひ下り、うなづきて申して曰く、「下官は白山の岩屋に侍る、和爾部眞太刀と申すものにて侍る。此度泰澄の御祈につきて、供養す

べき糧を多に贈り給ふ、難有きまでかたじけなき。下官御祈に仕うまつる役の者なれば、頓に參りてその禮を聞え奉る」と申すに、守きこして、「是は御禮に過ぎたり。天下の事と侍るを承りては、かく官にさむらふ我々、いかでなげには仕うまつらん。殊更我愛でし鷹を泰澄の敎によりて、容易く得て候へば、その禮又なからざらんや。いと遠き所をかく參り給ふに、御あるじつかうまつらん」と聞えて、杯は酒杯より始めて、八百杯にいたり、物は飯より始めて千盛に及びぬ。さて互に裝束をやつし、くさ〴〵の物語ども聞ゆるに及びて、眞太刀硯を乞ひて此守を稱へる歌をよむ。その歌に曰く、

なげ―無げ、もろそか

橘の下照る庭に殿たてて酒みづきます是れの君はも

酒みづき―酒びたりになる、大に酔ふ

「いとおろかに侍り」と出す。守いと嬉しがり聞えて、「おのれ生れながら歌を好み、政務の暇は是にかゝれり、いで御答へ奉らん」とて、

酒みづく君によりてぞ橘の下照る庭にけふはなりぬる

と詠ひあひて、互に心を和しあひけるときに、眞太刀守にいひて曰く、「つきなき事には聞きたまはんが、世の中いと騒がし。守はまづ道鏡の法皇をば如何にか思せる」守暫しして答へたまはく、「我にしてはいひ難し」眞太刀又問ひて曰く、「太宰府の阿曾麻呂は守如何に思せる」守頓に答へて曰く、「いと諂へり」眞太刀又問ひて曰く、「左大臣橘諸兄公は如何に」守こたへていはく、「是はたゞ時と老を知れり」眞太刀又問ひて曰く、「和氣眞人淸麻呂はいかに」守こたへていはく、「いと忠誠なり」眞太刀聞きをはり、「いと畏けれど、鹽燒王は不破内親王を伴ひ給ひ、祖王は内舍人を將て、何處ともなく隱れたまふ。此二王はいかにと申さん」守聞きてこたへたまはく、「いと深くして思ひがたし、思ひ得るも亦云ひがたし」眞太刀又問ひて曰く、「藤原惠美押勝は如何なる人ぞ」家持うちうなづきていはく、「押勝は天下を思へる人なり、惜むべし〳〵。此朝臣天皇に奏しきこえ給ふ歌に、

兒輩らよたわわざなせそ天地のかためし國ぞやまと島根は

ときこえあげ奉りて後、近江の高島に退きしとは聞きしが、天地の時いたらず侍るに、

二王も隱れ給ひ、押勝も首を佐保川に梟けられたりと聞きて、いとかひなく口惜しかりし」といひて、覺えず涙を拭ひ給ふに、眞太刀近く寄りて、「暫し聞え奉りたき旨あり、御側の人を退け給へ」と申すに、守きこし得て、目を以て示し給へば、侍る人々みな退きぬ。守ときに眞太刀を寄せて久しくさゝやき聞え給ふことあり。その事は側に聞居ねば、何事にか知らず。さて、御轝終るに、眞太刀退出んとすれば、守、「暫し」と留め、金三百枚を取出させ、「此度の御祈に具へ奉る」とあるに、眞太刀少しもいなまで、その金を箱に收めさせ、供人をつどはせ、あるじぶりの禮を聞え終り、廣間をはひくだり、家人に禮をきこえ、馬に打乘りて白山をさして退出ぬ。

第十八條　清麻呂金麻呂手節の崎にて妻子に逢ひて共に將て伊吹山に登る

紀伊の溫泉には、清麻呂金麻呂をあやしき輿に乘せ參らせて、道首口足をゝしくその後方に立ち、大道を往けば人知るべしと思ひ、道を眞熊野の奥にさし、志摩に出でて、伊勢道にかゝり、鈴鹿の川を右に渡り、能保野を過ぎ薦野を過ぎ、玉倉部を越え行かんと、口足旅行をはかりけるにより、先づ眞熊野をも事なく過ぎて、志摩國英虞の郡手節の崎に行きたらはしぬ。「爰は人しるまじき邊なれば、暫し息らはせ參らせん」とて、一日二日と泊り居るに、清麻呂が夢のうちに、天照皇大神あらはれたまひて、「汝達今一日此處に息らはゞ、二人ながら妻子に逢ふべし」と聞えたまひ、又口足が夢には、「汝此南の濱邊に出でて待つべし、明日の夕汐に泊てんずる船をよくもとめ得てよし」と、神告に告りつき給ふと思ひて覺めぬ。三人は一時に頭をあげて、天に仰ぎ地に伏して御祥をたふとみ奉り、日既に今日と明けゆくに、三人身を淨くし心を清くし、御宮の方を立拜み伏拜みて、口足とく南の濱邊に出でて、さるべき船や泊てんと待つに、時つ風吹起りて、唯此陸をさして浪の來よるに、神祥爰に靈驗ありと思ひ、南の海邊に向ひて立つに、帆はいと小くて篷深く葺きたる船の、釣船ともあらぬが、直に追ひ來りて磯面による。そ

の外は船もあらぬに、いと嬉しく奇しく思ひて、とみに馳せより、楫取の翁に對ひて、「此船に人やおはす」と問へば、老父聞きて、「人は一人もおはさず、荒坂の津より乾魚を積みて遠江の海に下るなるが、汐風心に任せず、爰によりて侍る」といふ。口足近くよりて、「老夫な隠し給ひそ、我敵すべきものにあらず。老夫の乗せまゐらせし人々を救ひ奉るものなり」といひざま、つとよりて篷をあげて船のうちを見れば、まづ金石ぞ乗りゐたる。大太刀も乗居たるに、「これは口足にておはすか」とて、先づ船よりあがり、唯「よき夢を見つる」とのみなり。金石大太刀あらましを語り、武雄武荒の兄弟を呼び出でて、「彼方は押勝君の御家人にて、假に鼻彦とは名告り給へど、御名は道首口足にて在せり。さは清麻呂の卿、親なる金麻呂も將て在さん」などいふに、口足昨日の夜の神祥を語り、さて、「清麻呂卿の御妻子は」と問へば、船の中にてとく聞給ふに、いと嬉しみと這出でたまひ、「はや〳〵逢ひ奉らん」とあるに、口足唯神祥のあやしきを恐み、人々も濱邊にうちたふれて、神宮の方を拜み奉るに、楫取の老夫はことを知らねば、「此老夫によ

いひざま―いふなり、いふや否や

き虚言を申させ給へる」とて呆れ居たり。さて手節の崎なる宿をさして、人々伴びつゝ行くに、金石がいはく、「巨勢長谷は道より御暇を乞ひて荒坂に參り、巨勢獵野がなきあとをかくし、さる事を妻子にも告げて祭の事どもいたしはてなば、追ひて伊吹山に參り來んと申す。さて眞熊野の道にかゝりて、山道をしのばせ奉らんと思へるに、その日雪いと寒く降來、雲いと深くさへぎりたるに、山道の行くさき物憂くし給はんと覺えしにより、又荒坂の津のあたりに漁する浦方に行きて、此浦船を頼み、かく渡りつきて侍ることも、まさに皇大神の御祥なりけり」とて、語りもて行くに、旅の宿近くなれば、清麻呂金麻呂迎へ出でて、泣きみ笑ひみうちきほひて、その夜はその宿に來し方を語り明し、夜明けもて行くに、「かく憂世を忍ぶ旅行には、誠に船こそよかめれ」とて、直に手節の崎を乗り出し、船を阿漕が浦に追ふに、風進み汐叶ひて、唯一時に追ひつけば、人々岸にのぼり輿に忍ばせ、馬に乗りなどして、五里ばかりの道をとく行き、さて能保野の原に至れば、清麿呂人々に告りて曰く、「此野はむかし倭建尊、東の國より歸りのぼらせ給ふ

命完けん人は云云ー古事記に「命の完けん人はたたみこも平群の山の熊がしはをうづにさせその子」

とき、此處にて御病の烈しくおはしますに、天下の民くさをおほし、命完けん人は平群の山の熊樗が葉を髻華にさせと詠ませ給へり。此平群の山といふは、大和の國なれども、此御歌によりてや、此尊崩御の後、おのづから陵のへに熊樗にはかに生ひ出でて、百枝忽ちにさし廣ごりしと昔よりいひ傳へし。さればぞその樗の葉は、彼の平群の山なるにかはらず」と聞くに、人々小枝の杪を折取り髻髮にさす。清麻呂の卿又いはく、「此尊は明の宮の天皇の祖父の御神にておはしませば、是といひ彼といひ、直に御前をわたらんや。我此陵に手向して、願ひ思ふ事を、祈り奉らん、人々も祈りたまへ」とて、おのおの陵にまうで、旅の事なれば、大野の原の松が枝を折りて、とりあへぬ幣奉りて、

手にまける珠松が枝の手向ぐさ幾代までにか年の經ぬらん

また妻の刀自は、「はしきやし我家の方ゆ雲ゐ立來も」と、國しぬびませる御歌を思出でて、

此處にして家やもいづこ白雲の棚引く山を越えて來にけり

かへりまうし―報賽

さがし―險し

人々の手向の歌、又道行ぶりによみ云づるもおほかめれど、爰にのせず。さて夜にもなれば、むかし御墓づかへとて此處に殿造りて侍りし、波多の金森の子孫の、今は祝部にして、此處にさだかに住居しけるがもとに、宿を乞ひてその夜を明し、曉またかへりまうして菰野をすぎ、それより美濃の國玉倉部にいたり、此尊御脚ひたしたまひつる清水の、今も猶いと清くてあるを、殊更思出づる事のあるに、

蘆芽のあしなへし我ぞむかししぬばゆ

と詠みて、涙を拭ひ、遙かに宇佐の御方をさへ伏拜みつゝ、日も高くさしのぼるに、口足さきに立ちて、「近き方はいとさがしけれど、早く伴ひ參らせたくおもふ」とて、しもと押分くる道を行きて、伊吹山に登るに、此所もぞ雪寒く降りしけり。武雄兄弟君達を負ひ、大太刀清麻呂を助け奉り、金石父を負ひまゐらせ、口足はこの山道の御案内して、霜降月の中の一日、白猪老夫の大城に著く。口足先に參りてかくと申せば、祖王も聞しめして、いとくめでたくおほしめされ、白猪も妻も出迎ひたるに、金麻呂日比

そこばく―事多き意

思ひ戀ひし娘の、さながら老いなみたれど、白猪が妻はそれなりけるに、「こはそどろなり、ゆくりなし」などいひて、物語まづ他事なし。白猪もいと怪しきまで、その緣を思ひつゞけて、事おほく言出づべく思へど、まづ淸麻呂のおはしますに、とりなし、禮厚く聞え奉り、人々をも迎入れぬ。これらの物語はいふさへもあまり、書付けんはなほそこばくならんに事そぎぬ。祖王淸麻呂に御目を賜はり、彼が忠誠なる志を感愛給ひ、なほ金麻呂親子が志を稱へたまひ、幷に大太刀武雄武荒も大まへに召出させて、その志の直なるをめでおほし、又勳功の武きを稱へたまふに、巨勢獵野とも知らず過りて殺したるを、武雄兄弟悔いて申す。祖王つら〳〵に聞終らせ給ひ、まづ暫しの休息を許したまひ、白猪の老夫計らひきこえ、「淸麻呂妻子幷に金麻呂は爰にあらして、大君の御慰を申させたまへ。武雄兄弟金石大太刀の輩は、尾張三河遠江駿河甲斐伊豆のわたりにさむらはせて、人の志を合せたまへ」とて、その月十まり七日、各印を賜はりて山を下りぬ。さても冬枯れし奥山に、さむらはす人は姫のみなりしを、今はかく都人の入り集ひませるに、祖王もうちにぎびて思しめしける。

本朝水滸傳

卷之十

第十九條　人置の眞鮪韓臼の犬神金を分つ井弓屋の俊雄隱妻を迎ふ

武藏の國豐島郡、大江戸なる神田のあたりに、弓を削りて業とするものあり、名を弓屋の俊雄といふ。さるは、その削る弓工どもをいと多く召抱へて、大なる長屋に住ませ、年には千萬の弓を造りて、國々の守に賣りあがなふほどに、家は富榮えて、類なき長なりける。さるほどに、おのれは業の事はしらず、唯人とまじらひて、酒のみし歌をうたひ、月花を愛でて、遊び居る事のみを事としけり。妻はいと嫉妬深くて、妾ざまのものと見れば、いたく訇懲すほどに、顏よき女は、此家に參りて使はるべしと思ふはなし。さるより邊をたち振舞する女どもは、唯醜女のみを選集めてけり。かゝる事は彼嫉妬深

き妻のしわざなりと、人みないひながしけるほどに、奉公人肝煎るものどもも、俊雄が家に仕はすほどの新參は、世の中の男に打飽かれたる女のみを選立てて、さる時となれば、その家にのみ押立ててつかはしける。正月も過ぎて二月の二日といふには、是等の國は召仕どもをさしかへ侍るに、さる醜女どもも、とかくに妻の嫉妬に怖ぢて、是等さへ差替らんといふに、そのわたりに奉公人肝煎る屋の侍るが、その名を人置の眞鮪といふ。よく肥えたる人なるが、家の表には札をかけて、「給仕人承引所人置の眞鮪」としるしたり。時にもなり侍るに、彼方を此方へ差替るも侍り、又奉公の年季終てて、親里に歸るも侍り、新參とてまうで來るも侍りて、二月二日三日になれば、眞鮪が家はたゞ女島とふ島のさまに、女ども入込みて、おのがじしいひさわぎ、あるじが妻子は所狹く侍るに、籠のまへに下り居て、彼方此方へと物し騷ぐに、彼弓屋へつかはさん醜女どもを擇りたつるに、いと可笑しくも騷がしくもあるかな。さて今參とて來りし一人は、かしらいと細く、髪は短く、咽はふくらかにて、胸のいと高くさしはりたるに、腹はうちこけて、

とふ―といふ

尻のかたにさし出でたれば、後は腰の上に棚をひき渡したる姿なり。裙も亦短くて、脚はいと赤きが、先をば内のかたに踏曲げて、沓などぬぎおきたるは、八文字を見るばかりなるに、眞鮪打見て、「よき女こそあれ、よく調ひて侍るは、何處よりはひ出でたるぞ」と問へば、口をばいとちひさくあきて、聲は唯咽の底より響出で、「我なみは此國にて、鳩が谷と申す里より參りつ」といふ。あるじ聞きて、「よし〳〵新參に參り給ふ所あり、人添へて參らせん」といふ。又次に來るは、眉はへ文字にはえ埋れて、額の隈いとすくなく、鼻はおしたれてうち平み、頤はいと長く尖りたるに、姿はあまりなればいはず。あるじうち見て、「是も亦調ひつ、弓屋の内君はいかに愛でたまはん。何處の人ぞ」と問へば、「毛野の國駒田にて侍る」と申す。さてその次に來つるは、色のいと白きに、鼻の右左は紅粉引きたらんさまなるに、腰は立臼の圍あるを、さすがに見せじとて、帶いと廣くうち廣げて結ひ居りたり。あるじ見て、「是は少し調はざる所あり、色の白きが白珠の疵なり」とて受けず。又次に來るは、歳のほど十七八と見えて、眉いと細く、眼

（文字―八の字眉が生え延びて兩方より相接したる也）

皮艶やかにうち重なりて、鼻のかゝより清く、脣の紅なる、髪のいと黑く長き、面の白くきら〳〵しきより、手脚の細やぎて艶深きに、姿の前後とゝのひたるを、白き赤き下重して、上には藤の花色に染めたるから衣、唐織の錦の帶をふさに結びたれて、歩入るに、唯あたりなる女どもは、雪のうへの山鴉よりもいと黑く、初花にならべる枳殼のはりよりもいと怖ろし。主人打見て、「かほどの今參多き中に、かばかり調はざる女もあらじ。髪のめでたき、顔の美しき、姿の細やかなる、詞の艶かなる、世の中にしては下照姫なり、弓屋にしては岩長姫なり。さて又そこの物宣ふを聞くに、都の人な。かゝる東國へは何しに下り給へる。さるさまの人は、何處の守だちもほしがり給ふに、何方へも參らせん。さて名は何とか」と問へば、「花木と申しさむらふ」「さて歳は」と問へば、「今年十八にて」といふ。「京はいづこの人ぞ」「都は狙澤の池の南に、年久しく住みてさむらふが、さる事の侍りて、わなみの伯母なる人に連れて、遙けき道をくれ〴〵と下りさむらふ。承及びつる長のおはすに、弓屋の何とやらん承りたる方へ、今參にまゐりた

（岩長姫―大山祇神の女にて木花開耶姫の姉）

く、人に問ひて侍れば、さる望ならば、人置の眞鮪と尋ねて賴み給へと申すに參れり」といふに、亭主頭をかきて、「俊雄たゞ一目見たまはゞ、いかばかりの祿なりともかゝる新參りはとのたまふべけれど、これ見たまへ、爰の頰赤の腰臼さへ、すこし顏色の白きに、調ひかねしと思ひて侍るに、そこをまゐらせば、唯一時に内君の手にかけて、髪をひき拷られ、顏はかき裂かれ、手脚はうちなやされ給はん。されど、さる都の人の思ひかけ給ふ事なり、又俊雄をも垣間見に見させて、千年の命を引延べて參らせんとも思ふに、先づ爰に入りおはせ」といへば、「いかばかりにも賴み參らする」とて、奥の方に入居たり。さてあるに韓臼の犬神つと入來て、「亭主おはせるか」といひてさし覗き、「是は花木もこゝにか」といへば、「さいつ頃より參りて」といふに、犬神亭主にむかひて、「此少女は、おのれ都に侍りし時より、よく知れる人なり。いひもて行けば從弟のはしにもさむらふが、これの伯母子と連れて、此程下りて侍るに、何方へも御奉公にと申す、おのれ知り給ふごとく、日ごとに弓屋に入居て多くの米をふめば、折々は主のおはして、都の物語など申す程に、韓臼とものたまはで、犬神々々とのたまひ喚ひて、我をばうるはしき友と思せり。今朝なん臼屋に米蹈みて侍るを、俊雄おはして、「我妹が嫉妬には爲方なし、かく富みて侍るに、物の足らはぬ事はあらねど、唯是ひとつの禍にかゝりて、朝夕醜女どもに立ちふるまはれ、穢き色を見、臭き香をふるゝは、貧しき人の、よき少女をほしきまゝに得給ふには、はるかに劣りたり」と詫び給ふを聞きて、おのれいと易く承引きぬ。「さる内君の嫉みたまふに、いかで御家のうちには仕うまつらん。近からぬわたりに家を求め、此花木に伯母をつけて、隱妻としたまひおかんに、誰か知らん、その御計ひは人置の眞鮪と申合せて聞え參らせん。さるにても少女をかいま見たまはでは」といへば、俊雄聞かして、「たとへその女のけはひは、百いふ事を唯一つにして聞き得んも、我あたり立ちふるまふ女には優りぬべし。ことに都の少女と聞けば、かいま見もせじ窺ひもせじ。はやさる筋を眞鮪と計らへ。金はいかばかりをも取出でて、此事頓にはたすべし。けふは碓屋に居な、早く行け」などのたまふに參れり。おのれも近きころ京より下りてあれば、さる家もとめん術も

米をふめば一踏曰にて米をつく也

けはひ―樣子、すがた

侍らず、又處の掟などはゆめも知らず。眞鮪よくものしたまへ」とて、うち踞み居たり。眞鮪これを聞きてうち喜び、「是はいとよし、近からぬ所といはゞ何方かよけん、葛飾の眞間のあたりはいと遠し、玉河の邊も亦遠し、さるは此わたりにせん。いかにとなれば、よき家の侍り、かゝる事は近きもよからず、遠きも亦よからぬものを、よきほどのあたりなるに、庭は水せき入れて、高樓めく所などもうちはれて侍るに、爰に定め侍らん間、其方には今一度弓屋におはせ」さて、「家は求めつ、何くれと調へたつべき物も侍るに、金をまづ百枚ばかり、此犬神に越したまへ」といふよしを、短く書附けて出せば、犬神懷にして弓屋に行き、小娘の、事辨へぬがあるに、「竊に」とて、俊雄が許へつかはし、我は碓屋に入りて待てば、俊雄は園のべの花など見る樣にしなして、庭の荒石を遶りて碓屋に來り、「いとよし〳〵、その家に定めよ。その少女をも据ゑおき、伯母をも附置け。おのれは今宵參らん」とて、金百枚まりを取出でて、「是もて參れ、その外にも調へ立てん器物どもは、何にまれ密にいへ」とて入る。さて人置のもとに歸りて、「しかじ

うちはれて―見晴しよく

か調ひたり。今ゆ其方と其家に行きて、塵かき拂ひ、疊どもも敷きかまへん」といへば、眞鮪うち笑ひて、「その家はな、搔拂はんにも塵ひとつだも侍らず、漸々昨日か一昨日か、富人の立退きたる家なり。その住める人は、文石の何蜘とかいひつるやうに覺えし。いと忌々しく賑ひて、人などもあまた召使ひ、此わたりの守も及び給はぬ住居なりしが、俄に事もなく立退き給ひ、家は我にあとらへおきて、いかなる人をも住ませと、申置きて出でたまひし。双六にがないたく打負けたまひつらん。さるほどに家のいみじき、道具のきら〳〵しき、疊の新しき、庭の樣の面白き、たとしへなき家の樣なり。さて此金はさる家求めたり、さる道具もとめたり　さる庭の木草もとめて植ゑつ、石など求めて据ゑつと欺き、家は我家なれば、まづ此金は百枚を我いたさん、のこれる十枚あまりは、汝が使したる褒美にやらん」といひつゝ取分けつ。犬神なま〳〵に聞取りて、十枚の金はとりつ。さて花木に對ひ、「かゝる幸侍り、伯母子も爰へといはんに、所は何方ぞ、人を遣らん」といへば、花木聞きて、「さは願へるまゝにて侍る、今暫し爰にて待つ人の

あとらへ―誂へ、委托し

侍り。又伯母の刀自も、その人と伴ひて、爰を教置きて侍るに來り給はん。まづ先に參り給へ」といふに、「さらば、その人に逢ひて事はてば、下女どもに案内させて、伯母子も共にその家へ移り給へ。物荷はする事などのあらば、下男もそこにさむらふに」などいひちらし、「さて忘れつ、弓屋の内君は今參りをや待給はん。それ先に來給ひし鳩が谷の鳩女と毛の國の駒女と、此二人は内君の思人なり、はや〳〵參り給へ。飯代は錢二百置きて行かせ。そこにおはす頬赤腰臼もつきて御目見申させ」など、落なくいひおきて、犬神をあともひて立出でぬ。暫しあるに、笠深く著たる若人の、いと高貴なるが、袴もきず、面ざしより始めて品樣のいとたかきに、裝束は立ちおくれたるのみか、世の中いと馴れぬ人の、彼伯母刀自が、年のほど四十歳ばかりにて、是もいと高貴なるが伴ひて、「人置の眞鮪とふ人はこれにて侍るか」といひて、太刀も拔きおかずつと入れば、花木走出でて、「待參らせしに」といらへて、手を取りてしるべし、上座に誘ひ、伯母の刀自にも打答へなどして、彼今參りどもが立ちみちたるに、云ひたげなる事もあるめれ

あともひて―引連れて

ど、と見かう見てさすがにえいはず、「今暫しのほど、御徒然に堪へさせ給へ。何事も申聞え奉り置きぬる通なり。さてみづから參る所は、何處なるかは知らねど、此あたりと承りぬるに、伯母の刀自もて竊かに聞え奉らん。さは歸らせたまへ。今まで暫しの御隔も仕うまつらざりしに、今夜いかに淋しくおはさん」といひつゝ泣く樣を見て、頭は笠ながら打傾きて、鼻などうちかみ、「何事もよく心得てあるぞ」と聞えをはり、伯母をば其處に置きて、しほ〳〵に泣亂れて歸り給ふ樣を、花木はつら〳〵と見送り參らせて伯母がまぐはせ袖引きなどするに、是も鼻うちかみて、「さて待居し人にも逢ひぬ。申す事も果てたれば、今はその家に參らん」と聞ゆるに、下女は先に立ちてしるべしける。

まぐはせ―目くばせして

第二十條　弓屋の俊雄人置の眞鮪訟す并高橋手力二王を救ふ

人置の眞鮪韓臼犬神、先に參りて侍るに、案内の下女花木伴ひて參りつるに、「よくこ

そ」とて、石立てくはへたる荒磯に造り出せる殿の侍るに据ゑおきて見れば、先に我家の怪しきに据ゑて逢ひつるよりは、いや優りに優りて、面ざしのいと貴く、あてなるものいひ、立振舞へるまでも、いかなる大宮の皇女と申さんにも、又此上はおはさじと見るに、彼伯母といへるも、なみ〳〵の人にあらず、貴く生れ出でたる様の侍るに、さるかたにはよく馴れたる人置なれば、犬神を一間に招きて、「此少女平人にはあらず、そこには都より知りつる人ぞ、しかも從弟のはしなりといひしが、そこも確蹈みてあらん人ともゞ覺えねど、今此御人ざまの位をもていはゞ、彼少女は神の御末なり、腹悪しくなし給ひそ。伯母子と其方はその御仕人の類ならん、ていればさいふべくもあるかな。さて此所の神は神田部止伎與と申給ふが、物がたくおはするにより、我々が業の上にても、人の身の程、又生れし所、聞きに聞きつくして、さて奉公人のために我も印を押し、事あらば承らんといふ事を認むるなり。彼少女は今日なんすゞろにおはしたるに、誰をか頼み所とせん。其方も都の人にて、少女が家も知り給ふとあるに、證文一通認めて出し給へ。おのれ又

ていれば云々―と云へばさうもいはれさうなる事かな

その上に印を加へん」といふ。犬神聞きて「いと易き事には侍れど、我は文字を知らず、唯今とて書認めん事はえせじ。よし〳〵此伯母子はよく男手書きたまふに、爰に頼みて書認めて、先づ落居る事は落居ん。人置の先生硯おこし給へ」といへば、「をい」と應へて玉を磨出したる箱の、墨いと薫りて細やかなるを、荒けく磨延べて、「伯母子爰へ」と招きて、「奉公人の證文を書いたまへ、是は世の常あるべき様の事にて侍れば、文言は我より申さん、夫にて書きたまへ」とて、陸奥紙のいと白きを持て出でて、「さて申すべし」とて、何々一條一つに此妾の事といひ出せば、伯母筆をとゞめて、「彼子は御仕人にこそとは申したれ妾と申す御契約は仕らず」といふに、「さは」とて、「かゝる家を求め多くの道具を調へしは、隱妻とあるによりての設けなり。妾にあらでは我々事の行たらはざるにて、俊雄の怒に逢ひはべる事なり。なににもあれ妾と書きたまへ」といふ。伯母の刀自聞きて、「さらば、彼子もさる心にも侍らず、自らも亦さる事にてはさし添ひ難し。その上にも妾とあらば、かくては差置きがたし。さらば花木よ、爰を退出ん」と申し

落居る云々―きめる事はきめて置かん

にこそとは―「にとこそは」とあるべき所なり

て立つに、眞鮪呆れて、「さは我計足らず、是なる犬神も御怒を受けて、重ねては米も踏ませ給ふまじきに、よき業の門を失ひたらん苦しかるべし。犬神何故にものいはぬぞ、おのれが俊雄を唆し奉りたるにあらずや。今となりてなど默止るぞ」といへば、犬神聞きて、「我は唯都少女の色好き事をこそ申したれ、妾などの事は契り申さず。又此家等の事につきては、汝多くの金を致したるならずや。さるよき事したれば、其方こそはいかばかりにも計らひ給ふべき事なれ」とて、更にも立合はずあるに、人置頭を搔き、眉を集めて、「さるにても今夜俊雄の來んとのたまひこしつるに、さる事終てではことわりも聞え難し、いかにせん〳〵。よし〳〵まづ證文の上は御仕人と書かせたまへ。その上の事はいかばかりにも計らひ侍らんに」といふに、伯母の刀自、「さらばそこより申したまへ」とて、いふがまに〳〵書いつけたる證文に曰く、

一ッに、此仕人花木の事は、大和國添下郡奈良の都のものなり。此度御家に仕人となりて、御身扱仕うまつりぬ。

二ッに、御家の風は、承る如く何事も背き奉らじ。

三ッに、天が下の御掟にたがひ侍らず、よく守らせ奉るべし。

四ッに、たとへ如何さまの横事出來ぬとも、我々出でて主を苦め奉らじ。

五ッに、一年に賜ふ料とて金三枚を賜はるうちを、此度金二角受取り奉る。此年のさきも御縁はべりて召使はれば、すなはち此定を以て賜ふべきなり。此後の事あらん時のために、此證文條のごとし。

天平勝寶二年二月二日

韓臼の犬神
人置の眞鮪

弓屋俊雄どのへ

と少しも女びず、男手を墨黑く書いつけて出せば、人置讀終り、「是は男の物書などいふは、いかばかりか劣れる。此手もて女子集めて、手習の大人を業とし給へ」などいひ稱へ、懷の袋より印ひとつ取出でて押せば、犬神は、「さる物も持たず」といふに、こはあ

る事とて、手の大指に墨をぬりて押させ、さてその事もはつるに、まづ食の設せんとて、眞魚屋には魚をもとめ、菜屋には菜をもとめ、酒屋には酒をもとめ、宾人を呼びたてゝ、夕食いと清らにとり調へて、まづ少女だちに參らせつゝ、おのれらは酒うち飲みて、日の暮るゝを待つに、人置の下女に案内させて、俊雄入來るに、「長君々々、いと遲し」といひ立つれば、「けさう人は夜に紛れて」などいひにほやぎて、「はや參りてか」といふに、「先より參り給ひて、待侘びたまへり」と聞ゆるに、「少し覗かんや」とて、物の隱によりてつくゞと見居りて、ひそ〳〵と歩み歸り、二人を招きて、「是は人にはあらじ、唯物の化けたるなりとぞ思ふ。かゝりと知らば我よく化粧し、衣なども薫こめて參らんに、彼山の神の何處へとていたくあれ給ふに、拔足をして内を出でつれば、唯かゝる樣なり。櫛やもたらぬか、元結の亂れたる。洗頭槽や無き、顔のいと黑みたるを」とて、俄かにかい繕へど、元より此男の樣は面いと短く、頭打ひらき、眼のしりうちたれたるに、鼻の上はいとひきく、二つの穴は空ざまにあきて、口は髭にうち埋れ、髮は古草の如く打枯れて、白髮生ひまじり、丈は四尺あまりなるに、耳のみいと長く押したれて、唯狛の犬なせり。さは如何に化粧するとも、花木何に艶ひそめんや。犬神奥に行きてうちさゝやくに、伯母も花木も出來て、「殿のおはしたるに思知らで、御迎にも出でず、禮なき事」などいへば、俊雄は頭を席にひしと突きてうなづき、「先づ彼方へおはせよ、是はいと畏し、先づ彼方へ〳〵」といふを、人置をかしがりて、「是は何故ぞ。御仕人にて候。唯今證文も書定めてさむらふに」といへども、唯ほと〳〵として、いと黑き顔の上を丹塗にうちはきたるばかりに打赧め、あるは光出でなどするに、汗はひたなぎに搔なぎ、二人が手をとり誘ふをば、命の極と苦しくしたり。さて正目には向ひ居難ければ、ゐざり出で、地の上に造りかけたる簀子の侍る上に、庭なる山に向ひ居て、「梅こそ盛なれ、いとよき花」とぞ稱へ居りける。伯母近くよりて、「今參りのものは年まだ若く、何事もうひうひしく侍るに、東國の風俗も知らざれば、御心隔てず打懲して使ひ給はれかし」といふに、「をいな〳〵」と應へて、少しも見向かず。人置は頭を搔きありきて、「酒ひとつ」

とて盛渡せども、俊雄は手を顫はせて幾度か打覆し、漸々口にさしよすれども、口ごめに顫ひあがりて、齒はごち〳〵と鳴合ふに、酒は頤に飲覆してあるを、花木は懐紙を出してのごはんとすれば、「おかしませ〳〵」といひつゝ、我著たる袖などにてかきはらひ、唯「水をもて來、湯を持て來、いと〳〵咽のかわくに」などいひ居れり。「さ夜更くる風のいと寒く、春の霜や置渡らん、端居はよからず」とて、戸など差込めて、人置も韓臼も次に立てば、「やよ何處へ行くぞ、爰に居れ〳〵」といひて放たず。さるにても、目をくはせて二人ながら次に行きて居れば、鬼住む島に我一人捨てられたる思にて、唯俯向きてあるを、伯母の刀自近く寄りて、背をかいなでなどし、「花木は御心に止り侍らば、此伯母がともかくも計らひ參らせん。そがかはりには此方の望をも」といへば、俊雄恐ろしげにふりあげて、「伯母君いとかたじけなし、此翁がかゝる樣をも許し給はゞ、如何ばかりの御望をも」といふに、「世の財寶は樣々に侍れど、金に越えたる財寶は侍らじ。我々かく遠き國に下りて、御見扱つかうまつらんと申すも、貧しければ望かなはず。何事

こゞたきー—こちたきか、何れにしても意味明かならず

うしろやすくー—何の氣がかりもなく

につけても世のこぢたきのみなり。今夜は先づかくて歸らせよ。明日は夜おはしまさば、金三百枚ばかりを袋に入れて持て來たまへ」と云へば、俊雄は打頷きて、「いと易し」と云ふ。さてあるに、「主は何處へかおはしたる」とて、松燈させて、「内君のいたく尋ねさせ給ふ」と、人屋の下女が來りて告るに、「いでや痛きめにあはん、明日の夕暮に待たせよ」と、沓をば逆さまに踏みて、「これは他沓ならん、脚も入らず、はかで往かん」などいひて走歸りぬ。人置は跡とり繕ひて、「かく大やかなる家に、女のみをいかでおはさせん、犬神守りておはせよ。火はよく埋らせよ、門はよく締めてよ」などいひて出でぬ。犬神打見送りて、門をば鎖固め立歸りて、「妹よ、我妹よ」と呼ぶに、「君はいとをかしかりつる」と宣はすれば、犬神夫婦のもの立退き、君を上座に据ゑ奉り、「いと〳〵畏くも侍るかな。今夜は大君の如何に打侘びておはしますらん。我弟なるものにはよく聞えおきて候へば、御うしろやすく思さるべし。我妹よくたぶらかして候へば、明日の夜は必ず金持て參るべし。さこそはかなき財寶を貪るなど思すべきが、かゝ

る世の中に人の心を見出で、志を合せ、徒を結び候はんには、彼なん乏しくては如何にせん。又弓の事は大君御軍あらんとき、弓なくては如何にせん。かゝる序にと、かねて我妹と申合せさむらふ。やつがれ伊勢の大淀の濱に、志を合せたる者の侍るに、弓屋をよくたばからせて、此濱まで船にて送らせ侍らんと思ふなり。君かくて如何で長くおはしまさん。今夜より十日ばかりは、かく御姿を窶されて、暫くの御隔りを思したび給へ。やがてよき時を見て此處を出し奉り、よき所を設けて忍ばせ奉らん」と、來し方行末を聞え奉るに、君は、「唯夫婦の人を頼み聞ゆるなり」と宣ふに、夜も更けぬれば靜まらせ奉り、妹はさし添ひ奉りて臥しぬ。犬神は外の方を守りて寢ねつ。夜明けもてゆくに、人置も早く出來て、「いかに昨夜は鼠どもの騷ぎつらんな、皿杯など破りつや」などいひて、唯妾と書認めざるを今日も亦うしろめたくいふを、犬神聞きて、「伯母が如何樣にも計らふべし」と、いひ消して居りつ。その日の夕暮になれば、此度は衣などいと新しくて、金はいひし數を袋に入れて持て來。「これ伯母君よ、それ參らす、能く頼み奉る」などいひて、今夜は金やりつと思ふ誇にや、少し亭主めきてさのみも恐れず。花木近くまゐれど、さながらに逃げもせであるに、いたく地震りてひし〳〵と鳴り、どゝとどよめくに、「我山の神はいたく怖がり給ふに、定めて尋ねもとめん。あな醜の地震や、我戀の敵よ」などいひて、うちよろめきながら、「明日の夜又」といひて歸るに、「まづ一方の望は得つ」とて落居ぬ。さる騷に人置も歸りたれば人もあらず。今夜は君の殊に戀しがりたまふに、妹が犬神にむかひて、「今の騷などに殊更に思出でたまふ御事にさむらへば、竊かに迎入れ奉らばや」といふに、犬神聞きて、「御ことわりには侍れど、天下の民を思されて、皇太子の御後見も聞えおはさんと侍る君の、かゝる筋に輕々しくおはしましては、俊雄は早や參るまじきが、いと近ければ人置きゆくりなく立入らば、君を如何に立忍ばせ奉らん。昨夜も聞え奉る如く、君のかゝるあさましき御姿に窶させ給ふも、唯天の民種を思す故なり。さらば暫しの御慕心をや」といへば、君よく聞しめしとりて、「犬神如何にかひなくくちをしき女と思すらんがやさしくこそ」とて、眞袖を御顔に押しあて給ふ

やさしーはづかし

に、いとほしくは見奉れど、心強くもてなしきこえ奉るに、その夜も明けて又の夜になれば、弓屋はいとよく化粧して、今夜はと思ひつるに、人をも召連れず、手づから松燈して入來りぬ。伯母出迎ひて、「今夜はよくやはしおきてさむらふ。花木も待ちに待ちまるらせしが、又ひとつ伯母が望の」といふに、「何にまれいへ、直に任せ參らせん」と聞ゆるに、「我々が從弟の都に候が、これも御主と同じ弓屋にては侍れど、是はいと貧しく候。弓削者も抱へかねて、手づから削り候に、さいつ頃眞鉋もて手の指を三つ四つ切落し今は業の事かなはず、そが上に西國の守に、千張の弓を作りて奉るべき御契約を仕り、その弓代は先に賜はりて侍るを、その金を盗人に取られ、手はかなはず、弓は削らず、守の御咎にあひていと苦しくして侍るときなり。御亭主此花木を思し給はゞ、千張の弓を船に積ませて給へ。さらば此證文をも妾と書改め、よろづ御心に隨はせ奉らん」といふに、「是は又金よりもいと易し、されど今夜とては成難し。明日なん申しつけて、千張の弓を贈るべきが、さは又浪花の浦に送らんや、何處へ」といへば、「伊勢の大淀の濱まで」

宮碕姫―古事記には美夜受比賣に作る、尾張の名家の女、同書におすひのすそに著きたる月經を見て日本武尊歌を詠じ、姫之に答ふること見ゆ

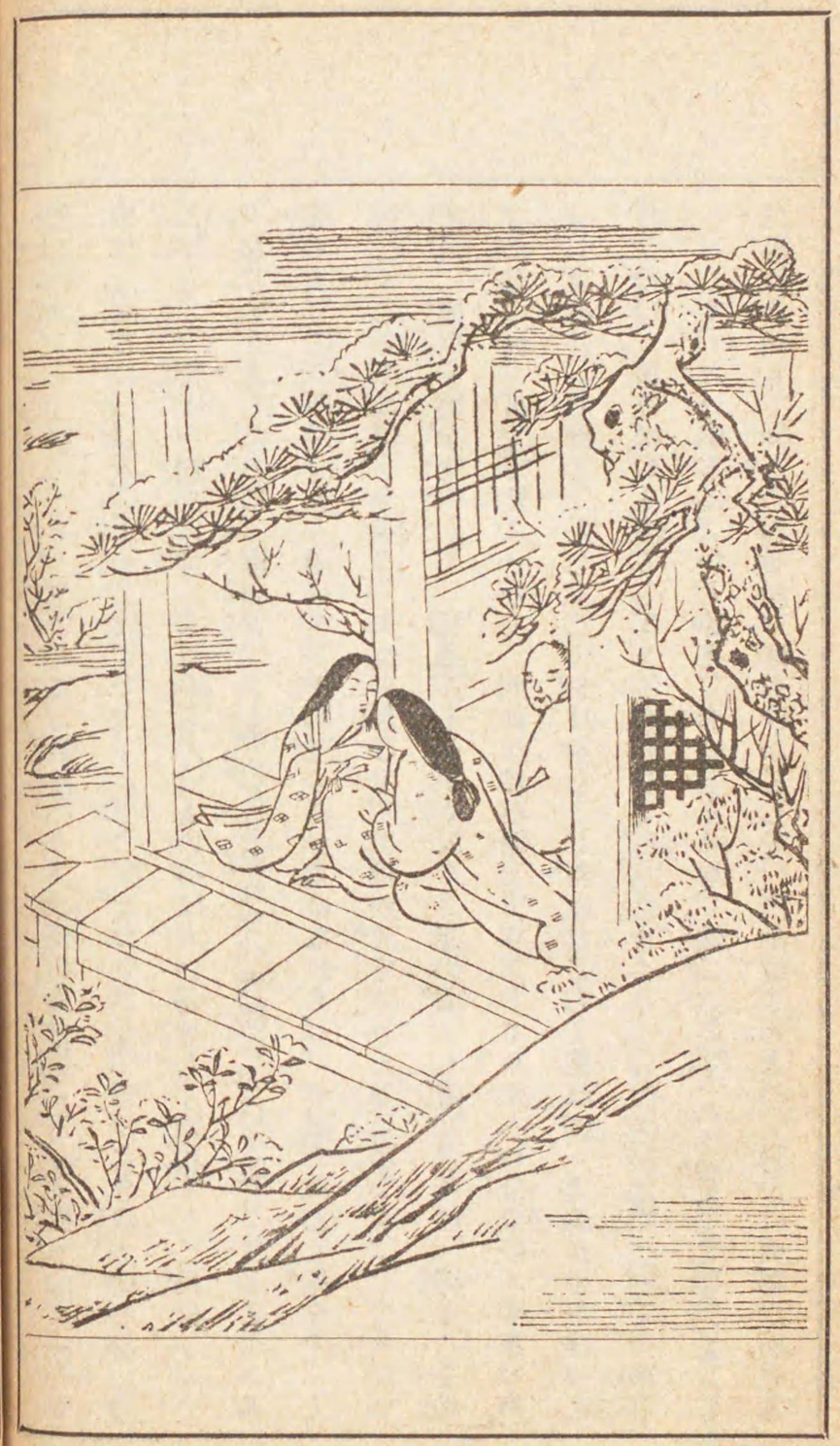
といふに、俊雄聞きて、「如何にも其方の御便よからん樣にすべし。さて今夜は」といへば、伯母うち笑みて、宮碕姫にてさむらへ」といふに、俊雄うち驚きて、「宮碕姫とは何れの事ぞ」といふに、「おすひの裾に」といへども〳〵、俊雄さらに聞得ず、「おすひの裾に〳〵」とて、いくたびも考ふるに、「月經つきにけり」といへば、俊雄頭を搔きて、「こは忌むべき事なり。されど弓の事は違へじ、明日なん大神を濱に遣し置きて、否か然を見定め給へ」とて出でて歸るに、道にて人置が來たるに逢ひて、「いづこへ」と問へば、人置は、「彼御隱家に參るなり」と申す。俊雄人置を近く招き、「心ひとつに定め難き事の出來ぬ。是聞給へ、伯母も花木もよく見るに直人ならず、おのれ一昨日の夜よりいと愚かなるものになりて、つら〳〵形狀を考へみるに、天下を騷動したつべき人の徒に侍ると見き。まづその夜は金三百枚を乞ひしまゝに、いと易く承引きて、又の夜持て參りてやりつ。今夜なほ思咎めて侍る旨は、いとこの弓屋に贈りやらんなど、樣よくいひとりて、我に千張の弓を贈りたらば、花木は心に任すべし、といふ。たとへ誠にまれ、天

下の掟あれば、さる兵具を私に贈りやらふべきや。此者等如何なる人ぞ。其許には人置にて、よくかゝる事には觸れ給ふべければ、とかく見定めて給へ」といふ。人置聞きて、「さは今夜參れるはそれ等の事にぞ。さきの日御隱家をもとめて、女達を移し侍らんとしけるとき、おのれは居らざりしが、下部どもの見定めて侍りけるは、笠深く著て世を忍ぶ樣の人來りて、何にかあらん、花木とうちさゝやきなどし、深くいひ契らふさまなどのはしゞ聞えて、たがひに涙を拭ひて別れつと申す。そのことは漸々さいつがた下部どもの申聞かせて候により、是は心得ずと思ひ、女どもの有樣どもをためし、又犬神が勇みたる有樣を考ふるに、その弓など金などいひかけてさむらふ始終の樣もいぶかしく侍るに、何にもあれ、明日にもならば、御心を定めて訟の御場に出でて、頓に委細を聞えあげ給へ。おのれも立添ひて、よく聞取り給はん樣に訟へ奉らん」といふにぞ、俊雄もさる事ぞと打うなづき、「さらば明日なん」といひて別れぬ。又の日の夕つがたになれば、春の泡雪はだれに降りて、いと淋しげなるに、花木は御上の事のみを思ひつゞけて、いと

はだれ―まだら

悲しく打うらぶれて、心もやましくて臥居たり。伯母の刀自近く寄りて慰めつゝ、「今夜は雪も降るに、弓屋の亭主もおはさじ。人靜まるころにならば、物がたき我夫の心をいひなごして、御上を竊かに迎へ入れ奉らん」といへば、いと嬉しく物頼もしく思ほして、火などもともしたるに、漸〳〵起出でて湯漬など參れり。雪はいと白く降りかさなりて、風寒く吹くに、門邊は人も通らず、戌の三つばかりになれども、弓屋のぬしも見えず、人置はまして來ねば、今夜こそあれと思ひて、犬神が寢て侍りしを、打起さんとて立つに、門邊に面白く笛を吹鳴して、行過ぎもせず吹入るゝ聲の聞きも違はざれば、「御上こそ忍びましつれ、出でて見ん」とて、犬神が目を覺してさしとゞめんとおぼすに、やをら戸を引きあけ、伯母と二人して門の金戸をもこじ明けなどして見れば、犬神が弟を唯一人伴ひ給ひ、御笠はいと深くして、笛を吹きて佇みたまへり。「是はいとほし」とて、御手をとりて引入れ奉るに、いと冷えておはしますを、懷にかい入れて暖めまゐらすれば、伯母は眞袖もて御衣の雪をかきはらひなどして、門をばさしよせ、靜かに犬神が寢たる

なごし―やはらげ



やさしみ―はづかしがり

枕方を通りて、奥床に入れまゐらせ、「一日二日の御隔りを千年の如くも思ひ過ぎぬ」とてまづうちならびて臥させ給ふ。犬神は寝たる樣にして、心には、御道理なり、我起出でばやさしみたまはん、弟もせんすべなからんと思ひ、わざと鼾をうちならしてあるに、何にかあらん、丸矢なす鳴りひゞきて、我寝つる上四尺ばかりを鳴りとほりて、柱にあたりて枕方に落ちたり。犬神あはやと起合ひて見れば、白鳥の羽にてはぎたる矢を、表の方より射入れたるなり。いで事こそあれと、燈を明くして見れば、矢には書簡をさしくゝりて侍るに、とりて見れば、表には、「藤原惠美押勝が家臣、高橋手力これを贈る」と書いしるしたり。いと怪しと思ひて頓に開き見るに、その文に曰く、

事迫りぬれば何事もしるさず。此家には、鹽燒王ならびに不破内親王立忍ばせ給ふならん。今朝なん、弓屋の俊雄、人置の眞鮪が訟の場にかくと告げ來りぬ。やつがれ思ふ旨ありて、此神田部の訟所に、解部となりてあるが故に、早く御有樣を知れるなり。今夜子の時を過ぎば、神田部の守部等に此家を圍ませ、君達を捕へ奉らん。今唯今いづこへも立忍ばせ奉り、明けなば陸奥をさして下り給へ。みちのくの方には我友三田奇麻呂參り、又蝦夷の國にはすなはち我主惠美押勝參りて候に、尋ねあひて御上を賴み聞えよ。あなかしこ。

二月五日　　高橋乃手力

内舍人秦忌寸勝虎主
同　勝行主

と書止めたり。犬神その文をおし戴き、「さてもよく知れたりな。いと賴もしき人に逢ひつるかな。いで忍ばせ奉らん」と、まづ我妹を呼出で、「しかぐなり、今一時ばかりの間に立忍ばせ奉らん。いざ旅の御粧を如何樣にもかい繕ひ參らせよ。我もものせん」とて、かねて隱しおける草苞のうちより、太刀一振を取出でてわきばさみ、たすきをうながけ、脚結をゆひ、弟の勝行をも呼出でて、彼伯母がたばかりとれる三百枚の金を、袋に入れ、懷に收め、君だちには下部の簑笠をうち著せ參らせ、我はおほきみの御手をとり、

妻は内親王をたすけまゐらせ、勝行に御先をはらはせて、葛飾の方をさして出でぬ。さて子の時を過ぐるに、神田部の解部守部、所の刀禰等を先にたてて、繼松をふり、列を調へ、此家を五百重に圍み、門を開き戸をこじて、立入りて見れども、人とてはあらねば、「こは如何にぞ」とて、弓屋、人置の二人を招きて、物のくまびをもとめさするに、人は更にもあらねば、「心得もなき事を申して、訴所を騷し奉るよ。まづおのれらを縛りて事の分別を申開かせん」など、解部のともがらいひこらして、彼二人をいたく縛り、神田部の館をさして歸りぬ。

本朝水滸傳　終

竺志船物語序

予少與平士觀友善。士觀長於予二十歲矣。因稱忘年交焉。每相會。講論經史。育量詩文。時或及治道得失。人物臧否。未曾知其精國學也。後聞論者之言。言其於國學。傳賀茂眞淵之說。博洽精確。有青藍之譽焉。予悅吾友有此博雅之人矣。既而又聞之。其於和歌。豐艶高妙。不愧古之作者。與橘千蔭。唱大雅於關東。風靡一時。聲名藉甚。後進之士。仰如山斗。予又悅吾友有此俊逸之人矣。既而又聞之。其於和文。爾雅巧麗。獨步于詞林之間。先無古人。後無來者。蓋今古一人也。予又大悅吾友有此一代之偉人矣。唯恨予於國學。毫無知解。則予稱士觀。同于矮人觀場。隨人喝喫耳。雖然。毛嬙西施。天下知其爲姣麗之人矣。蘇秦張儀。天下知其爲雄辯之士矣。莊周左史。天下知其爲能文之人矣。顏淵曾子。天下知其爲德行之士矣。與天下之人。同其見。同其言。謂之公論。又